

越谷市郷土研究会会報 第十七号

古志加具谷

平成二十六年三月刊



砂原

H 16 17. am 9:30

巻頭言

研究している「トキ」ではないのかも――

NPO法人 越谷市郷土研究会

会長 宮川 進

3月22日夜。11時半ごろ、「ああ、『古志賀谷』の巻頭言も書けたし、もう原田さんに怒られることもなくなった。よかった」と思っ、床にいたのでしたが、2時に、はっと眼が覚めました。22日に浦和の幹書房から来た「なつかしの街さんぽ『埼玉』」という新刊書のことを思い出したのです。

何となく、気になっていたのは、草加のことです。起きて、その本の目次を見ると、あの観光地で「売っている」草加が1ページどころか、1字も取り上げられていないのです。

越谷は巻末の「その他の街」のところで2ページ。コンシェルジュとして協力させていたたので、掲載されて、うれしかったのですが、何か、草加は出てなかったような気がしていたのです。それを確かめて、これは大変！と、巻頭言を書き直しているのです。浦和、大宮から本庄、秩父、小鹿野まで、5区市町は6ページ建てです。そして、草加はゼロでした。これが出版元の幹書房さんの編集方針なのでしょう。きびしいものです。

草加が出てないのは、芭蕉の像と松並木では街さんぽはできないからでしょう。しかし、越谷も2ページです。版が重ねられてゆく過程で、いつゼロページになるかも知れません。

いや、最近の中心市街地の状況を見ると、次の版までもつかどうかの瀬戸際のようにも思えます。まだ、街さんぽができる越谷、これからの街づくりでヒトを呼ぼうという越谷です。6ページの枠がもらえる可能性も十分だと思いますし、この調子ではゼロになる危険性もあるのです。

郷土研究会の私たちも、ある意味では重い責任があります。越谷の面白さを人一倍知っているはずの私たちが、「研究」しているうちに、このホームグラウンド・越谷が跡形もなくなってしまうのは、どうするのですか。

委員長の原田民自さんはじめ、編集委員会の方々の献身的なご努力と会員の方々のご協力で、この会報「古志賀谷」17号ができました。皆さまに深い感謝をささげると同時に、草加の轍を踏まないよう、みんなで頑張りましょうとお願い申し上げる次第です。

目次

巻頭言

会長 宮川 進

聞き書き① 町村合併と万寿屋呉服店の話・会田礼三 1

聞き書き② 戦前から見てきた越ヶ谷小学校・染谷隼生 5

越ヶ谷御殿 加藤 幸一 10

恩間村の国学者渡辺荒陽に関する原資料 〃 17

越谷市内の高低測量几号 秦野 秀明 28

越谷型青面金剛像庚申塔 〃 41

名物鬼焼 白石 克 45

透関山の旗本矢場貞満の墓 山本 泰秀 47

越谷コラム① 越谷七不思議の選定 51

江戸時代の名物・間久里の鰻 宮川 進 52

越谷の六地藏石幢 松本 裕志 60

西方村旧記に見られる疱瘡・麻疹の薬 田部井 明 63



越谷コラム② 越谷駅東口 再開発で大きく変貌

増林に残る庚申講

尾川 芳男

64

とうかんぼうの狐火

鈴木 康央

65

瓦曾根溜井からの写真撮影場所の特定について

鈴木 恒雄

66

越谷町で起きた怪奇現象

原田 民自

67

越ヶ谷・越谷 と表記ある書物一覧

〃

68

越谷コラム③ 塗師市呉服店 絵葉書と冬物売出し広告

69

さようなら 越ヶ谷二丁目横断歩道橋

増岡 武司

70

日光街道ぶらぶら歩き 第四回

和泉 守

71

文化財パトロール

72

史跡めぐりの記録

73

各種イベントの実績

74

会員名簿 役員名簿

75

編集後記

76

表紙題字〓有元淳子

イラスト〓巻頭言・田端功政

目次・小泉平八郎

町村合併と越ヶ谷町の大呉服店「万寿屋」の話

平成 26 年 (2014) 1 月 22 日 大袋地区センター

会田礼三氏 プロフィール

お父様が昭和二十八年ごろに埼玉日報という新聞社を立ち上げ、齒に衣着せぬ独特な筆致で越谷を中心とした記事を書きあげる。昭和二十九年の町村合併時には大沢県知事に対し様々なアドバイスをした。また、明治初年から越ヶ谷町で大繁昌した「万寿屋呉服店」は会田礼三氏の祖父が興したものであった。同氏は現在、市文化連盟理事等で活躍されている。



会田礼三氏

会田さん、お忙しい中、お越しいただきありがとうございます。会田さんは現在、大道に住んでおりますが、以前は越谷市内の中心に住んでおられました。昭和二十九年の越谷町合併の時の内幕などのお話をお聞きかせいただきたいと思います。

会田 川柳村というのがあったのです。当時の県知事は大沢雄一という人で、よくうちの事務所に来て話をしていたのですよ。おやじはユウちゃん、ユウちゃんと呼んでいて、私は子供心に随分仲のいい友達だなーと感じていました。三郷出身の方です。おやじとよく飲んでいた姿を思い浮かべます。

当時、昭和二十九年ごろですか、越谷町の合併で川柳村がもめているということで、何か親父に言ってくれないかという内容なんです。

おやじが新聞記者ということで、普段から地元の町長とか村長に知人も多いのだから、その立場から合併についての情報が欲しいし、合併がすんなりゆくように取り持って欲しい、ということなのでですね。知事自身が出てゆくわけにはいかないので、身代わりで骨を折って欲しいという考えだったのですね。

結局、川柳村は昭和三十年に草加町と合併したんです。いわゆる越谷、草加への帰属を棚上げした上で、合併した後に協議しようということになったんです。川柳村の住民は越谷派が多かったのだけれども、いろいろと工作があったようです。川柳村会議員に声の大きい人がいたというか、越谷派もいたけれど草加に合併するのに賛成する人もいて、抑えきれなかったという事なんです。ところが、おやじは合併問題が煮詰まってきた昭和二十九年二月に、交通事故で亡くなったんです。生きていればこんなことはなかったと思うんですよ。

要するに、川柳村は草加町と合併して、その後、一部が越谷町に編入したのですから、昭和二十九年（一九五四）に越谷町が作った十町村には入っていないんですね。残念なことですが、親父が生きていれば、川柳村も合併の新しい町づくりで最初か

ら加わって、越谷町を作ったのは十一町村になったかも知れないですね。

川柳村が越谷の方へ向いていたというか傾いていたということは、越谷とのお付き合いが非常に長く深いという土地だったんです。派というものがあるんですが、川柳村は越谷派だったんですね。蒲生村とか大相模村とか新方村とかは間違いなく越谷派だったんですね。川柳村だけがもめちゃったんで本来だったら越谷に合併すると川柳村の皆さんが思っていたのに混乱してしまっただけです。

Q お父様が立ち上げた新聞社の話を聞かせてください

会田 おやじが勤めていた報知新聞という新聞社は当時、独立した新聞社で、経営がうまく行かなくなつて読売新聞との合併の問題が持ち上がったんです。読売は大衆向けで、報知新聞は今の朝日新聞よりもっと堅かったです。うちの親父は編集局長なんかやっていました。家族が反対したのですが、新聞社を辞めて来たというんです。その辞めて来た連中が埼玉新聞を作ったんですよ。その後、埼玉日報という新聞を立ち上げたんです。記事のほぼ全てをおやじが書いていました。おやじが立ち上げた時の「埼玉日報」は週刊だったんだけど、日刊にしようという話を持ち上がったんです。

新聞の印刷は浦和でしていました。自分はおやじが書いた記事を浦和に持って行ったという記憶があります。普段は浦和まで直接自転車で行くしかなかったんです。小遣いをもらうために何度も行ったことがあったんです。今は浦和美園駅までしか行きませんが、国際興業バスで浦和まで行ったこともありまし

た。今だったらパソコンなどで一瞬のうちに届けられるのが。

当時の新聞は、現在では県立図書館に一部が残されているだけで、ほとんどが消失したようです。新聞は家にたくさんあったんですが、みんな燃やしちゃったからね。いまから思えばお宝だったね。とっておけばよかったと思いますよ。



会田氏の父親が立ち上げた「埼玉日報」の題字

Q 越ヶ谷町で大繁盛していたという

「万寿（まんじゅ）屋呉服店」のお話を聞かせてください

会田 「万寿屋呉服店」はおやじの親の、自分にとっては祖父の善次郎という人が初代の経営者で、店舗は越ヶ谷町の旧街道沿いの新石町に明治の初めに開店したと聞いています。今の横田診療所の斜め前あたりにあったんです。先祖は庄屋をやっていたようで、長野県の出身らしいんですよ。

越ヶ谷町の呉服商のなかでは一番に繁昌した呉服店で、その万寿屋が我が家の屋号なんです。続いて親父の兄の正太郎という人が店を継ぎました。

今は跡かたもありません。店は昭和六年頃に潰れたんですが、相当負債があったようです。繁昌していたころは越ヶ谷町の財政の半分はうちが払っていたと聞いています。

戦前から見てきた越ヶ谷小学校

と越ヶ谷町関連の雑談



染谷隼生氏

染谷隼生氏^{としお} プロフィール

戦後、越ヶ谷町の消防団の一員として活躍し、越谷市になっても引き続き継続し、最後は副団長として勤め、平成十四年には、国より永年の功績が認められ、勲六等単光旭日章を授与される。

一方、三十六年かけた労作、越ヶ谷久伊豆神社の山車二台（大と小）を製作したり、新石三丁目自治会の会長として活躍したりして、現在も地元に貢献し続けている。

戦前の越ヶ谷尋常小学校の敷地は、現在の越ヶ谷小学校の約三分の二しかなく、現在の敷地の中央西側寄りには南北の道があり、その道を境に東側が当時の学校敷地で、西側は田んぼであった。正門は赤山街道側にあったが、現在は裏門となっている。

お住まいは、越ヶ谷小学校そば
生年月日は、戸籍上は
昭和2年1月11日と覚えやすく
するために1・11にした
本当は 昭和元年12月31日

戦前の越ヶ谷尋常小学校



上記の校舎の配置図は、越ヶ谷小学校の記念誌より抜粋
地図は、ゼンリン住宅地図「越谷市」(2006 12)を使用

昭和十五・六年頃にその南北の古道は廃止され、西側の田んぼは学校の敷地となる。この時、学校の敷地となった田んぼの南側半分より土をとり、北側半分に土盛りした。そのために、南側に大きな正方形の池ができた。戦前の校舎の配置は現在とはまるっきり違っている。

昭和二十年五月、染谷氏は講堂にて兵隊検査を受け、甲種合格となった。その時に講堂の裏の池で、三歳くらいの子どもがおぼれていたのを偶然に見た染谷氏は、いきなり講堂の窓から飛び出して池の中に飛び込み、子どもを助けた。検査をしていた憲兵は何事が起こったかと驚いたが、救助のために抜け出したことがわかると、子どもの救助後、憲兵から大いに感謝されたという。

下の写真は、大正十三年五月に撮影した越ヶ谷尋常小学校の「新校舎増築開校記念」の写真である。

写真正面の二階建て校舎が「新校舎」である。昭和四十年代前半に取り壊されるが、赤山街道側に後付けで付けられた新校舎の非常階段は、現在も滑り台の階段として残っている。

手前の大木は、当時の校庭の中央にある柳である。夏場はこの木陰で体操をした思い出があるという。この柳の老木は戦後の仮校舎創設の時に伐採された。

向かって右端の校舎は、写真手前の方にある赤山街道と平行して建つ平屋のL字型「旧校舎」のごく一部である。その旧校舎と新校舎の間にある建物は講堂である。

昭和二十四年三月二十日（日）に平屋旧校舎（六教室）の裏のゴミ捨て場（講堂隣の便所のわき）で朝八時三十分頃に火災が発生し、平屋は全焼し、隣の本校の誇りであった講堂も被害を受けた。ゴミ捨て場の穴の深さは一メートル、長さ二メートル五十センチ、奥行一メートルの大きさであるという。火の気の無い所の出火だったので、子供の火遊びが原因との噂があった。西側の二階建て新校舎（写真の中央）と旧校舎のL字の正門側の玄関を含む職員室等の平屋旧校舎部分とが類焼をまぬがれた。現在裏門となったところに、明治からの松がある。現在は裏

大正13年5月撮影の「越ヶ谷尋常小学校の新校舎増設開校記念」

正面の二階建て校舎が新校舎

写真の所蔵者は染谷隼生氏



門の南側にあるが、本来は裏門（当時の正門）の北側にあったものを現在地に植え替えたのである。

・越ヶ谷関連その1、観音横丁にあった防空監視所

観音横丁の観音堂の本堂の向かって右側の側面あたりに防空監視所があった。丸太で組んだやぐらで、高さは十二・三メートル。裏には六坪程度の小さな池があった。本堂の向かって右の斜め後ろあたりである。後に元荒川の河川敷きに移される。

・越ヶ谷関連その2、越ヶ谷の防空監視所

場所は、現在の新宮前橋の南詰めの南東、元荒川河川敷。住所は柳町五の一三から五の一四あたりである。

六人一組が五班あり、朝九時から次の日の朝九時まで二十四時間交代で監視した。他に監視を監督する所長一人、副所長二人いて、時々様子を見に来ていた。六人一組が防空監視所に上がり、二人ずつに組んで三組に分かれ、最初の一時間は、二人が双眼鏡で敵機の監視の歩哨に、次の二人が監視の報告を電話で浦和の本部に逐次報告する、最後の二人は休憩。これを一時間ごとに交代で繰り返される。つまり、三時間たつと、再び同じ任務に戻る。これを二十四時間で八回繰り返す。二十四時間が終了すると、次の班に受け継ぐ。次の班は、全く同様に朝九時から次の日の朝九時まで任務する。以後、これを繰り返すのである。この任務に、染谷隼生（としお）氏が携わっていた。

・越ヶ谷関連その3、東京大空襲翌日の越ヶ谷消防団の出動

染谷氏は、戦時中、越ヶ谷消防団にも属し、東京大空襲の翌日の朝に突然召集がかかり、東京の鎮火や防火のために所有する消防車二台のうち一台で出動した。道の両側が松並木の松で繁茂している草加の日光街道に、周辺村々の消防車合計十二台が、上空の敵機から隠れるように午後四時に集結した。暗くな

るのを待って、無灯火で東京方面に向かった。途中、千住大橋を渡った先の地下道に入って、宮城（皇居）に行くように命令され、日本橋川に架かる神田橋を渡って宮城（皇居）の二重橋付近に到着。翌日、悲惨きわまりない周辺の建物などの消火活動に携わったのである。そうした中で、「うちの家に放水してくれないか」と頼んだ人がいて、いきなり私の袖の中に何かをいれた。私はそれを見無視して懸命に放水活動をした。家に帰ってみると、袖の中に何か有るのに気付き、それが十円札と分かる。驚いて消防分団長に届けたことを覚えている。

・越ヶ谷関連その4、越ヶ谷の警察

新町の八幡神社の日光街道の東側に「マツザカヤストア」があったが、そこに越ヶ谷警察署が戦前から戦後の昭和二十二年頃まであった。

戦後になって昭和二十二・三年か、自治警察として、萬寿屋（現在の越ヶ谷三丁目五の九）の裏側、新国道の現在、水道企業団防災倉庫の所に移転し、わずかな期間ここで活動する。その後、大沢二丁目の現在の越ヶ谷市消防署のある所に移転する。その後、東越ヶ谷の現在地に再移転する。

・越ヶ谷関連その5、中町の交叉点にあった道標

佐々木薬局の前（北隣の江口靴店側そばの佐々木薬局前）に御影石でできている道しるべ、三十センチメートル角の高さ五十センチメートル程度の道標があった。上部は丸くなっていた。

・越ヶ谷関連その6、戦後の買い出し

四列に並んで、子供連れのお母さんなどが並んだ。駅（駅の現在の東口）より、線路と平行の道路を北に進み、赤山街道から東に曲がり、越ヶ谷小学校の正門（現在の裏門）のあたりまで、行列が続いた。上り電車に乗るための行列である。染谷隼

生氏は、その行列に並んでいる腹の空いた子供の様子を見て見過ごすことができず、自宅の畑でとれたジャガイモの内、屑のジャガイモを選んでゆでたジャガイモを竹で編んだ一斗ザルに入れて、ただで分け与えることにした。腹を空かした子供たちは飛びつくように群がり、すぐになくなると、また自宅で屑のジャガイモを蒸かした。った。子供たちは屑のジャガイモを競い合つて手に取り、むさぼり食べたのである。電車に乗る時は、電車の外にしがみついている人、電車の屋根に乗っている人などがいたのを見た。

・越ヶ谷関連その7・戦後の物不足

牛や馬を持っている農家の人は、牛車や馬車で、肥桶に米、じゃがいも、さつまいも等を入れ、都内に運んで売った。当然、食糧法違反である。売って空いた肥桶に各家を廻つて人糞をいれて、持ち帰つて、自分の畑の肥料にしたり、周囲の農家の人に売ったりしようだ。

・越ヶ谷関連その8・越ヶ谷町の夜警の詰め所

当時の町役場となつていたかつての万寿屋の一部が町の青年団の夜警（一晚中行つた）の詰め所として使われた。反物が飾つていたウインドウの部分（萬寿屋の向かつて左側端二間）である。夜警は交代制で行つた。戦前からみられ、戦後になつて、一二年程度か、間もなく見られなくなった。

・越ヶ谷関連その9・越ヶ谷駅に見られた乗合馬車と乗合バス
染谷隼生氏によると、乗合馬車の馭者（運転手）を勤めていた大野氏は、越ヶ谷駅近くの長屋に住んでいた。現在の旧・駅前通りに面したローヤルシティ越谷の南側空き地のあたりだそうである。乗合馬車を「ていと馬車」と呼んでいたとのこと。どのような字だかはわからない。

乗合バスは、赤山街道（安行方面）、吉川方面、野田方面の行き先のバスがあった。岡庭さんが経営した。

乗合馬車を廃止した黒田氏は、タクシー業に転業する。黒田氏のハイヤーは、戦前、戦中と続き、戦後は、黒田タクシーとして続いている。

・越ヶ谷関連その10・郵便局ができる前の郵便取り扱い所

郵便局は、かつては会田俊さんも所長として勤めた現在の横田診療所にあつたが、その前は、道路の反対側の現在の埼玉県信用金庫の場所である。ここに屋号が「松かん」と呼ばれた醤油や味噌を売る松本家の店があり、ここで郵便の取り扱いをしていた。

・越ヶ谷関連その11・六本木のはきだめ

戦前に見られた、六本木のはきだめは、戦中の昭和十八年頃まであつた。場所は六本木落しのあたり、現在のセブンイレブンの南側道路の反対側（元荒川側）。

・越ヶ谷関連その12・間口十七間の長屋門伝説

現在の鈴木米穀店の南側から埼玉県信用金庫までの間に、間口十七間の長屋門があつたとの言い伝えが残る。両側に男女の見張り番の部屋があつたと言われている。謎である。

・越ヶ谷関連その13・四丁野村の愛宕様

山口病院の西方の東武線の東側の四丁野道のそばにあつた。高さ三メートルの小山に愛宕様が祀られていた。その南側には、順正会設立に向けて活躍した高橋正義医師の医院があつた。また、現在の越谷小学校の北側にある四角い区画の住宅地は、かつて高橋氏が青年団と野球をよくやった空き地であつた。

・越ヶ谷関連その14・萬寿屋（現在の越ヶ谷三丁目五の九）

「萬寿屋」は、昭和の初め頃に倒産している。倒産する前に染谷氏が幼い頃、両親が萬寿屋の敷地内で餅つきをしてその餅を食べたのを覚えている。その後、建物は使われないうままであったが、昭和十四・五年頃か、町役場として使われ始めた。しかしその建物は昭和五十五・六年頃に取りこわされたという。それ以前の町役場は、越ヶ谷尋常小学校の赤山街道側に昭和十二・三年頃まで置かれていたという。二階建てである。なお、その町役場は壊され、戦後、越ヶ谷の図書館の前身が初めてここに二階建ての建物が建てられた。

萬寿屋に置かれた町役場のその後は、昭和二十九年の町村合併をきっかけに、昭和三十年にかつてのイトーヨーカ堂近くの越ヶ谷一の一に建てられた町役場であろう。昭和三十三年には市役所となる。そして、現在の地に越ヶ谷市役所が移転して建つのである。

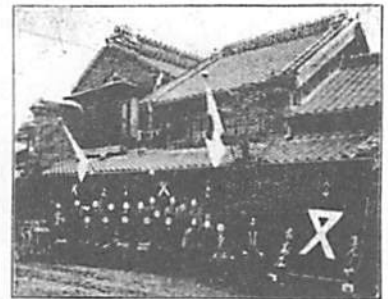
染谷家自宅には、鬼瓦を二つ保管している。萬寿屋の店の奥にあった母屋の鬼瓦とくんだり棟の瓦と萬寿屋の店舗の北隣の土蔵の鬼瓦である。

萬寿屋の「うだつ」は煉瓦で積まれ、高さは三メートル五十センチから四メートル位、長さは一メートル五十センチ、厚さは三十センチ。装飾と防火を兼ねた小屋根付きの袖壁である。「うだつ」は、平成二十五年十月十三日に取り壊され、萬寿屋の敷地跡は空き地となった。

戦争中の町役場として利用されていた萬寿屋は、その土蔵の屋根に空襲のサイレンを設置していて、十回なると警戒警報、一分間鳴りつきになると空襲警報を周辺に知らせていた。

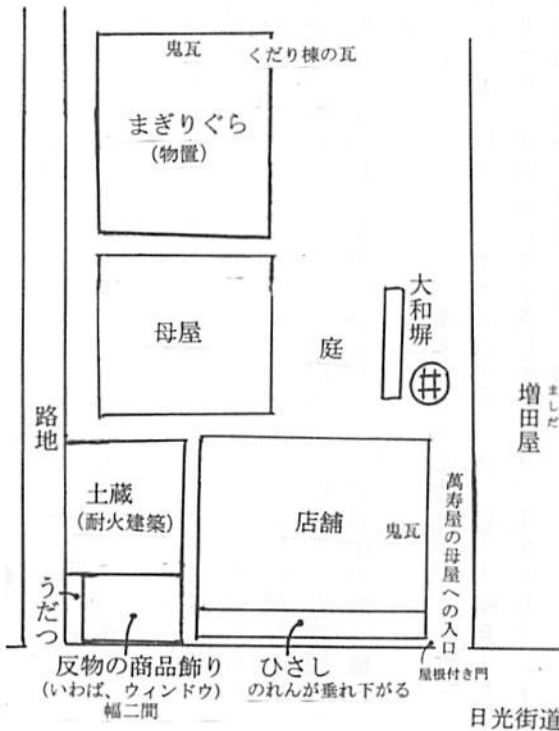
萬寿屋呉服店

向かって左端中央に
「うだつ」が見られる。



「うだつ」の残骸
二十五年十月十三日
加藤幸一撮影

萬寿屋の建物配置図（染谷隼生氏による）



越ヶ谷御殿

加藤 幸一

「広報こしがや」で、初めて『市史編さんだより』の連載記事が始まったのが昭和四十三年のことであった。最初に取りあげられた題材は越谷市内外の人が最も興味の引く「越ヶ谷御殿」である。以後、昭和六十三年の長きにわたって地元市民向けに郷土史をわかりやすく知らせてきた本間清利氏の功績は大きい。

(一) 越ヶ谷御殿について

越ヶ谷御殿は、将軍が鷹狩りなどの際の休息や宿泊としての施設であった。家康は越ヶ谷御殿を気に入り、たびたび越ヶ谷の地を訪れているが、徳川実記の中の「台徳院殿御実記」（台徳院とは将軍秀忠）の中で、越ヶ谷御殿に来て五日間にわたって鷹狩りを楽しみ、献上品や祝儀としても使われる最高級の獲物である鶴を十七羽捕まえてとてもご機嫌であったという記述があるほどである。慶長十八年（一六一三）十一月のことである。鷹狩りを家康に見習った秀忠も一ヶ月にわたって宿泊して鷹狩りに興じるなど越ヶ谷御殿が特にお気に入りであった。

初めの頃の鷹狩りの休泊施設は、忍、岩槻、川越などの城や寺院・神社、土豪層の屋敷などがあてがわれたが、後に特定の施設が設けられるようになった。これが御茶屋とか御殿と呼ばれる屋敷であった（本間清利氏著「御鷹場」三十四頁）。その一つが慶長九年（一六〇四）に増林の御茶屋御殿から移転してきた越ヶ谷御殿である。現在の御殿町あたりである。

当時は、元荒川は花田の周りを回って迂回して流れていて、天嶽寺、越ヶ谷久伊豆神社と四丁野（しちやうの）村の迎摂院

（こうしよういん）とは陸続きであり、越ヶ谷久伊豆神社は江戸時代を通して迎摂院の別当寺であった。当時の四丁野村（現・宮本町）はこの地まで続いていた広大な村であったのであろう。

天嶽寺の創建は文明十年（一四七八）であり、その後、小田原北条氏の支配下に入り、出城の役割を果たしたのではないかと推定されている。増林（ましばやし）の御茶屋御殿もかつては北条氏の鷹狩りの施設であったのかもしれない。後に関東に入国した家康はこの施設を継続して使ったのではないだろうか。まだ日光道中が出来ていなかった頃に、本格的な鷹狩りのため、増林の御茶屋の休泊施設を古奥州道の元荒川近くの越ヶ谷の宿駅そばに移転したのである。実記には「慶長九年、埼玉郡増林村の御離館を越谷駅にうつされ」とある。ここは中世末期より越ヶ谷郷を支配した会田出羽家の当主、会田資久（すけひさ）の広大な屋敷地の川沿い側にあり、六町歩（一万八千坪）もある自然堤防上の一等地であった。

迎摂院の創建は不明であるが、中興開基が天文四年（一五三五）であるので、それ以前であり、天嶽寺の創建よりも古いと思われる。それ故、久伊豆社の隣にある天嶽寺を差し置いて久伊豆社の別当寺であり得たと考えるのが自然ではないだろうか。明暦三年（一六五七）の江戸大火により江戸城が焼失すると、越ヶ谷御殿は解体されて江戸城二ノ丸の仮御殿となる。越ヶ谷御殿跡は「権現林」として残され、地元では「お林」と呼ばれた。江戸時代を通して幕府の「お見捨て地」として年貢除け地（検地帳の記載から除かれた土地）となる。

故・石塚吉男氏によると、越ヶ谷御殿の御殿番の小杉藤左衛門と浜野藤蔵とが共に代々御殿番を勤めていた。江戸城に移転し御林になっても続けていたと推定している。詳細は（五）に

記載した。また、「大沢町・越ヶ谷町の石仏」の「越ヶ谷25、小杉藤左衛門の板碑型墓塔」の解説文を参照のこと。

大正十年頃、元荒川を新しく掘削したとき、河川敷に越ヶ谷御殿の馬洗い場と思われる畳半畳敷きの大きな伊豆の小松石が6枚ほど発掘された。現在の葛西用水の伏越の西側である。大野伊右衛門氏が預かるが、その後紛失する。職人が黙って持っていく飲み代につかつたのではとの話が伝わる。この馬洗い場のそばに御殿の建物があったと推定され、ここに越ヶ谷御殿跡の記念碑が建った。現在の伏越出口の所である。

また、稲荷社が現在の建長の板碑そばにあるが、大正年間に元荒川の拡幅のために現在地に移転されてきた越ヶ谷御殿ゆかりの稲荷社である。移転前の稲荷社には三代將軍家光の直筆の額があったが、明治二十年頃に盗難にあつて、今はないという。

(二)「越ヶ谷瓜の蔓」に見る越ヶ谷と越ヶ谷御殿

「越ヶ谷瓜の蔓」は、福井猷貞(ゆうてい)が文化文政年間に書いた越ヶ谷町に関する地誌である。

〔原文〕

一、越ヶ谷と申名目ハ、奥州筋より登り候ニハ大沢の芝生川原より山の如き御殿地相見、元荒川の谷を越村と号せし也、其後町二成、小名相分レ申候ハ御高札元本村と云を本町と云、又慶安後、中町橋向ハ新規之町ゆへ新町と云、会田出羽持切之所ゆへ一組中町と号、二七市日ハ本町・中町ハ一並日也、元本道なれ共、日光道筋二相成申候儘横町と唱、中町本町之裏故袋町と唱、又其裏通御殿下というハ御主殿下通也、

〔意訳〕

一つ、「越ヶ谷」という名称のいわれは、奥州街道筋を北から江戸に向かつて上つて行き、大沢の元荒川の芝生の河原より対

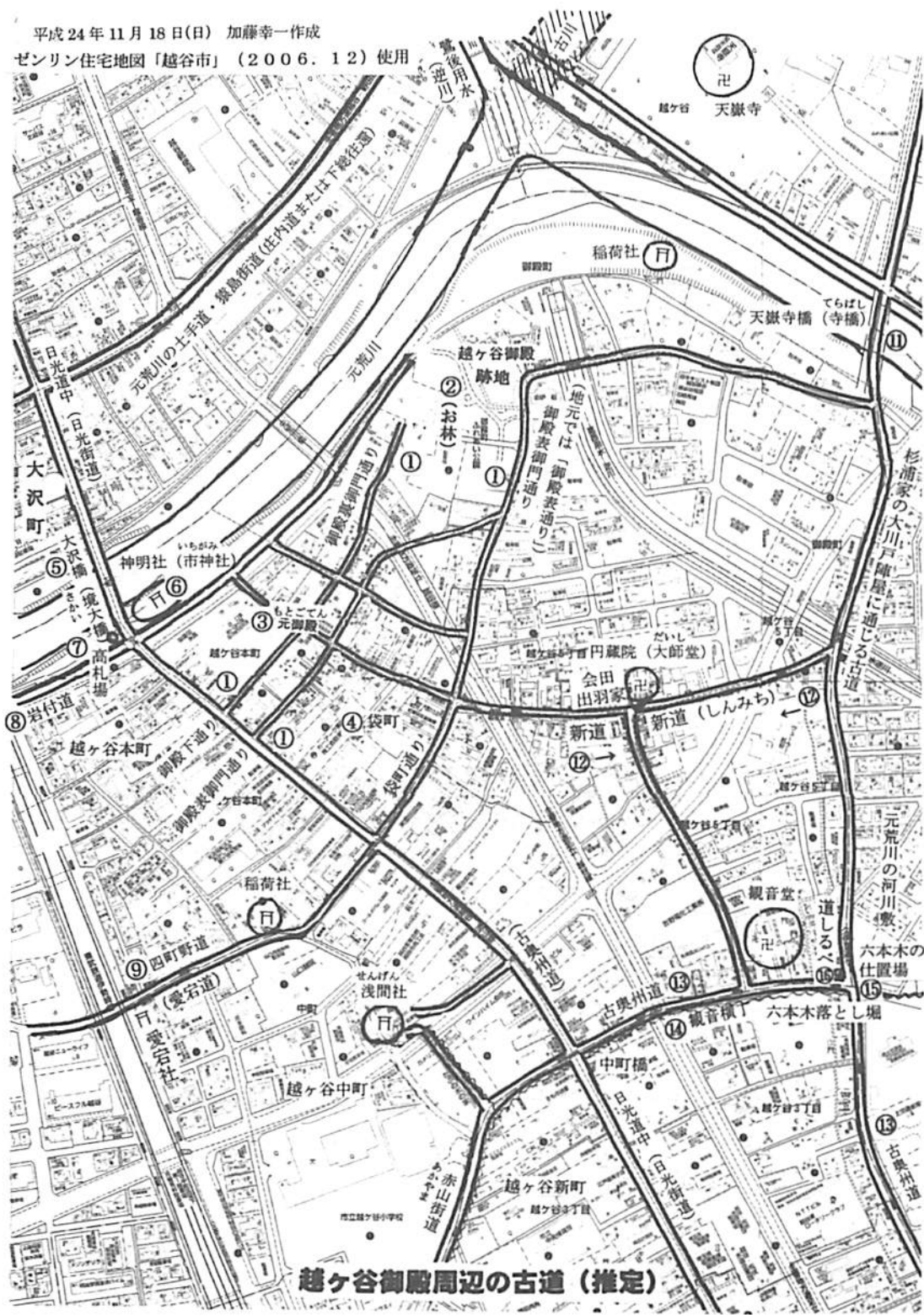
岸を見上げると、御殿の土地(元荒川の自然堤防の小高くなつた土地で、大正年間にかなり削られた※)が山のように見えて、元荒川の周辺の低地の谷を越す村という意味から越ヶ谷の地名が由来する。その後、町になり、町の中に小さな土地名が発生していくつかに分かれ、大沢橋たもとの南詰め東側の高札場のある一帯の元の本村を「本町」というようになる。また慶安年間(一六五〇年頃)以降、本町から見えて、日光街道に架かる中町橋(橋の下には六本木落とし堀が観音横丁の通りの南側に沿って元荒川に流れ注いでいる)の東の観音横町の通りの南側の方と西の赤山街道(現在の越ヶ谷小学校の南側の通り)の南側の方は、新規の町のため「新町」という。ご存知の会田出羽家の持ち分の中町橋の北側の一帯は、越ヶ谷宿の途中にあるゆえに、ひとまとめにして「中町」という。二七の市の日には本町と中町とも同じ日に一緒に行われる。元の奥州道の本道であつた観音横町の通り(南百から元荒川に沿ってやってくる土手道の古奥州道から西方に折れて赤山街道に続く通り)が、奥州道筋から日光道筋になつてから「横町」と呼ばれるようになる。中町と本町の東方の裏側一帯は袋のように成立した町なので「袋町」と呼ばれ、また、その元荒川側の裏通りの「御殿下」というのは、かつての越ヶ谷御殿に通じる「御主殿下通り」のことである。

※「山の如き御殿地」とは、高崎力氏によると、大正年間に越ヶ谷御殿地がかなり削られてしまい、その削った土は対岸の大沢側の河川敷に埋められて、大沢側は現在宅地化され、御殿側は前と較べて低い土地になつたという。

(三)越ヶ谷御殿周辺の古道

次に越ヶ谷御殿周辺の古道(推定)を描いた地図を掲載する。

平成 24 年 11 月 18 日(日) 加藤幸一作成
 ゼンリン住宅地図「越谷市」(2006. 12) 使用



- ①二本の御殿道・・・日光街道から越ヶ谷御殿に行く道。御殿下通りと御殿表御門通りの二本があった。二人の御殿番がそれぞれの日光街道からの入口で守っていたと思われる。
- ②お林（はやし）・・・「お林」と呼ばれたこの地域が越ヶ谷御殿のあった所と伝えられる。御殿地跡は、かつてはこんもりとした高い土地であった。江戸時代に書かれた「越ヶ谷瓜の蔓」には、「山の如き御殿地」と表現している。
- ③元御殿（もとごてん）・・・元御殿の地も御殿町の一部であったが、新国道ができてから御殿町は二分され、新国道の西側の御殿町が元御殿と名付けられたようである。
- ④袋町（ふくろちょう）・・・街道筋が商人の町に対して職人の町。
- ⑤大沢橋・・・正式には今でも「大橋」と言い、かつては武蔵国と下総国との境にある橋であったため、江戸時代は「境大橋」「境板橋」とも呼ばれた。
- ⑥市神（いちがみ）社・・・神明社とも呼ばれる越ヶ谷本町の鎮守。越ヶ谷に開かれた二と七の六斎市の市場の守り神である。
- ⑦高札場・・・大沢橋のたもとに、人々に知らせる立て札である高札場があった。越ヶ谷の一里塚もかつては一時的にでもここにあったのかもしれない。
- ⑧岩付（いわつき）道・・・岩槻に行く古道。
- ⑨四町野道・・・日光街道から四町野村（現在の宮本町）に行く古道。途中、高さ3メートルの小山に建てられた愛宕社（迎摂院が別当）があるので「愛宕道」とも呼ばれた。
- ⑩赤山街道・・・日光街道から赤山陣屋に行く古道。「鳩ヶ谷道」ともいう。新地名に赤山町があるが、赤山街道に由来。
- ⑪寺橋（てらばし）・・・現在は、「宮前橋」と呼ばれている。江戸時代は「天嶽寺橋」と呼ばれた天嶽寺ゆかりの橋。

- ⑫新道（しんみち）・・・文政年間にできた会田出羽家から越ヶ谷の久伊豆神社に行く古道。新しく作られた道という意味で「新道」と名付けられ、地名として今日まで残っている。
- ⑬古奥州道・・・江戸時代以前からあった奥州（東北地方）に行く古道。直線の日光道中は江戸時代にできたもの。
- ⑭観音横丁・・・沿道に観音堂があるので、このように呼ばれた。江戸時代以前の道で古奥州道と思われる。
- ⑮六本木の仕置場・・・ここで処刑が行われた。そばに中町橋方面から観音横丁に沿って流れてくる六本木落としがあった。
- ⑯土手道から観音横丁に下る角にあったと思われる道標付きの庚申塔。現在は中町の箕輪家で保管されている。



此方（このかた）
道

蔓延元庚申歳十一月建之（一八六〇年）

庚申塔

大さがみ

此方（このかた）
道

なりた

はとがや

此方（このかた）
道

かわぐち

(四) 増林の御茶屋御殿

越ヶ谷の現在の御殿町に御殿ができる以前は、徳川家康は鷹狩りで増林の御茶屋御殿に立ち寄っていた。増林にあった御茶屋御殿が、当時の奥州道（吉川橋下流の中川から元荒川の右岸に沿った自然堤防上の道）筋の元荒川そば、現在の御殿町に移されたのは、慶長九年（一六〇四）のことである。その後になり新しく作られた日光街道（奥州街道）の東側に位置している。

移される前の増林の茶屋御殿はどこにあったのか。越谷市教育委員会発行の「越谷市の文化財」では、「この林泉寺周辺は、徳川家康が設営した御茶屋御殿が建てられていた所であった」としている。増林の茶屋御殿に関しては、その他に『城之上』説が地元にあるので、これも含めて紹介をしたい。

① 林泉寺の御茶屋御殿説と『御殿』石塔

林泉寺に「御殿境内」と刻まれた標識石塔がある。「御殿」とは、慶長九年まで増林にあった御茶屋御殿を指すのであろうか。林泉寺の観音堂あたりが「御殿境内」としている。すぐそばには古利根川が流れ、水上交通の便利な所である。この石塔には造立年代が刻まれていないのが残念である。「御殿」の文字がいつ刻まれたのか、その年代がわかればこの石塔の信頼性が高まるのである。

その石塔に刻まれている内容を次に紹介する。

◎『御殿』文字付き巡礼標識石塔

所在地 増林・林泉寺境内の観音堂前

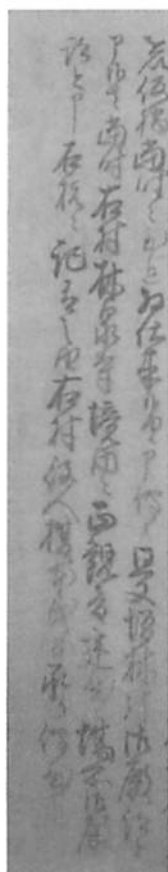
以前は山門そばに六阿弥陀石塔と対になって置かれていた。石塔型式 角型カ（南東向き・高さは中）

年 号 不詳



さらに、西方（にしかた）村の「旧記老」の資料の中の秦野秀明氏から指摘された部分の原文を紹介する。文政年間に作成された文書で、「越谷市史 続史料編（二）」の一〇四頁に記載されている。「」と「（）」内の文は加藤が加筆した。

「増林村御殿跡と申候は、当時（現在という意味）、右村（増林村をさす）林泉寺境内ニ正観音建置候場所、御殿跡と申石杭（いしぐい）ニ記（しるし）有之由、右村役人榎本氏（現、増林三八九〇の一の榎本家）方（より）承り伝置候」つまり、林泉寺境内の観音堂（正観音を祀るお堂で、「子安観音」として盛んに信仰された）の地に「御殿跡」と刻まれた石杭があるという。前述の「御殿境内」と刻まれた『御殿』文字付き巡礼標識石塔が、その石杭ということになるのであろうと裏付けできる貴重な文書資料である。



②地元の城之上説と『お狩場茶屋』

昭和四十五年三月、越谷市発行の「こしがや」に掲載された年表の中には「慶長9年 越ヶ谷御殿が建てられる。増林宇（あざ）城の上より移す」、さらに平成十年十一月発行の「市制施行40年の足跡」では、「城の上と称された増林のお茶屋御殿を荒川（現在の元荒川）沿いの越ヶ谷郷の豪族会田出羽の陣屋へ移し」と記述されている。増林の御茶屋御殿は、この時点までは、言い伝え通り『城之上』（しろのうえ、しろのえ）にあったとされていた。その場所は、かつての元荒川筋である古川の自然堤防上（かつて煉瓦用の土として表土が削り取られた）である。

今井基善（もとよし）氏『増林三二五九』によると、「『城之上』には、昔、將軍様が狩り（鷹狩り）に來た時に利用する『お狩場（かりば）茶屋』（狩りをする鷹狩りの茶屋という意味）があり、將軍様が來ることから、このあたりを（城という字を使つて）『城之上』と名付けられた。」との昔からの言い伝えがあったという。この「お狩場茶屋」は、狩りをする時の休憩所という意味で、幕府の茶屋御殿であつたに違ひないと思われる。小島初治（はつはる）氏『増林一の一、旧・増林村城之上』は、今でもそのように理解している。地名に「城」の字が付いていることから、「ここに何か城のような重要な施設、お狩場茶屋があつた。」と信じられてきたのである。茶屋御殿が現在の増林城上のどこにかあつたというのが城之上説といえる。さらに城之上説とは違つて、もう一つの説がある。野口豪氏『現、東越谷一〇の一〇六の一、旧・小林村上側（かみかわ）』の主張によると茶屋御殿の場所は次の通りである。

野口宅の北東方向一〇〇メートル先の、増林村城之上と小林村上側（かみかわ）との境界付近の小林村側に、通称「上屋敷

（かみやしき）」（現在の東越谷一〇の一〇八）と呼ばれた土地がある。「上側」は「上屋敷の側（そば）」という意味ではないかとし、「小林村側ではあるが、由緒ある茶屋御殿跡に、後世になつてから上屋敷と呼ばれる建物ができたのであろう」と推定している。茶屋御殿と上屋敷とを結びつけたのである。

この上屋敷の地は、古川（かつての元荒川）の左岸（南側）そばにあり、水上交通としては便利な所であつたに違ひない。野口豪宅の裏（北側）は、高い土手が古川に沿つて続き、その先に古川が東から西へ流れ、東越谷小学校の校舎あたりを通り、現在の元荒川へと続いた。

なお、元荒川が天嶽寺前から小林村まで現在のように直道に改修されたのは、茶屋御殿が移された後の寛永年間の頃（寛永六年説あり）と推定されている。それゆえに茶屋御殿があつたのは、元荒川が花田村を迂回して流れていた頃のことである。

「城之上」説には、「御殿」と刻まれた石塔などの物証がないのが残念であるが、城之上説をとると、御殿町の越ヶ谷御殿は同じ元荒川の自然堤防上を移転してきたと言えるし、元荒川の自然堤防上の一部には、奥州街道もあつた点からすると説得力がある。古くからの言い伝えである城之上説も何らかの根拠があつて言われてきたのであろうから無視はできないのである。

江戸時代初期の「城之上」の範囲はもしかしたら現在よりもはるかに広がつたかもしれない。そのように仮定すると、古利根川の自然堤防上に位置する林泉寺にあつたとされる茶屋御殿が実は城之上のはずれとなり、城之上に御殿があつたとする言い伝えと矛盾が生じないし、城之上説をさらに進めた野口豪氏の古川の自然堤防上の「上屋敷説」も理解できるのである。

増林の御茶屋御殿に関する貴重な情報に感謝する。



(五) 御殿番の小杉藤左衛門の墓塔

小杉藤左衛門は、越ヶ谷御殿が江戸初期の慶長年間より現在の越谷市御殿町に置かれていた時、浜野藤蔵とともに代々御殿番を勤めていた。ところが、明暦の大火（一六五七）で江戸城内も焼失すると、この越ヶ谷御殿が江戸城に移され、この地には御殿がなくなり、御林のみとなる。それ以降も両人は御林守（おはやしもり）として勤めていたと思われる。

故人となられた越谷市郷土研究会元副会長の石塚吉男氏の昭和六十年の第十七回越谷市民文化祭出品原稿によると、次の通りである。

「その墓は、越ヶ谷の天嶽寺の山門の前にある無縁墓地の西隅の片かげに置かれてある。

小杉藤左衛門は、新編武蔵風土記稿の「越ヶ谷宿」の御守殿蹟の項に、(略)とある。

この中で、小林藤左衛門とあるのは、明らかに小杉藤左衛門の誤植で、福井猷貞著の、「越ヶ谷瓜の蔓」には、(略)とあるが、小田原北条家の浪人と伝えられる小杉家は、いつの頃家系が絶えたのか、離散したかは定かでない。その後、永らく隣の墓地の所有者が好意をもって管理されていたが、先年墓地整理のため無縁となったとのこと。

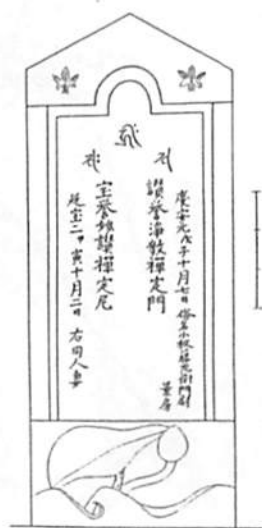
越ヶ谷御殿が幻の御殿となつてゆく過程がここにもうかがわれる。」

ここに出てくる「御守殿」とは、御主殿の意味であろうか。石塚吉男氏は、新編武蔵風土記稿の中の「小林」は、「小杉」の誤植であると指摘し、誤りを後世に伝える貢献をした。

最後に、小杉藤左衛門の墓塔を紹介する。

25^{越ヶ谷}

小杉藤左衛門の板碑型墓塔



所在地 越ヶ谷・天嶽寺参道脇の無縁仏の墓所、

最後列北西隅

石塔型式 板碑型（北東向き・高さは高）
年 号 延宝二年（一六七四）

〔正面〕

（沢瀉紋）

慶安元

子十月七日

俗名小杉藤左衛門尉

（梵字サ）

讚譽浄教禅定門

景房

（梵字キリーク）

宝誉妙讚禅定尼

（梵字サク）

甲

（沢瀉紋）

延宝二 寅十月二日

右同人妻

※主な参考文献

本間清利氏著「御鷹場」（埼玉新聞社）

「広報こしがや」の「市史編さんだより」1、88、89、271

恩間村の国学者渡辺荒陽に関する原資料

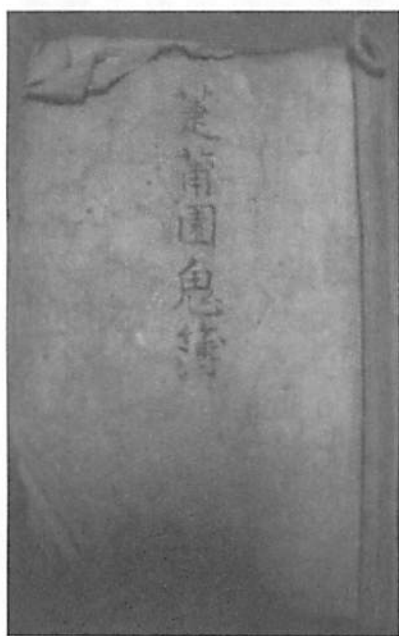
加藤 幸一

渡辺荒陽は恩間村の世襲名主の渡辺家の出で、宣直の次男として生まれた（長男は夭逝）。荒陽は、長男と長女を家に残し、次女、三女とともに江戸に出て、次女は国学と歌道に、三女は和歌学に名声をあげる。

晩年は国学に転じ、荒陽は長男とともに平田篤胤の門人となり国学者として知られ、長男も槍術家として名声をあげる。

（一）渡辺家の鬼簿（過去帳）

最初に紹介する資料は、渡辺家に保管されてきた、天明七年（一七八七）十一月、荒陽筆の鬼簿（過去帳）の「□莆園（しようふえん）鬼簿」（□は、走の字に草冠が付いた文字）である。私が調査する以前には非公開とのことであった。渡辺荒陽に関する研究には欠かせない資料なので、今後の研究に役に立てばと思い、紹介することにした。



楚苗園鬼簿叙

我先不詳所出蓋戰國之時避亂而
歸農者也父老相傳謂五百年來居於
土兵中罹災家譜及所固有譜牒
灰燼因是先世謚諱亦不可識
可哀哉望也不肖曾服遺教之

遂其人輒訪問以此事然終無知者
悠三蒼天復無奈何而已蓋本邦俗
所傳之鬼簿帝誌其戒名者名氏
不可識也已故有後世無所為者
如無其乃以一小冊子今誌其可知者
自今以往令子三孫三識之聊以啓懷
沈思其所稱之九族以望之身為已誌
孫其記稱望百拜書天明丁未仲冬
十有九日

渡邊之望百拜書

渡邊氏家譜

人皇五十六代

嵯峨天皇

源融

從二位左大臣

母大原金子
宣平七年號年七十
贈從位

昇

氏部卿正三位大納言

延長年六月廿九日薨

行年七十一

仕

武藏守從五位下

完

箕田源次

綱

渡部源次別當
內舍人

久

鎮西松浦之祖
源次別當

紇

松浦

貞

直

源大夫

聞

源大夫

收

堅

專

源大夫

聞

源大夫

收

豎

傳

源大夫
從五位下

重

鳥羽院北面

滿

省

渡邊播磨守

昇

源五郎

保元平治之時賴政同味

競

渡邊播磨守等

親

源五郎

教

源五郎

連

渡邊源太

尋

唱

長七

道光

佐介 武藏國
郡長

寬永十七庚辰四月其終

宗運

佐介

寬永十八辛巳九月二日終

親

召佐介當世時阿部對馬守正盛公為

宗運

佐介

寬永十八辛巳九月二日終

親昭

佐介當世時阿部對馬守正盛公為

磐城城主以親昭於磐田事有功賜三千步田令不出租稅以傳子孫至今子孫有其田 貞享元年甲子閏七月其終

貞吉

左介當世小笠原佐渡守長重公為

磐城城主以村磐城所治也去佐字夫旁以為榮云

娶郡守宿部長閑根總右衛門之女

正德四年十月二日有旨終享年六十六

當世殿時家祿安祿是初不廢德力云

女

適于郡守宿部長閑根總右衛門

直吉

左介晚號遊翁北總為飾郡華橋郡長

知久氏第十男配貞吉女為嗣

當時磐城城主永井伊賀守直陳公曾田獵慈藏庵廬賜國歌一首以稱長壽以為橫幅今尚存

直吉

左介晚號進翁北總着飾郡華橋郡長

知久氏第十男配負吉女為嗣

當時磐城城主永井伊四郎守直陳公將

田獵憩蔽廬賜國歌一首以稱長壽

以為橫幅今尚存

寶曆十二辛巳十有二月十有日終享年六十六

早死

男

適于州源作村長八木橋七共衛

女

適于州上尾驛林源共衛長宗

女

直吉妻

女

寶曆十四甲申二月二十有三日終享年六十六

直喬

左介晚號高史

娶郡馬込村長岡根德右衛門之女

當時時永井直陳公為磐城城主直喬

為御官教有功見褒賞

天明七丁未十有月十有日終享年六十六

適于州上尾驛長林八郎右衛門長忠

女

適于郡伊原村長源井宇内定元

女

女

娶郡馬込村長岡根德右衛門之女

當時時永井直陳公為磐城城主直喬

為御官教有功見褒賞

天明七丁未十有月十有日終享年六十六

適于州上尾驛長林八郎右衛門長忠

女

適于郡伊原村長源井宇内定元

女

適于郡安堵村長中村源吾衛門

女

為中村源吾衛門繼室

女

宜直

左介初名直宜

娶郡袋山村長細沼吉左衛門之女

寬政三年三月十有日終享年六十六

女

適于州尾驛村長黑須助右衛門政春

直芳

左忠治

為郡教託邑市街長藤田甚左衛門嗣

女

適于郡瓦葺村長中村茂左衛門定邦

女

夭

男

富之助大

之

宇高夫攝政之助後任于高田藩攝

之明王

字高夫攝政之助後仕于高田藩攝

源太共衛又政源太左衛門之次女

寶曆三年三月十有五日生於武藏國河原郡
弱冠從戶崎輝芳學制新從太田晴字
館街從河保壽學書

娶郡和室縣長岡根治而共衛福宣之
生二男三女女則根氏之孫室以正其家
原町增田氏之女沒又娶越谷遠藤氏
殆年出居于江戸業儒從字之古橋亮
陽先生成宗學書讀其傳家之書
讀甲州家之兵法寬政十已未八月
入高田藩因藩主命書讀其傳家之書
昭卿之輔執其政事享和二年

昭卿之輔執其政事享和二年

五十學運筆最說道風朝臣之

筆法文化元年甲子秋九月

康米而猶輔昭卿依其請也

同九年壬申正月去昭卿之賜而

山李氏之賜第家居焉以與昭卿

故也昭卿亦世稱其學不

皇國之人其素儒之非也止教授退隱

讀國典或時玩俳諧狂句詠和

歌倍講皇國之道著一家之書

數篇報世神道者流儒者佐者

數篇報世神道者流儒者佐者

整者天文者國學者其他雜技

之徒乃覺世俗之厭

天保九年戊三月朔日終享年八十

有七

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

女

縫殿之助後稱左介居于恩國村

宇繼卿字劍術於戶崎輝芳

文化元年六月死年百

昭卿大傳也昭卿之女

昭卿大傳也昭卿之女

宇白弄瓦又稱多勢子初學尊國家

之書於外至之閣根福宣因曾國氏後來

江戶從信夫道別學書及國學又學

和歌出為平春海之嗣游說于諸

侯間內

駒

駒之助後稱源九郎號青海童宇長
又改駒字又稱源太左衛門

坂高田藩士村上太助之女

初學書於熊山先生母何先生物故後

又學南溪先生從松田先生學繪

學劍術於榊原昭卿子從関口先生講

調馬從細井忠雄學真野家甲冑古

實製製作又從箕田保明講調馬而

鎗術及甲冑古實製作從本之

士年成君年丈政四年辛巳七月九

為高田藩臣同五年八月八日賜知行

扶持十口而加十騎之列代々當指前

種田流鎗術真野流甲冑古實製作

若用之命初言九日進用主君

字品槐花號三年年之稱之是也

女
吉子

初學書於熊山先生又學書南溪子

與女兄名字初敬侍主君為在御侍

又仕于松平大和守夫人又仕于松平侯

關内從于其公主適米澤侯關内

義

嘉應元年改書曆

享和元年四月生

娶馬越村周銀藏君之女

恩間渡辺家所蔵の古文書「葦蒲園鬼簿」

(表紙)

「葦、蒲、園、鬼、簿」

作成者 加藤

※渡辺荒陽によって天明七年(一七八七)

に書かれた。

※葦蒲：堯帝の時に生えたという、

めでたいしるしの草の名

※鬼簿：過去帳 蓋……蓋(けだし)

※而……しこうして 謂……いう

※矣……置字 中……うち

※蓋……ことごとく 為……なす

※因……より 諡諱……「おくりな」といみな

※望……荒陽 曾……かつて 乃……すなわち

※毎……こと 輒……すなわち 焉……置字

※無奈何……いかななく 而已……のみ

※音……ただ 誌……しるす 名氏……名字

※則……すなわち 已……「已」すでに

※故……古い 茲……ここ 自今……今より

※以往……以後 令……命令 聊……いささか

※啓……ひらく 已……「已」(おのれ) 誨……これ

※九族……高祖父から玄孫までの九代の親族

※仲冬……陰曆十一月 天明七年……一七八七

※二十有九……二十九

※頓首……終尾に書いて敬意を表す語

葦蒲園鬼簿叙

我先、不詳所出、蓋、戰國之時避乱、而

歸農者也、父老相傳、謂五百年來、居於此

土矣、中、罹災、家譜及所固有簿書、盡為

灰塵、因是、先世諡諱亦不可識矣、嗚呼

可哀哉、望也、不肖曾服追遠之厚德、乃每

逢其人、輒訪問以此事、然無知者焉、

悠二蒼天復無奈何而已、蓋本邦俗間、

所傳之鬼簿、蓋、誌其戒名者名氏、則

不可認也、已故、有後世、無所考者、余

如茲矣、乃以一小冊子、今誌、其可知者欲、

自今、以往、令子二孫二、識之、聊以、啓懷旧之

沈思矣、所稱之九族、以望之身、為已萬子

孫、其記緒、望百祥書、天明七丁未仲冬二

十有九日

渡邊之望百祥頓首

恩間渡辺家所蔵の古文書「渡邊氏家譜」

(表紙)

「渡邊氏家譜」

作成者 加藤幸一

渡邊氏家譜自序

吾家藏一片石、如誌石者、私以當宗祐、其面、動員多羅一字及文保二年八月六字耳矣、無所謂或名者、母論諱諱、名号也、但世二相傳、開祖之諱云由、此思之通光、前既已居于茲土也、蓋數世矣、然正保中、當觀昭之世、罹災、家譜及他諸籍、盡為祝融氏所奪、是以、中世諱諱年歷、不能詳悉焉、望也、不肖、嘗以之、為吾憂也久矣、或訪諸古老、或索諸菩提寺鬼簿、若搜諸數國小史、皆無足徵者、數歲之後、安永四年乙未夏、遇見、郡庄內倉常部醫生、田中松亭者、請次及此事、乃曰、吾本姓亦渡邊氏也、家譜今尚存焉、於是、吾說喜可知也、即請、得其副本、而閱之、但是末俗無稽、擬作可據者、概少矣、蓋、非以欺余也、若、自其先、世傳、為其子孫者、不知、而秘藏者、於是、吾望、亦可知也、望也、區、求失術、然而思之、又重思之、武藏守之後、渡邊氏之浮沈者數人、其為、松浦氏之祖者之外、仕于高倉王者有焉、與於源賴政知仕、而戰死于和州免道者亦有焉、是以其為子弟者各數、而適四方或群聚、而傳異者亦先世相傳言、吾家系繁長、七唱之一支屬、矣因以、通光嗣于尋前後、相連合、聊以、營懷舊之沈思、用以報宿志而已矣、且以年歷考之所藏之如誌石者、蓋尋之、焉、獨者也、與其事難似、牽強附會是亦追遠之一端、不能止之鄙衷也、萬子孫、其思諸、天明七年丁未冬十有二月朔、於東武陽磐筑所治崎王都恩間、不肖商孫之望萬夫拜稽首誌

家譜・一家の系譜自序・著者自らの序文

家譜・しるす者・は 勳・きさむ

家譜・而巳のろ・矣・置字・母・ない

家譜・おくりな諱・いしるな 闕・いしるな

家譜・没年は寛永17年 蓋・けだし

家譜・以前正保・寛永の次・為・なる

家譜・没年は貞享元年 祝融氏・火災

家譜・荒陽のこと 年歴・多年の経歴

家譜・かつて 索・求める 鬼簿・過去帳

家譜・もし 搜・さがす 安永四・一七七五

家譜・たまたま 郡・庄内郡 郵・村

家譜・は 乃・すなわち 亦・また

家譜・置字 即・すなわち 聞・ある

家譜・根拠がないこと 擬作・偽作

家譜・扱へる 概・おおむね 自・より

家譜・たる 者・は 於・おい

家譜・欠望(いねがう) 區・ただし

家譜・かきかて 之・これ、の

家譜・高倉王・高倉天皇 仕・つかえる

家譜・与(ともに)

家譜・源賴政・平安末期の武將 詳・避ける

家譜・つなぐ

家譜・いささか 宿志・宿願の意

家譜・は 闕・いしるな

家譜・こじつけ 附會・こじつけ

家譜・先祖の徳を追慕し、供養すること

家譜・自分の心をへりくだったという語

家譜・岩槻 商・とおい、すえの

家譜・望萬夫・荒陽 稽首・頓首の意

家譜・以上は、天明七年(一七八七)の荒陽著

文政十丁亥春、更加一校、浄書、而蔵于殿中、以副本與、左介云、

渡邊氏家譜 謹記

幸これ以下は、文政十年(一八二七)に作成

八皇五十二代

醍醐天皇

源融

母大原金子

寛平七年癸年七十

贈一位

從二位左大臣

昇

民部卿正三位大納言

武藏守從五位下

延喜八年六月廿九日薨

行年七十一

渡部源次別當

鎮西松浦之祖

源次別當

松浦

寛田源次

内舍人

久

糾

貞

直

聞

源大夫

源大夫

源大夫

源大夫

源大夫

源大夫

源大夫

源大夫

直吉 左介晚號遊翁北總葛飾郡葦橋町長

知久氏第十男配貞吉女為嗣
當時盤城城主水井伊賀守直隆公書
田與慈嚴盛國歌一首以稱長壽
以為續編今尚存

寶曆十一年己未十月十四日終享年八十有六

男

早死

女 適于州深作村長八木橋七兵衛

女 適于州上尾驛林源兵衛長宗

女 直吉妻

寶曆十四甲申二月二十有三日終享年八十有六

左介晚號高曼

直吉 康郡馬込村長間根德右衛門之女

當此之時水井直隆公為盤城城主直吉
為御官數有功見褒賞
天明七丁未十有一月十有一日終享年八十有六

女 適于州上尾驛長林八郎右衛門長忠

女 適于郡伊原村長深井宇内定元

女 適于郡塚塚村長中村源吾衛門

女 為中村源吾右衛門繼室

女

左介初名直宣

直宣 康郡袋山村長細沼吉左衛門之女

寶政三辛亥三月廿有四日終享年六十有六

女 適于州瓦葺村長黑須助右衛門政春

女 左忠治

直葵 為郡盤城邑市街長勝田甚左衛門嗣

女 適于郡瓦葺根村長中村彦左衛門重梁

天

奈天……若死にする

男 富之助天

字萬夫、稱政之助、後仕于高田藩、稱
之望
源太兵衛、又改源太左衛門、又改玄孫、

寶曆二壬申二月有五日、生於武藏恩間郡、

弱冠從戶崎輝芳字劍術、從太田小膳學

劍術、從河保壽字書、

順、郡柏壁職長、閩根治郎兵衛福宣之女、

生二男三女、閩根氏沒、繼室以上毛吾妻郡

原町增田氏之女、沒、又取越谷連藤氏、

強年出居于江戸、業儒、從學之士、稱荒

陽先生、成一家學、嘗講大坪家之訓馬、

諱甲州家之兵法、寬政十一己未八月六日、

入高田藩、因藩主命為本藩支流同姓、

昭卿之輔執其政事、享和辛酉年

五十字運筆、最、說道風朝臣之

筆法、文化元年甲子秋九月、辭

廩米、而猶輔昭卿、依其請也、

同九年壬申正月、去昭卿之賜第、而移

山本氏之賜第家居焉、以與昭卿義絕

故也、昭卿者世稱平原平十郎、

山本氏世稱喜平治、皆筑址也、

皇國之人、業儒之非也、止教授、退隱、

詠 國典、或時、玩俳諧狂句、詠和

歌、倍講皇國之道、著一家之書、

數篇、鞭世、神道者流、儒者、仏者、

醫者、天文者、國學者、其他雜技

女

天

奈字……あざな

寶曆二……一七五二年 都……村

奈弱冠……年の若いこと 從……より

奈戸崎……戸ヶ崎 順……嫁

奈郡……増玉郡 女……むすめ

奈繼室……後妻 上毛……群馬県

奈因……より

奈輔執……輔弼(政治を助ける)の意か

奈道風……小野道風(三蹟の一人)

奈廩米(りんまい)……扶持米

奈輔……たすける

奈賜第……賜邸(拝領の屋敷)

奈與……と 義絶……縁を絶つこと

奈者……は

奈玩……もてあそぶ

奈倍……ますます

奈鞭……むちうち

奈天保九……一八三八

太眼 縫殿之助、後称左介、居于恩間村、

字琳卿、字劍術、戸崎輝芳、
文化九年壬申六月死、二十七、
娘、郡大澤町戸張氏之女、

女 適于郡柏壁駅金子某、

字曰弄瓦、又称多勢子、初学專圖家
之書於外王父間根福宣、因習間根、後來
江戸從信夫道別、字書及國字、又字
和歌、出為平春海之嗣、游説于諸
侯内、

駒之助、後称源九郎、号青海童、字長鳴、
又改強、字又称源太左衛門、
娘、高田藩士村上太助之女、

初学書於熊山先生、母何先生、物故後、
又学南溪先生、從松田先生学、繪術、
学劍術於神原昭子、從関口先生講
調馬、從細井忠雄学、真野家甲冑古
實製作、又從眞田保明講調馬、而
繪術及甲冑古實製作、從文子之

士年成群、文政四年辛巳七月九日、
為高田藩臣、同五年八月八日、賜知行、
扶持十口、而加十騎之額、代々當指南
種田流繪術、真野流甲冑古實製作
著用之命、翌日九日、進見主君、

字曰桃花、号三千年之律子、又貞子、又
吉積子、

初学書於熊山谷先生、又学宮南漢子
與女兒文子、和歌仕于有馬左兵衛佐夫人、
又仕于松平大和守夫人、又仕于藤州侯
内、從于其公主、適米澤侯内、

奉縫殿之助：「ぬいのすけ」と読む

奉字……あざな

奉娘……嫁 郡：埼玉郡 女：むすめ

奉適……嫁 郡：埼玉郡

奉因……よって 冒……おかす

奉平春海……村田春海

奉嗣……あつぎ 游説……遊説

奉（コン）……宮中の小門

奉母……ない 物故（ぶつこ）……死ぬこと

奉甲冑（かっちゅう）

奉眞田（みのだ）

奉為……なる 賜……たまわる

奉扶持（ふち）

奉著用……着用 進見……お目にかかる
奉駒……安政六年四月朔日に終える

奉與……いと

奉適……とつく、ゆく

(三) 文保二年の板碑

文保二年の板碑

渡辺家「恩間五一四」邸内

渡辺荒陽は、渡辺家の先祖について「我が先、出づる所詳し
からず。蓋、戦国之時に乱を避け、而して農に帰る者也。父老
相（あい）伝う、五百年來、此の土に居すと謂う。」と書かれ、
さらに「渡邊氏家譜」によると「道光、前既已（すで）に茲（こ
こ）の土に居す也」となっている。道光の没年は、寛永十七年
（一六四〇）四月十日で、恩間村の名主を勤めていた。渡辺家
の先祖は江戸初期の道光まで遡ることは確実である。さらに「鬼
簿」では、「家譜及び固有する所の簿書、尽（ことごと）く灰塵
と為（な）す」とし、「渡邊氏家譜」によると、「正保中（一六
四四〜一六四七）、当觀昭之世」の出来事で、火災ですべて焼失
したために中世の頃がわからないとしている。觀昭の没年は、
貞享元年（一六八四）十二月六日である。



渡辺家邸内には、梵字キリクと「文保二年八月」（一二三・一八）と刻まれた板碑がある。渡辺家所蔵の渡辺荒陽筆「渡邊氏家譜」（天明七年十二月）の自序に「吾が家、一片の石を蔵す。石に誌（しる）す如くは、私以て当宗祐、其の面に貝多羅（ばいたら）の一字及び文保二年八月の六字を勒（きざ）むのみ。」「世に相伝う、『開祖之碣（いしづみ）』と云う由」と書かれ、渡辺家開祖の石碑としている。貝多羅とは、貝多羅葉の略で、古代インドでは経文を貝多羅樹の葉に刻みつけて写経した。ここでは、古代インドのお経の文字という意味であらう。

（四）渡辺荒陽の墓塔

35^{恩間}

渡辺荒陽の墓塔

恩間地蔵堂



〔正面〕

甄玉齋荒陽玄祿居士
清薰園法山貞運大姉

〔右側面〕

玄祿居士之室名登惠粕壁駅長関根次郎兵衛福宣之女寛政元年己酉十二月十四日終年三十五生二男三女嗣子左介太琅次源太左衛門彌女銀嫁于粕壁金子庸彦女多勢以和歌嗣村田春海之家女里津 米沢夫人之女史

〔左側面〕

渡邊之望世称政之助父左介宣直母細沼氏初出江戸以儒鳴老而後專志于皇国之学弼以鎗術為 高田侯之臣以故翁於小川街之邸終于時天保九年戊戌二月朔日享年八十七葬于本所牛嶋長命寺埋齒骨茲土以□□碣

※室は、妻という意味。

※寛政元年は、一七八九年。妻の没年である。

※嗣子は、あとつぎの意。

※源太左衛門は彌、駒、駒之助源九郎などとも呼んだ。

※渡辺之望は、荒陽をさす。

※高田侯は越後高田藩榊原家

※故翁は、荒陽をさす。

※天保九年は、一八三八年

荒陽の没年である。

※□□は、「建墓」。

墓塔の右側面の碑文によると、渡辺荒陽の妻は、粕壁宿の名主の関根家の出で、息子の左介太眠次（太眠、渡辺家の跡継ぎ）、源太左衛門彌（みつる）、娘の銀、多勢、里津の二男三女を生んでいる。荒陽の母は、袋山村の名主の細沼家の出である。荒陽の齒と骨を埋めた碑文中の本所牛嶋の長命寺は、現在の墨田区向島五丁目にある。

渡辺荒陽は、次女が多勢（多勢子）、三女の里津（里都子）とともに江戸に出て儒学を学び名声をあげる。晩年は国学に転じ、荒陽の次男の彌（みつる）とともに平田篤胤の門人となり、国学者として知られる。

この墓塔の碑文の左側面に出てくる彌（みつる）は、槍術家として知られ、高田藩の家臣となる。

この碑文の右側面に出てくる荒陽の次女が多勢（多勢子）は、国学者であり歌人でもある師の村田春海に強く望まれて村田家の養女となり、春海の後継者として国学や歌道に大いに活躍し、

「都下に一人の女あり」とまで称せられた。

この右側面に出てくる里津(里都子)は和歌学の大家となる。長女は粕壁宿の金子家に嫁ぎ、長男太眠は渡辺家を継ぐ。

なお、村田多勢子の墓は、村田春海と同じ深川の本誓寺(江東区、清澄庭園の北側)にあるという。また村田家は、後にこの渡辺家から勝之助(荒陽のひ孫)をまたも養子に迎え入れているが、勝之助は晩年郷里の恩間村に戻り、村田家の分家として永住し、今日に至っている(※1)。荒陽の死後も江戸の村田家と恩間村の渡辺家との交流は長らく続いたのであろう。

※1は、市史編さんだより「村田多勢子」(佐藤久夫著)より

(五) 渡辺家宝篋印塔

恩間

36・渡辺家宝篋印塔

恩間地蔵堂



36・渡辺家宝篋印塔(『越谷市金石資料集』に掲載なし)

所在地 恩間・地蔵堂

石塔型式 宝篋印塔(南向き・高さは超高)

年号 元文四年(一七三九)

〔正面〕
勝徳院道光清雲居士
勝行院妙淨清雲大師
廣明院宗運清澄居士
〔右側面〕

夫宝塔造立旨趣如何者
爰恩間里渡部氏中興先
祖有右所烈三人先凶各
靈今茲相當一百回遠忌
者也因斯苗裔某等謹建
一基制底敬答法会之丹
誠也是併歷代幽魂欲奉
謝遺孫撫育厚恩處也抑
又此家姓尊草刈基本遠
跡未祥也雖然屋敷垣乾

〔裏面〕

隔有一荒塚古塔薛羅繼
斷碑苔莓覆唯文保二年
字存経歴等計今既至元
文中及于四百有餘稔
是正此家開祖廟也厥后
慶安年中賞當邑新田開
発功從岩槻城主免田一
町歩拜領畢自爾已來繼
其業而子孫聯綿松栢繁
攸家聲隆然矣仰願蒙朝

〔左側面〕

夕先祖摩頂遊靈夜擁護
之膝也矣重乞酬所屬微
功靈魂早達法帝真都彌
於家門加擁護墳災難於
未念外今誇陶朱倚頓之
榮給乃至沙界普潤法雨
敬白 昔元文四季星旅
己未載夏四月初十日

施主 渡部氏左介尉直吉
同苗繼殿右衛門直齋

・以上、参考までに、渡辺家の宝篋印塔を紹介した。

※このレポートの作成にあたって、「こしがや広報」の「市史編さんだより」昭和四十四年十月十五日号「渡辺玄祿荒陽」と昭和四十五年六月一日号「村田多勢子」の二つの佐藤久夫著の研究成果を参考にしました。感謝致します。

越谷市内の高低測量凡号

こうていそくりようきこう

秦野 秀明

はじめに

「測量法(昭和二十四年六月三日法律第百八十八号)」によれば、「基本測量」とは、すべての測量の基礎となる測量で、国土地理院の行うものをいう⁽¹⁾。

「基本測量」により国土地理院が設置した各種「基準点」は、「電子基準点」、「三角点」、「水準点」等から構成され、地図作成や各種測量の基準となり、「水準点」には、基準、一等、二等及び三等の種類がある⁽²⁾。

「水準点」に設置される「水準点標石」は、「測量法」における「測量標」の一つである「永久標識」に分類される⁽³⁾。

明治九年(一八七六)七月二十七日、国土地理院の前身の一つである内務省地理寮により、現在とは異なる「水準点標石」の様式が布達され⁽⁴⁾、その様式により設置された「高低測量凡号(凡号水準点)」は、現行の水準点としては機能していないが、現在も一部が各地に残存している。

「内務省第一回年報」には、明治八年(一八七五)四月より、「関八州大三角測量」の事業が始まった旨の記載があり⁽⁵⁾、「内務省第二回年報」には、その測量を実施するに当たり、「下野国(栃木県)那須西原」に設けられた「底線」の位置に標高を与えるために、明治九年(一八七六)八月より、東京塩竈間の高低測量(水準測量)を行った旨の記載がある⁽⁶⁾。

明治十二年(一八七九)六月刊行の「内務省地理局雑報第十四号六月」⁽⁷⁾には、東京塩竈間の高低測量(水準測量)が、ほぼ日光道中、奥州道中に沿って行なわれた中で「高低測量凡号」の「標目」等が、六十四点のみ記載されている。

その「高低測量凡号」の「標目」では、東京都の「靈巖島水位標」近傍の「同所凡号石」を一点目として、十四点目に記載されているのが、埼玉県「西方村字行人塚大相模不動道標」であり、十五点目に記載されているのが、埼玉県の「大澤町字天神前管社華表」である。

今回、「内務省地理局雑報第十四号六月」に、十四点目、十五点目として記載されている「高低測量凡号」の「標目」等の来歴、及び「新方領耕地整理」に伴い埼玉県が設置したと推測される「凡号付き水準点」について、考察を進める。

尚、今回の考察は、筆者が既に発表した「大沢香取神社の二之鳥居にある「天満宮」の扁額の謎」(二〇一〇・二)(8)、「幻の「西方村字行人塚大相模不動道標」を求めて」(二〇一〇・一)(9)、「越谷市内三例目の「高低測量凡号」(二〇一一・一一)(10)を、改稿してまとめたものである。

註

(1) 測量法(昭和二十四年六月三日法律第百八十八号) 第四条

(2) 国土交通相 国土地理院 中部地方測量部/基準点とは

<http://www.gsi.go.jp/chubu/profile-ki-juntten-ki-juntten.html> (2014.02.28 入手)

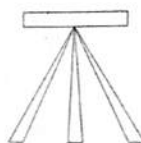
(3) 測量法第十条

(4) 「内務省布達 甲第二十八號(七月二十七日輪廓附)」

(復刻版 内閣官報局／編『法令全書』 第九卷ノ一
明治九年、原書房、一九七五、四七二頁)

○甲種二十八號 (七月二十七日 臨時刊)
當省地籍調査ノ高低測量ノ際自今海國ヨリノ高低ヲ表スル記號別紙第一圖式ノ邊沿際通宜ノ地ニ於テ作テ来ノ不朽物ニ彫刻シ又ハ第二圖式柱礎設木存ノ符ニ模倣爲心得此旨布達候事
(別紙)

第一圖式



第二圖式



(10) 前掲註(8)

<http://bc3456de.sakura.ne.jp/320.pdf>
(2011. 11. 10 作成)

十四点目 「西方村字行人塚大相模不動道標」

一 「行人塚」とは何か

「行人塚(ぎょうにんづか)」とは、「東日本で、むかし行人が自ら望んで、生きながら埋葬されて入定(にゆうじょう)したと伝える塚」(1)である。

文化三年(一八〇六)に、江戸幕府道中奉行が完成させた『日光道中分間延絵図』(2)では、「西方村」と記載された日光道中より上方(東側)の少し離れた場所に、「行人塚」と記入された木の生えた塚が描かれている(絵図1)。この絵図により、少なくとも文化三年(一八〇六)時分までは、西方村に「行人塚」が存在していたことが判明した。

しかし、文化七年(一八一〇)起稿、文政十三年(一八三〇)完成の、『新編武蔵風土記稿』巻之二百五 埼玉郡之七 八條領西方村の項では、「小名」として「行人塚」の記載がなく、また「塚」としての記載もない(3)。



絵図 1

『日光道中分間延絵図』
(2)
を部分引用

(9) 前掲註(8)

<http://bc3456de.sakura.ne.jp/75.pdf>
(2010. 02. 28 作成)

二 字名としての「西方村字行人塚」の位置と範囲

『(西方村)旧記 五』には、
 字名としての「西方村字行人塚」の位置と範囲を判明させるこ
 とが可能な、次のような記載がある。

「史料一」

文化十五改元有て文政元寅年(一八一八)

村龜絵図別紙認メ候節往來野道堤土手堀間数方角分見覺
 附村境上手下手中耕地分見ケ所附字名附目錄⁴

(西曆筆者)

よ 上手大通流橋西土手方行人塚橋迄

壺 已九分五厘 四間壺尺

此杭葛西用水西土手流橋打留は之九版杭添テ

〔中略〕

三十六 留 杭

此杭行人塚橋北土手を之三番二落合⁵

ね かみすりめん馬道柳田橋方行人塚橋迄

壺 已八分八厘余 百九拾二間

此杭土手大道出口石橋向添井堀西土手四方中央
 よ之三番杭添立テ添土手水下行

〔中略〕

廿一 留 杭

此杭行人塚橋北土手を之三番杭二落合打留ル⁶

な 行人塚馬道同橋北土手方三軒家登戸村地境四ヶ村

用水土手迄

壺 未壺分 拾七間内堀敷貳間余廿二

此杭行人塚橋橋北土手四方中央を之三番杭二添
 テ立

貳 酉五半分 拾六間半

三 午七分貳厘 拾九間

四 酉三分半 拾四間半

五 未九分 拾壹間

六 申四分 拾間

七 酉壺分 拾五間

八 未壺分 貳拾貳間

九 酉壺分 貳拾壺間

十 酉五半分 拾八間半

十一 酉五半分 貳拾間半

十二 留 杭

此杭四ヶ村用水土手西方登戸村境ニテ打留ル⁷

ら 行人塚四ヶ村用水東土手通りとふかん堀方登戸境

迄間數百六拾貳間

壺 午三分 三間堀敷分

此杭大田切堀角北土手る之十貳番留杭二添テ立
 堀飛越移ル

貳 午三分 七間

此杭大田切堀南土手四ヶ村用水土手真角二立

〔中略〕

十三

留杭

此杭登戸西方村地境四ヶ村用水土手な之十二番

留杭添テ打留ル⁽⁸⁾

(太字筆者)

ゆえに、「史料一」の「よ」、「ね」、「な」、「ら」より判明したことは、

①「とふかん堀」を渡る日光道中の「大田切石橋」(9)の北土手Aより、日光道中の東側に沿って流れる「四ヶ村用水」(しかむら用水)の東土手通りを「午三分(ほぼ南)」の方角へ向かい、旧登戸村と旧西方村の村境の「四ヶ村用水」の土手Bまでの距離が、百六拾貳間(一九四・五一六メートル)である。

②「とふかん堀」を渡る「馬道」の「行人塚橋」の北土手Cより、「馬道」を「未耄分(ほぼ南西)」から西五分半(西)」の方角へ向かい、旧登戸村と旧西方村の村境の「四ヶ村用水」の土手Bまでの距離が、百八拾五間(三三六・三三メートル)である。

③「とふかん堀」を渡る日光道中の「大田切石橋」の北土手Aより、「とふかん堀」を渡る「馬道」の「行人塚橋」の北土手Cまでは、「とふかん堀」の北土手である。

④反時計回りに、

「とふかん堀」を渡る日光道中の「大田切石橋」の北土手A、旧登戸村と旧西方村の村境の「四ヶ村用水」の土手B、「とふかん堀」を渡る「馬道」の「行人塚橋」の北土手Cを結ぶ「三点」の内部が、字名としての「西方村字行人塚」の位置と範囲である(図1)。

図1



「高低測量凡号」の刻まれた「西方村字行人塚大相模不動道標」の周辺の図
 (二万分の一地図 松戸越ヶ谷近傍第五号(第一師管地方迅速測図))
 (明治十三年測量 同十七年製版 同二十年九月二十八日出版 同二十一年再販)
 より「高低測量」実施当時の位置等を加筆して引用

さらに、『(西方村)旧記 四』には、
字名としての「西方村字行人塚」の位置が、往還(日光道中)の
端にあったことが判明する、次のような記載がある。

「史料二」

文化十一年(一八一四)戊年行人塚家作願并商売之向御聞濟之事

右は行人塚江新家作二付、御支配之御添翰頂戴にて

小堀兵次様江二月九日差上候処、〔中略〕

勿論右場所は往還端之儀二付末々少々之そふりわら

し売買等も可仕哉、〔後略〕⁽¹⁰⁾

(西暦・太字筆者)

三 『不動尊』道標石塔と「不動道」

加藤幸一氏の調査によれば、旧西方村の大聖寺(大相模不動
尊)(越谷市相模町六―四四二)「東門」外 の路傍に存在する文久
二年(一八六二)建立の『不動尊』道標石塔は、元は日光道中
に面した「宮前通り」の南側の角地(同市南越谷一―四―八〇)
に存在し、「不動石」と呼ばれていた。後に「宮前通り」の北側
(向かい側)の常陽銀行越谷支店の角地(同市南越谷一―一―三
八)に移転し、さらに、大聖寺(大相模不動尊)境内の「東門通り」
に移転し、現在の場所である「東門」外 の路傍への移転は、平
成十六年(二〇〇四)七月であったことが判明している⁽¹¹⁾。

さらに加藤氏は、文久二年(一八六二)の建立時には、大聖寺
(大相模不動尊)へと続く「不動道」の入口があった日光道中東
側沿いの、現在のJR武蔵野線南越谷駅東北東の辺り(同市南越
谷二―一四―三二)に、西向きに設置されていたと推定している。

尚、「不動道」は、葛西用水の「流橋(ながればし)」を經由し
て、大聖寺(大相模不動尊)に通じており、「流橋」のすぐ上流に
架かる使用禁止の橋は、昔の「不動道」の名残の「旧・流橋」
であることも判明している⁽¹²⁾。

しかしながら、昭和十三年(一九三八年)三月時点において、
殆ど完了していた耕地整理事業⁽¹³⁾の結果、「不動道」をはじめ、
「行人塚」、「とふかん堀」及び、「とふかん堀」に架けられてい
た「行人塚橋」などは全て消滅してしまった。

それゆえに、昭和二十四年(一九四九年)一月一〇日に、米軍
により撮影された「空中写真」(USA-REPT)では、「旧・流橋」
を通る「不動道」の道筋を判明させることはできないが、明治
十三年(一八八〇)に、陸軍・参謀本部により測量された「明治
前期測量 二万分之一フランス式彩色地図―第一軍管地方二万
分の一迅速測圖―埼玉県武蔵国南埼玉郡越ヶ谷駅及大沢町近傍
村落」(以下「迅速測図」と略す)等では、「不動道」の道筋を
正確に判明させることができる(図1)。

ゆえに、「史料一」の

よ 上手大通流橋西土手方行人塚橋迄⁽⁵⁾

及び、

な 行人塚馬道同橋北土手方三軒家登戸村地境四ヶ村

用水土手迄⁽⁷⁾

(西暦・太字筆者)

は、この「不動道」の一部であることが判明した。

四 日光道中より「不動道」が分岐した地点

「史料一」の

な 行人塚馬道同橋北土手方三軒家登戸村地境四ヶ村

用水土手迄⁷⁾

及び、

ら 行人塚四ヶ村用水東土手通りとふかん堀方登戸境

迄間數百六拾貳間⁸⁾

により、日光道中より「不動道」が分岐した地点は、旧登戸村(字)三軒家と旧西方村(字)行人塚の村境であつたことが判明した。

さらに、「不動道」の道筋を正確に判明させることができる「迅速測図」によれば、「不動道」が分岐した地点のやや南側で、且つ日光道中の西側より分岐して、旧七左衛門村の「七左一の橋」(越谷市七左町二丁目)方面へ向かう古道が存在していた。

この古道が分岐した地点は、旧西方村の西側において村境を接する旧瓦曾根村の村内であり、この古道は現在も、日光道中(現在の東京都道・埼玉県道四九号足立越谷線)の西側より分岐して、同市南越谷一丁目と二丁目の境界を通る道として、部分的に存在している。

この古道が部分的に存在しているゆえに、日光道中より「不動道」が分岐した地点は、現在の日本興亜損害保険越谷支社(同市南越谷二―一四―三二)の建物の北側(同市南越谷二―一四―三三)であることが判明した。⁽¹⁴⁾

四 『不動尊』道標石塔』の本来の位置

明治九年(一八七六)八月より、東京塩竈間の高低測量(水準測量)が行われ、「内務省地理局雑報第十四号六月」に、十四点目の「西方村字行人塚大相模不動道標」として記載されていたゆえに、加藤氏の調査により、建立当時は日光道中沿いに存在していた可能性が指摘されていた文久二年(一八六二)建立の『不動尊』道標石塔⁽¹⁵⁾こそが、「高低測量凡号」の刻まれた「西方村字行人塚大相模不動道標」であり、その存在していた位置は、日光道中の東側で、且つ「不動道」が分岐した地点の北側である旧西方村(字)行人塚であつたことが判明した⁽¹⁶⁾。

最後になるが、今回のこの結論に至るには、加藤氏の調査、研究に負うところが多かった。この場を借りて謝辞を述べたい。

註

(1) 新村出／編『広辞苑』第五版、岩波書店、一九九八、七〇一頁

(2) 『日光道中分間延絵図』第一巻

(復刻版 『日光道中分間延絵図』第一巻、東京美術、一九八六)

(3) 『新編武蔵風土記稿』卷之二百三 埼玉郡之五 岩槻領(復刻版 蘆田伊人／編『新編武蔵風土記稿』第十巻、雄山閣、一九六三、一七〇―一七三頁)

(4) 『西方村「旧記」五』『越谷市史』続史料編 第二集、越谷市、一九八五、一三二―一九五頁

(5) 前掲書註(4)、一五二、一五三頁

(6) 前掲書註(4)、一五五、一五六頁

(7) 前掲書註(4)、一五六、一五七頁

(8) 前掲書註(4)、二五七頁

(9) 前掲書註(2)

(10) 『西方村「旧記」四』『越谷市史』続史料編 第二集、
越谷市、一九八五、一三、一四頁

(11) 加藤幸一「平成十六年度 旧西方・東方・見田方村の石仏」

改訂版(越谷市立図書館蔵)、二〇〇五、三三頁

(12) 加藤幸一「今はなき不動道」(越谷市立図書館蔵)、

二〇〇七、一、三、十頁

(13) 葛西用水路土地改良区／編『葛西用水史』資料編 下、

埼玉新聞社、一九八九、一二三頁

(14) 日光道中より「不動道」が分岐した「現在における」地点
が判明した上で、『日光道中分間延絵図』に描かれている

「行人塚」の存在した地点を考察すると、現在の日本貨物
鉄道株式会社(JR貨物)越谷貨物ターミナル駅(越谷市南
越谷二一〇)の構内入口付近であることも判明した。

(15) 「高低測量凡号(凡号水準点)」が彫刻されている位置は、
道標の正面の下部であると推測出来るが、現在、道標の正
面の下部は、地中に埋没してコンクリートで固められてお
り、確認が出来ない(写真1)。是非、関係者のお力でコン
クリートを取り除き、調査が行われることを期待したい。

(16) 明治九年(一八七六)より、東京塩竈間の高低測量(水準測
量)が行なわれ、その四年後の明治十三年(一八八〇)に、陸
軍・参謀本部により測量された「迅速測図」では、日光道
中の東側で、且つ「不動道」が分岐した地点の北側である
旧西方村の村内に、四、四四七二mの水準点が記載されて
いる。「西方村字行人塚大相模不動道標」の「高低測量凡
号(凡号水準点)」は、四、六六七六mなので、高さが〇、

二二〇四m異なっている。

また、国土地理院が設置・管理する現行の「二等水準点」
は、ほぼ真向かいの日光道中の西側である越谷市南越谷二
一五―三〇に存在する。



写真1

大聖寺(大相模不動尊)「東門」外の路傍
「西方村字行人塚大相模不動道標」
(東北東より望む)

十五点目 「大澤町字天神前管社華表」

一 旧大沢町香取神社の敷石供養塔と鳥居

旧大沢町の香取神社(越谷市大沢三一十三―三十八)の本殿は、
南南東を向き、参道入口も本殿の南南東にある。

現在、香取神社の参道には、合計三基の「鳥居」が立つ。

一之鳥居は、昭和六十年(一九八五)十一月に再建された石造
の明神鳥居で、参道入り口に立つ。昭和五十四年(一九七九)に
発行された『越谷ふるさと散歩(上)』では、「入口に文化三年(一
八〇六)建立による石の鳥居がある」との記載がある(1)。

二之鳥居は、文政六年（一八二三）に建立された石造の明神鳥居で、一之鳥居の次に立ち、「天満宮」の扁額が掲げられている。鳥居の東北東側の北北西面の石柱には、「文政六癸未年 九月吉日」の銘文が刻まれている。

三之鳥居は、文化三年（一八〇六）に建立された石造の明神鳥居で、二之鳥居の次に立ち、左右の台石に願主を含む二十八名の奉納者の名が刻まれている。鳥居の東北東側の北北西面の石柱には、「維皆文化三丙寅年四月吉祥日」の銘文が刻まれている。

香取神社の境内には、合計二基の「敷石供養塔」が立つ。

一基目は、文化八年（一八一七）に建立され、参道入口付近で、拝殿に向かって左側の参道沿いに東北東向きで立ち、敷石供養塔の正面には、「従是一之鳥居迄」の銘文が刻まれている。

二基目は、文化十一年（一八一四）に建立され、三之鳥居を過ぎた手水舎の手前付近で、拝殿に向かって左側の参道沿いに東北東向きで立ち、敷石供養塔の右側面には、「従拝殿二之鳥居迄」の銘文が刻まれている⁽²⁾。

ゆえに、合計二基の敷石供養塔の両方の銘文には、「二之鳥居迄」と刻まれていることから、少なくとも文化十一年（一八一四）までは、二之鳥居までしか存在せず、現在の三之鳥居が元の二之鳥居であり、文化十一年（一八一四）以降に、文政六年（一八二二）に建立された現在の二之鳥居が、一之鳥居と元の二之鳥居である三之鳥居の間に、割り込んで立てられたことが判明した。

二 旧大沢町天神社（天神（之）宮又は天満宮）の鳥居

文化七年（一八一〇）起稿、文政十三年（一八三〇）完成の、『新編武蔵風土記稿』巻之二百三 埼玉郡之五 岩槻領 の項には、

大沢町の寺院として照光院が記載され、その中に「天神社」の記載がある⁽³⁾。

また、文化年間（一八〇四～一八一八）より文政五年（一八二二）に至るまでに、大沢町本陣当主の福井権右衛門猷貞が著した『大沢猫の爪』に、「天神宮」の記載がある⁽⁴⁾。

さらに、天保十一年（一八四〇）に、大沢町名主の江沢太郎兵衛昭融（掬月亭子朗）が著した『大沢町古馬宮』に、「天神之宮」の記載がある⁽⁵⁾。『大沢町古馬宮』には、その他に「天神の古松」⁽⁶⁾、「天満宮」に由来する「いろは組」⁽⁷⁾の記載がある。

江戸時代の大沢町を描いた絵図としては、宝暦元年（一七五二）に、盛岡藩士清水秋全が著した『奥州道中 増補行程記』⁽⁸⁾、文化三年（一八〇六）に、江戸幕府道中奉行が完成させた『日光道中分間延絵図』⁽⁹⁾の二点があるが、二点とも文政六年（一八二三）以前の完成のため、「天満宮」の扁額が掲げられている文政六年（一八二三）建立の鳥居は描かれていない。

それでも、『奥州道中 増補行程記』の大沢町近辺の絵図には、日光道中の街道筋より少し奥へ入った位置に、恐らく木製と推測される朱塗りの鳥居が描かれ、『日光道中分間延絵図』においても、同じような位置に、朱塗りの鳥居が描かれている。

以上、『新編武蔵風土記稿』、『大沢猫の爪』及び『大沢町古馬宮』の記載により、「天満宮」の扁額が掲げられている文政六年（一八二三）建立の鳥居は、旧大沢町の照光院（越谷市大沢二一四―一六）の境内に存在した天神社（天神（之）宮又は天満宮）のものであったことが判明した。

三 「天満宮」の扁額は文政十一年（一八二八）製ののか

本論から離れるが、『大沢町古馬宮』には、「天満宮」の扁額が作製された経緯と日時について、次のような記載がある。

「史料三」

十七 ○天満宮

「前略」

享保廿一年辰正月十三日、御高家前田信濃守様¹⁰
蒙台命日光山へ首途之時、天満宮の花表を拝し御通行、
其夜御旅宿にて蒙靈夢、よつて一首の和歌を
額面ニ御したため奉納なり¹¹、
きて見れば ここも北野之神垣や

軒端に近く咲る梅かえ 侍従菅賢長

かく御したためありて今ニ其額面あり、其御結縁

ニよりて、文政十一子年八月中、中組大こくや

弥兵衛与(と)云者発願にて、御当代の前田公¹²

へ相願鳥居の額面の文字を願ふ、御聞濟ありて

一支之御ものいみにて御したため下され候

「後略」¹³

(太字・カタカナ・振り仮名・改行筆者)

「史料三」の記載によれば、現在の香取神社の二之鳥居である文政六年(一八二三)建立の鳥居に掲げられている「天満宮」の扁額が、文政十一年(一八二八)八月中に、中組大こくや(大黒屋)弥兵衛の発願で、高家前田信濃守長繁(ながあきら)¹²の文字を基に作製された扁額である可能性もあったが、扁額の裏面の銘文の判明¹⁴によりそれは否定された。

四 天神社(天神(之)宮又は天満宮)の鳥居の移転時期

明治九年(一八七六)八月より、東京塩竈間の高低測量(水準測量)が行われた。

ゆえに、明治九年(一八七六)八月時分には、日光道中沿いに、天神社(天神(之)宮又は天満宮)の鳥居として、「天満宮」の扁額が掲げられている文政六年(一八二三)建立の鳥居は存在し、その台石に「高低測量凡号」が刻まれたことが判明した(写真2)。

『南埼玉郡神社明細帳』¹⁵によれば、照光院境内に存在した天神社(天神(之)宮又は天満宮)の御祭神は、明治四十四年(一九一一)七月四日に香取神社に合祀されている。

「天満宮」の扁額が掲げられている文政六年(一八二三)建立の鳥居の西南西側の北北西面の石柱には、「奉獻 大澤驛 中組」の銘文が刻まれているが、この裏側つまり鳥居の西南西側の南南東面の石柱には、次のような銘文が刻まれている。

大正二年一月一日 東京市日本橋區(区)新乗物町¹⁶

移轉(転)寄附 吉岡伊三郎¹⁷

ゆえに、この銘文は、「天満宮」の扁額が掲げられている文政六年(一八二三)建立の鳥居が、香取神社の二之鳥居として移転された記念に刻まれたものであったことが判明した。

それは、明治四十四年(一九一一)七月四日に、照光院境内に存在した天神社(天神(之)宮又は天満宮)の御祭神が香取神社に合祀されてから、一年半後の大正二年(一九一三)一月一日のことであったのである。



図2

「高低測量几号」の刻まれた「大澤町字天神前管社華表」の周辺の図
 「二万分の一地図 松戸越ヶ谷近傍第五号(第一師管地方迅速測図)」
 (明治十三年測量 同十七年製版 同二十年九月二十八日出版 同二十一年再販)
 より「高低測量」実施当時の位置等を加筆して引用

註

- (1) 越谷市史編さん室／編『越谷ふるさと散歩(上)』、
越谷市役所市史編さん室、一九七九、一七頁
- (2) 加藤幸一「平成十三年度 旧大沢町・越ヶ谷町の石仏」、
(越谷市立図書館蔵)、二〇〇一、五・六頁
- (3) 『新編武蔵風土記稿』卷之二百三 埼玉郡之五 岩槻領
(復刻版 蘆田伊人／編『新編武蔵風土記稿』第十卷、
雄山閣、一九六三、一四八・一四九頁)
- (4) 福井猷貞『大沢猫の爪』『越谷市史』第四卷 史料二、
越谷市、一九七二、八九頁
- (5) 江沢昭融『大沢町古馬宮』『越谷市史』第四卷 史料二、
越谷市、一九七二、一三八・一三九頁
- (6) 江沢、前掲書、一九七二、一四三頁
- (7) 江沢、前掲書、一九七二、一四八頁
- (8) 清水秋全『奥州道中 増補行程記』
(復刻版 細井計／編
『増補行程記(新南部叢書特装版)』、東洋書院、
一九九一)
- (9) 『日光道中分間延絵図』第一卷
(復刻版 『日光道中分間延絵図』第一卷、東京美術、
一九八六)
- (10) 前田信濃守長泰(まえだながやす)高家前田家第一代当主。
(元禄三年(一六九〇)〜宝暦十三年(一七六三)十月
三日)。
フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』

[http://ja.wikipedia.org/wiki/\(2014.02.28入手\)](http://ja.wikipedia.org/wiki/(2014.02.28入手))

(11)「廿四日 高家前田信濃守長泰日光山より歸謁す」。

黒板勝美、国史大系編修会／編『徳川實紀』第八篇

(国史大系 新訂増補)、一九七六、七一四頁

(12)前田信濃守長繁(まえだながあきら)高家前田家第五代当主。

(生年不詳)天保二年(一八三二)十二月十八日)。

フリー百科事典『ウィキペディア Wikipedia』

[http://ja.wikipedia.org/wiki/\(2014.02.28入手\)](http://ja.wikipedia.org/wiki/(2014.02.28入手))

(13)江沢、前掲書、一九七二、一三七頁

(14)筆者による調査(扁額と額束の隙間に携帯電話を挿入し撮影)により、判明させることができた「天満宮」扁額の裏面の銘文は、

奉掛施主中安全祈所

享保十五庚戌二月吉日

武州崎玉郡新方領大沢町

別當照光院住

法印観蓮

(享保十五庚戌年は、一七三〇年)である。

また、照光院には、

権大僧都法印観蓮

位

安永三甲午年九月廿五日

(安永三甲午年は、一七七四年)

と刻まれた墓石が存在する。

(15)「南埼玉郡神社明細帳(乙)」、一八九・一九〇頁

(16)加藤幸一氏により、

東京市日本橋區(区)新□□町

と解説され、摩耗して不明な部分□□は、筆者による「旧土地台帳」の調査により、判明させることができた。

(17)「移轉(転)寄附」という本稿で重要な内容を含む銘文も、加藤氏により解説された。この場を借りて謝辞を述べたい。

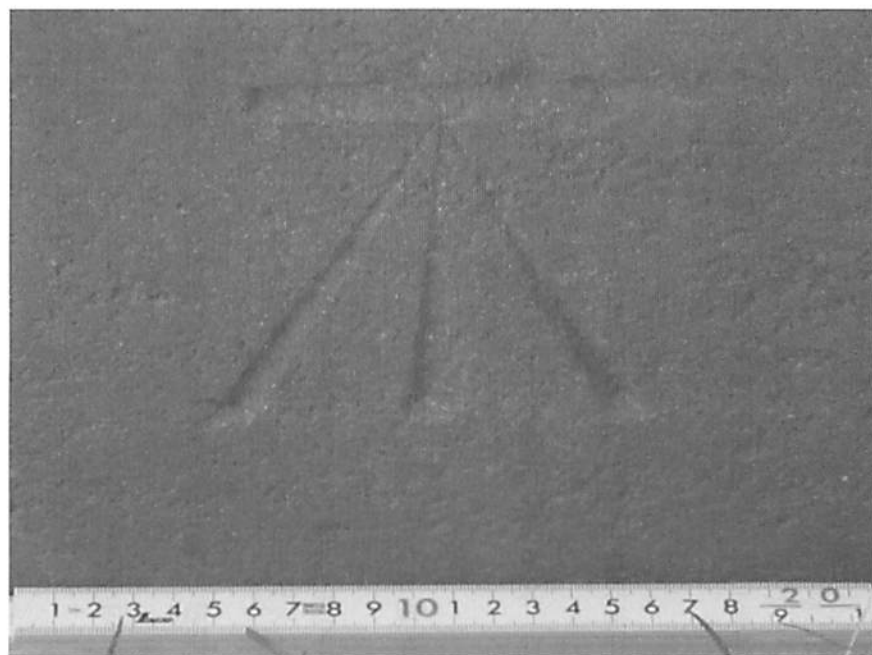


写真2

大沢香取神社二之鳥居
「大澤町字天神前管社華表」
(北北西より望む)

「新方領耕地整理」に伴い埼玉県が設置したと推測される
「水準点標石」である「凡号付き水準点」

平成二十二年(二〇一〇)十二月八日、太田繁信氏により再発見され、飯島仁氏により報告された「水神社」(春日部市大増新田一―二)境内に存在する「水準点標石」は、一辺15cm、高さ(地上高)43cmの花崗岩の角柱で、上面には球文体があり、側面に刻印された「凡号」を正面とすると、時計周りに「第五號」、「新方領」、「基標」の刻字があつた¹⁾。

この形式の「水準点標石」は、様々な「水準点標石」に関する文献や資料には未記載の形式であり、飯島氏は「新方領」の刻字の存在から、この地域一帯で行われた「新方領耕地整理事業」(大正五年(一九一六)三月二十七日竣工)²⁾の際に設置されたものであると推測した。

筆者は飯島氏の報告を元に、同種の他の「水準点標石」を求めて探索した結果、平成二十二年(二〇一〇)十二月十九日、「大杉新田稻荷神社」(越谷市大杉四五九)境内に、一辺15cm、高さ(地上高)35cmの花崗岩の角柱で、上面には球文体があり、側面に刻印された「凡号」を正面とすると、時計周りに「第九號」、「新方領」、「基標」の刻字された「水準点標石」を再発見した(写真3・写真4)。

さらに筆者は、十二月十九日以降、春日部市内において、「第二號」、「第三號」、「第七號」の刻字された「水準点標石」も再発見した³⁾。

註

(1)「標石で遊ぶ(標石ネットワーク)」

<http://groups.yahoo.co.jp/group/hyoseki/>
(2010.12.08入手)

(2)高崎力「史資料構成による新方領と新方領耕地整理」、

一九九二、三七頁

NPO法人越谷市郷土研究会ホームページ

<http://bc3456de.sakura.ne.jp/204.pdf>

(2014.02.28入手)

(3)平成二十六年(二〇一四)二月二十八日現在の探索状況は、次のようになっている。

①「第一號」：未発見

②「第二號」：春日部市上大増新田四四五「香取神社」：

秦野秀明 再発見

③「第三號」：春日部市薄谷一四〇「香取神社」：

秦野秀明 再発見

④「第四號」：未発見

⑤「第五號」：春日部市増田新田一―二「水神社」：

太田繁信氏 再発見

⑥「第六號」：未発見

⑦「第七號」：春日部市大場四三二

「新方領耕地整理碑」北西隣：

秦野秀明 再発見

⑧「第八號」：未発見

⑨「第九號」：越谷市大杉四五九「大杉新田稻荷神社」：

秦野秀明 再発見

⑩「第十號」以降：不明



写真4

「大杉新田稲荷神社」(越谷市大杉459)
「凡号付きの水準点」
背後に「一級水準点(埼玉県)」
(北北東より望む)

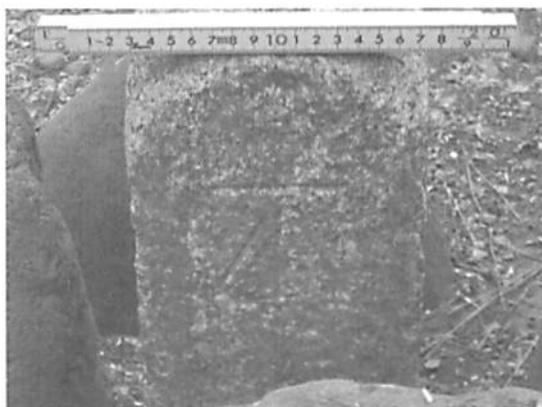


写真3

「大杉新田稲荷神社」(越谷市大杉459)
「凡号付きの水準点」
上面に「球文体」、一辺1.5cm、高さ(地上高)3.5cm
「凡号」を正面とすると、
時計周りに
「第九號」、「新方領」、「基標」の刻字
「凡号(不)」の横棒6.5cm、縦棒7.0cm、
横棒までの地上高2.7cm
(北北西より望む)



参考写真1

「二等水準点」より
越谷市南越谷2-14-31を望む
(西より望む)

むすびにかえて

今回、明治十二年(一八七九)六月刊行の「内務省地理局雑報第十四号六月」に、十四点目として記載されている「西方村字行人塚大相模不動道標」及び、十五点目として記載されている「大澤町字天神前管社華表」の来歴等を判明させることが出来たが、「西方村字行人塚大相模不動道標」に関しては、「高低測量」が行われた際に彫刻された「凡号」を確認出来ておらず、今後の課題となっている。

また、「新方領耕地整理」に伴い埼玉県が設置したと推測される「凡号付き水準点」に関しても、「第一號」、「第四號」、「第六號」、「第八號」が未発見で、且つ「第十號」以降の存在も不明であり、こちらも今後の課題となっている。

越谷型青面金剛像庚申塔

秦野 秀明

はじめに

「六臂」の青面金剛像庚申塔は、中央の手(第一手)の印や持物の違いで、一般的には「合掌型」と「剣人型」に分類される。中山正義氏は、この分類に当てはまらない「合掌型」でありながら「人身(シヨケラ)」を持つ「岩槻型青面金剛像庚申塔」の存在を報告した⁽¹⁾。

その改訂版によると、「持ち物」が十一種類、「三猿の配列」が五種類、「総数」が七十一基、「造立年代」が元禄元(一六八八)年から享保十九(一七三四)年までである。さらに、それぞれ二基(合計四基)の例外を除けば、「邪鬼」が横に臥さずに正面を向き、「三猿」は横向きではなく全て正面を向いている⁽²⁾。

一 越谷市内の「岩槻型青面金剛像庚申塔」

越谷市内に存在する「岩槻型青面金剛像庚申塔」は、

①野島五番 正徳三(一七一三)癸巳年十一月吉日 造立

野島 久伊豆神社⁽³⁾。

②大里四番 正徳四(一七二四)甲午十一月吉祥日 造立

大里 秀蔵院跡⁽⁴⁾。

③小曾川六番 正徳四(一七二四)甲午天十一月 造立

小曾川 慈眼寺跡⁽⁵⁾。

④大林六番 享保五(一七二〇)庚子年九月吉祥日 造立

大林 香取神社⁽⁶⁾。

である。

二 「越谷型青面金剛像庚申塔」

しかし、越谷市内には「合掌型」で且つ「人身(シヨケラ)」を持ちながら、享保十九年(一七三四)以降の造立で、「邪鬼」が横に臥して正面を向き、「三猿」は中央の猿以外の左右の猿が正面を向いていない二基の青面金剛像庚申塔が存在する。

①小曾川十四番 宝暦四(一七五四)戌天十一月吉日 造立

小曾川 F家側墓地⁽⁷⁾。

②恩間十四番 宝暦五(一七五五)亥天九月吉日 造立

恩間 勢至堂⁽⁸⁾。

である。尚、この二基は中山氏の報告にも含まれていない。

ゆえに筆者は、小曾川十四番、恩間十四番の二基を、「岩槻型青面金剛像庚申塔」の「亜型」である「越谷型青面金剛像庚申塔」として、ここに発表報告する。

むすびにかえて

中山正義氏は、その論文「岩槻型青面金剛像について」において、石工の創作について、次のように述べる。

それとも単に石工の創作が盛況をみたのだろうか、しかし四十年余の儚い流行の型態ではあった⁽¹⁾。

中山氏(一九八八)(一九九七)によつて報告された「岩槻型青面金剛像庚申塔」の造立年代は、元禄元(一六八八)年から享保十九(一七三四)年までである。

元禄元(一六八八)年から享保十九(一七三四)年までは四十六年間あり、一人の石工が二十歳より創作を始めたと仮定すれば、四十六年間に渡り創作を続けた場合には六十六歳となる。

ゆえに、享保十九(一七三四)年を最後に「岩槻型青面金剛像庚申塔」が存在しなくなる事実は、一人の石工が創作活動を行う期間としては、妥当な範囲なのではないだろうか。

つまり、さいたま市岩槻区を中心に存在する「岩槻型青面金剛像庚申塔」は、実は、一人の石工によつて作られたのではないかと推測される。

「小曾川十四番 宝暦四(二七五四)戊子十一月吉日造立の青面金剛像庚申塔」や、「恩間十四番 宝暦五(一七五五)亥天九月吉日造立の青面金剛像庚申塔」の造立年代である宝暦四(一七五四)年や、宝暦五(一七五五)年は、一人の石工にとつてそれぞれ八十六歳、八十七歳となり、創作活動を行う年齢としては少々厳しいものがある。

つまり、「岩槻型青面金剛像庚申塔」を創作した石工とは、別人の可能性が高いと推測される。

註

(1) 中山正義(一九八八)「岩槻型青面金剛像について」『野仏』

一九、二一四

(2) 中山正義(一九九七)「一九九七年十一月版

岩槻型青面金剛像一覽表」

(3) (8) 越谷市立図書館に所蔵されている加藤幸一氏による越谷市内の石塔・石仏の悉皆調査の報告書より「番号等」を引用した。この場を借りて謝辞を述べる。

「岩槻型 青面金剛像庚申塔」

① 野島五番 正徳三(一七一三)癸巳年十一月吉日 造立

野島 久伊豆神社 「舟型」(3)

持ち物

人	劍
弓	合掌
矢	矢
「邪鬼」は、横に臥さず、正面を向き、二手で踏ん張る。	
「三猿」は、全て正面を向き、向かつて左より口・耳・目を塞ぐ。	

② 大里四番 正徳四(一七一四)甲午十一月吉祥日 造立

大里 秀蔵院跡 「舟型」(4)

持ち物

人	劍
弓	合掌
矢	矢
「邪鬼」は、横に臥さず、正面を向き、二手で踏ん張る。	
「三猿」は、全て正面を向き、向かつて左より口・耳・目を塞ぐ。	



②大里四番(4)
(2008・4・24
撮影)

持ち物

人	劍
合掌	
矢	弓

「邪鬼」は、横に臥さず、正面を向き、二手で踏ん張る。
「三猿」は、全て正面を向き、向かって左より口・耳・目を塞ぐ。

④大林六番

享保五(一七二〇)庚子年九月吉日 造立
大林 香取神社 「駒型」(6)

持ち物

劍	人
合掌	
矢	弓

「邪鬼」は、横に臥さず、正面を向き、二手で踏ん張る。
「三猿」は、全て正面を向き、向かって左より口・耳・目を塞ぐ。

③小曾川六番

正徳四(一七一四)甲午天十一月 造立
小曾川 慈眼寺跡 「角柱型様特殊型」(5)

持ち物

劍	人
合掌	
矢	弓

「邪鬼」は、横に臥して、正面を向く。
「三猿」は、中央は正面を向き、左右は中央を望んで横を向き、向かって左より口・耳・目を塞ぐ。

②恩間十四番

宝暦五(一七五五)亥天九月吉日 造立
恩間 勢至堂 「駒型」(8)

持ち物

劍	人
合掌	
矢	弓

「邪鬼」は、横に臥して、正面を向く。
「三猿」は、中央は正面を向き、左右は中央を望んで横を向き、向かって左より口・耳・目を塞ぐ。

①小曾川十四番

宝暦四(一七五四)戌天十一月吉日 造立
小曾川 F家側墓地 「駒型」(7)

「越谷型 青面金剛像庚申塔」



②大里四番(4)
(2008・4・24
撮影)

①小曾川十四番 宝曆四(一七五四)戌天十一月吉日 造立
小曾川 F家側墓地 「駒型」(7)



(2012・11・5撮影)



越谷市立図書館に所蔵されている
加藤幸一氏による越谷市内の
石塔・石仏の悉皆調査の報告書より引用

②恩間十四番 宝曆五(一七五五)亥天九月吉日 造立
恩間 勢至堂 「駒型」(8)



(2012・3・1撮影)



越谷市立図書館に所蔵されている
加藤幸一氏による越谷市内の
石塔・石仏の悉皆調査の報告書より引用

名物鬼焼



解説 白石 克 つとむ

仮名垣魯文作「日光道中膝栗毛」(名古屋市蓬左文庫所蔵)より

『日光道中膝栗毛』

鈍亭(仮名垣) 魯文 戯作、歌川 国綱(二代目) 画

新庄堂刊、安政四年(一八五七)改印

尾崎久弥コレクション：蓬左文庫所蔵

※一行緩じ込内にて読めず



仮名垣魯文作「日光道中膝栗毛」(名古屋市蓬左文庫所蔵)より

透閑山の旗本矢場貞満の墓

山本 泰秀

(一) 旗本矢場貞満の墓

矢場貞満は、矢場城主(※)の甥に当たり、透閑山に葬られた人物である。透閑山とは勝林寺から北西へ二〇〇メートル離れた場所にあった。昭和二十三年頃、農地解放以前には、面積五畝位で、周囲の地形より一メートル程小高く、杉の大木五、六本、二十五センチメートルの小木十七・八本が生え、うつそうとした木立の中央に青山祖養が造立した石塔があった。

石塔については、加藤幸一氏の「増林地区の石仏」の『法華経及び般若理趣経供養塔』より抜粋する。

所在地 増林・勝林寺の北西二百米先畑の中
石塔型式 笠付角型(南西向き・高さは中)
年 号 享保十四年(一七二九)

〔左側面〕

皇風永扇帝道遐昌佛日增輝法輪常転
国家安寧風調雨順五穀豐登万民康楽

〔正面〕

舌頭撃出妙蓮華八軸梵経邊齒牙
大乘妙典一千部誦誦供養塔

大地群生得成佛無端俱驚白牛車

〔右側面〕

享保十四己酉年十月十五日
青山祖養造立焉

〔裏面〕

元文五庚申年十月十四日
大乘般若理趣分一千巻誦誦供養塔
智慧清浄海理密義幽深

※矢場城は、^{かなやま}新田氏の^{にった}金山城の支城

で、太田市矢場町の恵林寺の南側にあった。

※上記石仏の〔左側面〕〔正面〕〔裏面〕の解説は、(六)を参照のこと。

※大乘妙典とは法華経のこと。般若理趣分とは般若經典の一つで、「理趣経」ともいう。密教化した般若經典である。(以上抜粋)

ところで右側面に刻まれた文字の中に、「青山(せいざん)」の名前が出てくる。この石塔を造立したのは勝林寺の檀家である青山祖養である。彼は中組の源六の伯父にあたり、享保十四年(一七二九)に大乘妙典誦誦供養のためこの石塔を造立した。その後さらに元文五年(一七四〇)にも裏面に般若理趣分の誦誦供養を刻んでいる。彼は、宝暦十一年(一七六一)十二月十一日に亡くなっている。

本論に戻すと、矢場貞満の子源六が出家し僧侶となり「青山」と名乗る。青山とは墓場のことで、十一世紀蘇東波の詩人蘇東波は政權抗争に敗れて捕らえられ、獄中で「是の處、青山骨を埋めるべし」と詠んだ。世の中に至る所骨を埋める場所がある。この牢獄が私の墓場となつてしまったという意味である。

蘇東波の言う青山とは墓場のことなのである。僧侶源六はここから青山を引用したと考えられる。

透閑という名称は関門を透過し、供養し過去を払い、除は解脱の境地に達したことから付けられたと考えられる。

ここに葬られた人物は、矢場貞満であるという。貞満は寛政重修諸家譜巻第七十七によると「慶安四年(一六五二)九月二十九日、常憲院殿(五代將軍綱吉)に附屬せられ、神田の館に候し、のち落ち度の事ありて蟄居せしめられ、家た(絶)ゆ」と書かれている。徳川実記の慶安四年九月二十九日の項では「この日長松(兄の綱重)御両方へ付らせる者七十四人。その外、諸番子弟百五十人召出されて両邸つけ給う。」となつている。また勝林寺過去帳によると「天和二年(一六八二)戊戌十月、

性心院殿自安玄體居士、中・矢場一函」とある。中組の矢場家（家紋は五三の桐）の家系が途絶えたことを示しているという。徳川禁令考によれば、百姓には院号、大姉号などを用いることは由緒あるもの以外禁じられ、江戸時代の主な藩主は院殿大居士、旗本一万石未満は院殿居士が使われた。このことからして、矢場は旗本だったことが分かる。

（故）星野龍雄氏の透閑山伝説によると、「勝林寺に落武者が訪れたので、寺では農夫の格好に着替えさせ、鎧や武具の全てを透閑山に埋没させた」という。矢場氏は自害。その墳墓との伝説である。

（二）増林の須賀家（増林二八二四）にある石塔

石塔に関しては、加藤幸一氏の「増林地区の石仏」の『（21）須賀家（増林二八二四）南西路傍』の増林55より抜粋する。

55・増林 釈迦十六善神塔

ぜんじん

須賀家〔増林二八二四〕路傍



55・釈迦三尊十六善神塔（『越谷市金石資料集』に掲載なし）
所在地 増林・須賀家（増林二八二四）南西路傍
石塔型式 丸彫り像付き角型（南東向き・高さは中）
年号 延享二年（一七四五）

〔左側面〕

〔左側面台石〕

阿你嚕神王婆□嚕神王
提頭頼陀神王鈍徒毘神王
印陀嚕神王咩闍嚕神王
娑你嚕神王禁毘嚕神王

〔正面〕

〔正面台石〕

文殊師利菩薩 法誦菩薩
玄奘三蔵法師（師）
真蛇對王

（釈迦如来像）

普賢菩薩 常啼菩薩

〔右側面〕

〔右側面台石〕

拔折嚕神王跋□徒神王
毘迦嚕神王迦毘嚕神王
俱鞞嚕神王麻徠嚕神王
真陀嚕神王□美嚕神王

〔裏面〕

〔裏面台石〕

延享二丑年二月吉祥日

幻住二十傳青山祖養造立焉

釈迦三尊十六善神塔の台石

〔左側面〕

阿你嚩神王（頻伽羅大将）
婆嚩嚩神王（波夷羅大将？）

提頭頼陀神王
純徒毘神王

印陀嚩神王（因達羅大将）
咩嚩嚩神王（迷企羅大将？）

娑你嚩神王
禁毘嚩神王

拔折嚩神王（伐折羅大将）
跋嚩嚩神王

毘迦嚩神王（毘羯羅大将）
迦嚩嚩神王

俱毘嚩神王（宮毘羅大将）
麻徠嚩神王

真陀嚩神王（真達羅大将）
□美嚩神王

（以上、抜粋）

〔右側面〕

この石塔は、かつて透閑山に隣接するところに造立されていた。戦後、（故）須賀精次郎氏によって現在地に移築された。

この石塔の裏面に刻まれた「幻住二十伝」とは、「幻住」は「仮の住まい」、「二十伝」は「先祖から代々受け継がれて二十代目」という意味であろうとのこと。そして、この石仏を造立した青山祖養は、初代先祖（源家と推定される）から数えると二十代にあたり、透閑山に葬られたと推定されている矢場貞満は、青山祖養の先祖代々の一人であるという。

この石塔の正面は、釈迦如来、文殊菩薩、普賢菩薩の釈迦三尊をあらわしている。その下には、玄奘三蔵法師と真蛇對王（深沙〔じんじや〕大将）、それに法誦菩薩と常啼菩薩の文字も刻まれている。

この石仏の台石の左右側面に刻まれた十六人の神王とは、仏教やその行者を守護する神で、多くは甲冑を身につけ怖い顔付きをしているという。十六の神王の中には薬師十二神将（薬師如来の家来である十二人の神王）の名前に由来すると思われるものがいくつか見られる。

（三）太田市矢場にある矢場氏菩提寺の恵林寺

矢場氏は、矢場の地に金山城の支城矢場城を構え、戦国時代に活躍した一族で、始祖は矢場総左衛門國隆で、金山城主新田家純の重臣横瀬（後の由良氏）國繁の弟である。

寺伝によれば、曹洞宗恵林寺はこの國隆（永正十五年、一五一八没）の開基とされ、その子矢場城主大炊助植繁は父母の菩提のため法名にちなみ笑岩山恵林寺を建立。開山は植繁の二男大年宗彭禪師と伝えられる古刹である。

寺内には矢場一族の墓が建立しているが、その一つが矢場繁和の墓といわれる五輪塔がある。その銘文「為大椿寿禅定門靈位 敬白 永禄五年（一五六二）壬戌□月八日」は、現在判読が困難であるが、これらに代表される一連の墓石群は名族矢場氏を研究する上で不可欠のものと思われる。

次は國隆の戒名と没年である。

戒名

笑岩性忻居士

永正十五年三月廿九日

次は國隆の父、成繁についてである。

桐生市由良信濃守源成繁公

家来二名の矢場姓が有り

矢場主計、矢場内匠之助

現在、群馬県内電話帳掲載矢場姓は、一名もない。矢場は、当増林の地にて姓（苗字）を絶ったということになるのではないか。

（四）龍ヶ崎市若柴町にある新田氏菩提寺の金龍寺

『太田山と号し、曹洞宗。本尊は釈迦如来。応永年間（一三九四～一四二八）に新田貞氏が祖父義貞の廟所として上州太田の金山（かなやま、現・群馬県太田市）に創建。天正十八年（一五九〇）新田氏の一族由良国繁が牛久（うしく）城（現・稲敷郡牛久町）に移った時にもに移転、のち新地（しんち）村（現・牛久町）に移るが、寛文六年（一六六六）に現在地に移る。天保四年（一八三三）若柴宿（わかしばじゅく）の大火で類焼し、安政五年（一八五八）再建。また、本堂裏には新田義貞以下、累代の墓が並んでいる。寺宝の絹本着色の十六羅漢像（重文）は、鎌倉時代末期の作と思われる。これには道元自筆とされる「羅漢供養記」が添えられており、道元が宋より請来したものである。』（『日本名刹大事典』より）

（五）五代將軍綱吉の綱紀肅正と矢場貞満

五代將軍綱吉による天和の政治の特色は、いわゆる賞罰厳明にある。綱吉は越後騒動を親裁して、越後二十五万石を取り潰し、世間の耳目を驚かせたのをはじめとし、大名改易、減封処分すること四十六家、旗本百余家に達す。その他、閉門、遍塞

役儀罷免等を加えれば、幕臣の処罰は実におびただしい数にのぼる。

徳川林政史研究所の昭和五十三年度研究紀要によると次の通りである。

『表（第1表 処罰理由・処罰内容関連表」、掲載省略）は、幕臣団に対する処罰理由と処罰内容との関連をみたものである。同表によると、綱吉政権期に処罰された幕臣は、判明しただけでも一二九七名に及んでいる。まず処罰理由をみると、「勤務不良」による被処罰者（以下、処罰者と略す）が最も多く四〇八名（三一％）を占め、次いで「故ありて」の三一五名（二四％）、「上司引責」・「連坐」・「縁坐」などのある事件・人物に関連して処罰された者一八三名（一四％）、「行跡・素行不良」・「不正」などの理由により処罰された者とを合わせると、全処罰者の六五％に及んでいることは、綱吉政権の眼が封建官僚機構の整備にあったことを物語るものである。

また、処罰内容を見ると、改易・減禄処分された者が四二二名に達し、全処罰者の三分の一を占めている。しかもその内、「勤務不良」によって改易・減禄処分された者が最も多く八九名（二一％）にのぼっていることは、「上司引責」・「連坐」・「縁坐」によって処罰された者の多さとおいまって、綱吉政権の綱紀肅正の厳しさを示すものであろう。』

五代將軍徳川綱吉政権期間、初期から二十九年間処罰者一二九七名、その処罰理由「故ありて蟄居」を命じられた唯一人の人物矢場貞満だけである。

新田系図が龍ヶ崎の曹洞宗金竜寺に葬られ、矢場系図が太田の恵林寺に葬られている関係上、同じ曹洞宗の勝林寺に落ち延び先として選んだものと思われる。延達也の天和の治はこの頃

のことを正に記したものである。

(六) 透関山の青山祖養の石塔『法華経及び般若理趣経供養塔』

この石塔の「左側面」「正面」「裏面」に刻まれた文字について、駒澤大学外国語部の名誉教授松本丁俊氏による解説を次に紹介する。

「左側面」

皇帝の風貌永扇帝が云った、仮りに仏の日は益々輝き、法輪は常に廻り、国家安定、風雨が順調に、五穀は豊に、萬氏が健康で楽しく。

「正面」

口で妙蓮華（法華経）の経は常に音に伝える。
法華経を千部読んで供養の塔
地球の衆生が仏となり、白牛車が勝手に動く。

「裏面」

大衆の般若經典 理趣経一千巻 読誦供養塔に智慧が良くなり、
難しい理にも理解できる。

【参考文献】

寛政重修諸家譜

桐生市史 上巻

史学雑誌第六九編十一号

徳川林政史研究所研究紀要

禅学大辞典

日本名刹大事典

増林地区の石仏

吉川弘文館

東大文学部内

昭和五十三年度

大修館書店

雄山閣出版

加藤幸一氏

越谷コラム

越谷七不思議の選定

当会では、市民の多くの方々に越谷の歴史に触れ、親しんでいただくとう「越谷七不思議」を会員による投票で選定しました。



「産業支援活動センター」では、当会の発信した「越谷七不思議」に賛同していただき、「ふるさと発見 越谷七不思議 観光マップ」を3千部作成し市内各所で配布。多くの方々からの好評を博し、さらに2千部増刷しました。



江戸時代の名物・間久里の鰻

宮川 進

旅の楽しみの一つは、ご当地名物の美味しいものを食べること。

將軍さまから庶民まで、毎日、たくさんの人が通った日光道中越ヶ谷宿では、旅人のおもてなしに何を差し上げていたのでしょうか。

当時の街道には宿場と宿場の中間に、「立場」（たてば）というお休みどころがあり、名物をお出しして、旅の疲れを慰めていました。

越ヶ谷でいえば、草加との中間の蒲生、粕壁の中間の間久里が立場で、蒲生の名物は「焼米」、間久里の名物は「うなぎ」でした。

うなぎやといえば、江戸中にありましたでしょうし、別に越ヶ谷まで来なくても食べられたわけですが、殊のほか、喜ばれたのが「間久里のうなぎ」でした。

その「間久里のうなぎ」を好んだので有名なのは秋田・佐竹の殿様です。

残っている記録を二つばかり、あげてみますと――

○「国典類抄」という秋田藩の記録集に含まれる「円明院様御代」の家老勤中日記、享保9年（1724）4月6日の項。これは秋田から江戸へ向かう御参勤道中の際の家老・今村大学の日記ですが、越貝（原文のまま）鰻茶屋に殿様が立ち寄られ、家老始め御側廻りに鰻とお酒を下されたと書かれています。

○「御参勤御道中目記」は文政13年（1830）に秋田から江戸に至る御参勤の御側頭取・物書の記録です。具体名として、この日記を読み下し文で、平成1年に新しく編集された伊沢慶治氏は熊谷環か田口新蔵ではないかと、とされています。

それには、5月8日、上間栗（原文のまま）秋田屋市右衛門の処へ立ち寄り、お休みされたが、その際、鰻の献上をうけ、またお買い上げをされたとあります。

秋田のお殿様が、この秋田屋さんをひいきにされ、「秋田蘆」（しゅうでんろ）という専用の別室まで建て、参勤交代の際などに利用したという話は有名です。



そして、間久里のうなぎのファンは秋田の佐竹さんに限らずほんとに大勢いたようです。

その一人が、暴れん坊將軍・徳川吉宗の孫で、老中として寛政の改革を推進した松平定信でした。

○「霞の友」という満19歳、安永5年（1776年）のとき道の記には――

まだ、日はなかばすぎである。みな疲れたであろうと、まくりという里の茶店で休んだ。その茶亭の前に、古川が流れて、白鷺などが一、二羽浅瀬で魚を獲ろうとしている様子は、実に趣がある　と書いています。

○「甲寅の紀行」（寛政5年　1793）には次のとおり記されています。（6月11日）

―それからまた出立して行くと、まくりというところに茶店がある。いつも立ち寄るところである。ここの産のうなぎは、

ことに味が勝れている。供の者たちにも食べさせて、しばらくの間暑さをしのぐとした。――

○「丙辰の紀行」(寛政8年 1796)の時は次のとおりです。(8月9日)

―辰刻(午前8時)のころ千住にいたった。まくりの里で休息した。ここの眺望はおもむきがある。歌などにはまくりの里とは詠みたいものであろうという。――

○「戊午紀行」(寛政10年 1798)には次のとおりです。(6月23日)

―千住の駅(うまや^Ⅱ引用者注^Ⅱ)にいたって、送ってきた人に別れるということで、酒を汲み交わし、また出立して行った。

あの、まくりの里のうなぎの味がすぐれているので、こここそしばらく休息しようと、人々と語り合うのは、実に風流の情がないものだど腹を抱えて笑った。水野為長は別れを惜しんで、ここまで追いかけてきた。また、酒を汲み交わし、かのうなぎを食べた。このころ、私は病氣にかかっていたが、いちだんとすばらしい味をめて、酒も三杯つくした。

このように、松平定信は何回も、間久里の鰻の美味しさをほめてくれています。

養父・松平定邦が白河藩主であって、第10代將軍・家治の日光杜参の警護を白河で行なうようにとの命をうけ、前述の「霞の友」の旅をしてから、老中となった間のブランクを経て、老中の任を解かれた後は、再々、領地・白河を訪れ、越ヶ谷のうなぎを賞味し、その記録を残してくれたことは、まことにありがたいことです。

市内大相模の大聖寺の仁王門扁額は定信の書ですが、ひよつとすると、うなぎのご縁があったのかもしれない。

◇

定信のころ、幕府は1798年に、1800人体制の大調査団を送り込むなど、蝦夷地への関心を見せ始めましたが、日光道中を通って、その「蝦夷」に向かったひとたちが間久里のうなぎのことを書きとめてくれています。

画家・谷文兆の弟の谷元旦は「蝦夷蓋開日記」に次のように記しています。

○この日記は、寛政11年(1799)の幕府の蝦夷調査隊に随行したときの記録です。(3月25日)

―越が谷駅を早く発して行。此駅、町の中程に天満宮有。数丁を経て、大里という小村有。その続き、真栗(原文のまま)也。鰻の蒲焼、名物也。此所を過て東を望めば、筑波の男体女体二つの峯、相ならびて峨々たり。――

◇

○名奉行・遠山金四郎景元の父である遠山景晋は同じ年に、幕臣として蝦夷地に派遣されましたが、その旅日記「未曾有記」に次のように記しています。(寛政11年3月21日)

―廿一日、晴。(越が谷)六時出立。まくり、休。(名物の鰻魚(あり)。村上。長坂等、手を携へ、都外の緩歩いと興あり)左右、田野、桃花盛也。――

◇

この寛政11年という年は高田屋嘉兵衛によってエトロフ航路が開かれた年でもあります。

○幕府の奥詰医師で薬園総括の任にあたっていた渋江長伯も蝦夷地探薬調査を任じられました。そして、薬園在勤の近藤金之助や谷元旦などを主体として3月24日に江戸を発ち、蝦夷地に向かい、9月24日に帰着するまで、調査を行いました。

○「東遊奇勝」は、その際の記録です。(3月25日)

―大沢之宿より出、宿中天満宮アリ。大すそ長縄手大里小村あり。上マクリ茶屋の後沼あり。鰻鱺の名物、長縄手筑(原文は「築」)波山右に見へる。男体女体の眞面あさやかなり。

◇

○そのすぐ後にも、福居芳麿という国学者が享和元年(1801)と文化4年(1804)の二度にわたり、蝦夷を訪れていて、「蝦夷の嶋踏」という著書に次のとおり書き止めています。(享和元年2月25日)

―大沢橋をわたる。このながれを本荒川(モトアラカワ原文のまま)といふとぞ。間久里村、むなぎ(うなぎ)ひさぐ(売る)家あり。ここは味ひ、いとよくて、わがさにて「江戸前」といふは、このわたりよりいづるをいふ也となむ。―

◇

次の年、享和2年(1802)には「東案内記」が書かれています。その筆者については不明なのですが、これも蝦夷地見回りに出た幕吏の一人が書いたものではないかといわれています。

ます。享和2年の4月から12月にかけて江戸からエトロフを往復したときの記録です。

○東案内記

―越谷宿 粕壁迄二里廿八丁

当宿家数四百余軒も有て軒並に土蔵作にて至て町並も美し誠なり鄙にてハまれなる家の作りなり、宿を出れ八大沢橋といふ橋ハ越れハ

大沢宿

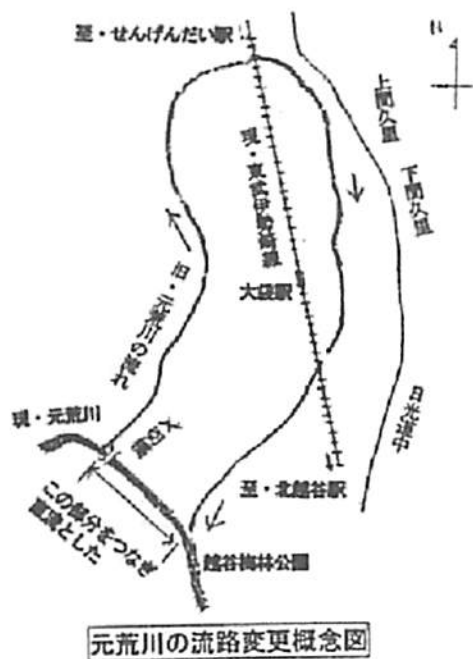
扱爰にも家数三百軒も有て、入口には香鳥(ママ)明神と号社有、夫より少し先に

マクリ村

此里家数少し有て蒲焼の名物なり、乍去ちと高値なりし、少し行は

追田村 備後村

―と、あつて、値段のことを書いていてくれるのは、微笑ましい感じがします。



◇

間久里で「うなぎ」が売られるようになったのは、もちろん、日光道中に旅人が通るようになったことと、周辺の「元荒川」の川の流れの影響があるだろうと思われます。

いま、元荒川は間久里の4kmほど西を直流しています。それが江戸時代の初期までは、ちょうど西の現・袋山地区で間久里まで東北方向へ曲流し、そのあとUターンして、西南へ流れ、大林地区で、現在の元荒川の流れへ戻っていました。

この曲流による氾濫の危険を除くため、江戸時代初期、宝永3年(1706)に、現在、「べ切橋」が川に架かっているあたりで、間久里方面への曲流を切り離し、袋山から大林へ、まっすぐに川をつないだのです。

先述の文章の中にも、「古川」と書かれているものがありました。これは「川の付け替え」により、水が流れなくなった川のあとを言っているのだと思われます。

日光道中の古い道中記である「結城使行」(元禄13年 1703)は、国代えとなつて、新しく「結城」を領有することとなつた主君の先発隊として、結城までの旅をした水野長福の記録ですが、それには「加茂(蒲生)」の「焼米」の記載はありませんが、間久里のうなぎの記事はありません。これは記入もれとは、とても考えられず、そして、それまでの元荒川でもうなぎは取れたことでしょうか、当時はまだ、「間久里のうなぎ」は名物にはなっていないかつたのだろうと推測されます。

間久里のうなぎが名物となるのは、元荒川の曲流が直されてからのことだと思います。鰻を商うには、取れたうなぎを飼つておく「生費」があると便利です。そして、間久里の生贄は

自然の川のあとでしたから、十分にうなぎ成長の栄養素を含んでいる願つてもない環境でした。間久里のうなぎは、この好条件を活かしたものだつたのではないのでしょうか。

◇

それでは、記録に残っている「間久里のうなぎ」の古いものは――といえますと、冒頭の「国典類抄」(享保9年 1724)の次は「武奥増補行程記」(寛延4年 1751)であると思われます。

これは、盛岡藩主の求めにより、同藩士の清水秋全が書いた、参勤交代などの折に、いま通つているところを確かめたりする「イラストマップ」のようなものと思われます。

○そこには、上間久里と下間久里との中間に「名物うなぎ蒲焼」と書いてあります。川の曲流が直されたあと、間久里の人たちの努力によつて、「間久里のうなぎ」は名物として、名前が通るようになったものでしょう。

◇

○その次に残るものは、文化15年(1818)の竹村立義著「日光巡拝図誌」です。

―上間久里・下間久里、此所に三軒程有り、名物なり。

立義は江戸の新橋に住んでいた仕立て屋でしたが、無類の旅行好きで、各地を旅して、旅日記を残しています。

◇

○そして、同じ年ではありますが、改元されてからの文政1年（1818）に央齋が江戸から松前までの旅の記録としてあらわした「陸奥日記」にも、「間久里のうなぎ」の記載がありました。（3月27日）

—まく里といふ所に名物うなぎの有しかど—名物のうなぎはうまく—

著者の央齋については、よく知られていませんが、この江戸から松前までの旅で「模地数里」というスケッチ帳を残している江戸町人であり、この旅行が同じ時期に、松前奉行として現地に赴任する本多淡路守繁文の一行の旅と重なり、本多の部下である井上氏と道中、よく会っているのです、このことが、旅のキッカケとなっていることが想像されるようです。



その次に記録が残っているのは、渡辺崋山が文政13年（1830）に書いた「全樂堂日録」です。

—マクリという処に鰻をひさぐ家あり、これは小休とて、御駕もとどめて御供の人々を息するなり。此家鰻名におひたる、都の人も尋来るよし、茶いとうまし、奥まりたる所もいと寛潔なり、一齋先生題壁あり

我不免遂鱸追冊咲 無二齋

わすれたれどかくにてもありしや—

渡辺崋山は、三河田原藩士、江戸詰の父のもとで、江戸に生まれました。当時の田原藩は財政難に苦しんでおり、崋山も幼いときから、絵を描く内職をしながら、学問に励みました。天保3年、39歳で家老に就任し、藩政改革に尽力、天保7、8

年の大飢饉にも全国で唯一、餓死・流亡者を出さず、幕府から表彰されました。崋山は12歳から儒学を学び、藩校成章館の興隆をはかりました。

また、有名なのは画家としての足跡です。谷文兆などに学び、西洋画の要素を東洋画に取り入れ、国宝「鷹見泉石像」をはじめ、多くの重要文化財、重要美術品を残しています。

この日録に記された旅は、田原藩主に従い、日光へ行ったときの記録です。

その後、崋山は蘭学にも関心を深め、外国事情に精通する第一人者にもなりました。

しかし、目付・鳥居耀藏などに睨まれ、蛮社の獄にまきこまれ、藩主の災いが及ぶことをおそれ、切腹して果てました。



そして、もうひとつ、お殿様むけのイラストマップかと思われるものがあります。

○それは新発田藩士・遠藤奉慶が描いた「越後新発田より会津を経て江戸へ至る道中絵図」で、天保8年（1837）に描かれています。

—間久里 茶屋秋田屋七郎衛門の庭 御駕立鰻名物—と描かれています。

遠藤奉慶については、まったく不明です。この道中絵図も、前述の「武奥増補行程記」のように、お殿様の要望により、藩士が参勤交代の途中の絵図を描いたもののように思いますが、いかがでしょうか。

◇

○天保14年(1843)に、幕府のご典医・安長法眼によって書かれた「日本駅程検分雑記」に、「間久里のうなぎ」が残っています。

―上まくりこのところうなぎの名物なり売店三四軒あり―

この安長法眼は多紀元簡といい、医師の家にもまれ、松平定信に信任をえて、奥医師に抜擢されたひとです。

◇

○嘉永3年(1850)に刊行された道中絵図「増補新訂日光道中行程安見絵図」には、次のとおり、上間久里の箇所を描かれています。

―うなぎ沢と云 うなぎ なまず名物―

これは、旅人の便利のために発行された旅行ガイドマップです。

◇

○寛政5年(1858)の道中絵図「五街道細見記」には―「名物うなぎ屋」―と、上間久里と下間久里の間に記載されています。

さまざまな出版元から、道中絵図が発行されて、庶民の、あるいは日光へ、あるいは伊勢へ巡る旅のガイドとなりました。

◇

○その後に書かれた旅日記で、間久里のうなぎに触れているのはお隣、草加の野口甚左衛門の「日光山道中日記」(元治1年1864)です。(4月11日)

―まくり村うなぎ名物茶や多し―と書かれています。

◇

○フィクションではありますが、取り上げてくれたのは、弥次さん・喜多(北)さんの奥羽道中膝栗毛です。(弘化5年1848)

―やがて大房大林大里下蛤上蛤(原文のまま)立場にいたれば此所鰻鱺の名物売店三四軒あり辺の沼を鰻鱺沢といふ大枝村近し―(略)―

弥次郎「あねさんあらッぽいところを一貫ばかり焼いてくん なせいそれからあとは追〜だ」

女中「ハイ〜鰻魚は上ませぬか」

弥次郎「しれた事鰻鱺ばかりサ」

北八「そこが江戸ッ子だなあ」

弥次郎「そして筏はごめんだヨザツと大のが賞玩だ」

女「さよならお舟にいたしましょうヲホ〜」

北八「わるく洒落るしかしお前の舟なら泥くさいのも辛抱する」

女「沼うなぎぢやござりませぬ泥くさいはあげませぬ」

―(略)―

弥次郎「サア〜おめへもちっと鰻鱺魚でも食て精分を附て 氣を丈夫に持がい〜」

―(略)―

十返舎一九は東海道で膝栗毛が成功を収めたのち、弥次さん・喜多さんに目本全国あちこちを歩かせ、この日光道中にも登場させたというところです。

もう一つ、この十返舎一九のあとで、仮名垣魯文が同じ弥次さん・喜多さんを使って、日光道中膝栗毛を書きました（文政4年 1857）が、残念ながら、これには「間久里のうなぎ」は登場していません。しかし、これは当時、「間久里のうなぎ」が廃っていたのではなくて、この本が原則的に一宿一ページしか取り上げない編集方針（？）なので、越谷名物「鬼焼」（大型のせんべい）に場所を譲ったためと思われます。



これで、現在までに調べ上げた「間久里のうなぎ」の資料のストックは尽きました。また新しい資料が発見できるよう、幸運を祈っているところです。

ここでは、現代の時代小説の作家が「越谷のうなぎ」を取り上げているのを発見しましたので、ご参考までに、それを見てみたいと思います。

○新・古着屋総兵衛 第3巻「日光代参」です。著者は時代小説のベストセラー作家・佐伯泰英氏です。古着屋総兵衛とは徳川家康から幕府守護の最後の砦、最後の秘密戦闘集団に命じられた蔦沢一族を束ねる首領。この「日光代参」は幕府転覆を企てる御側衆・本郷康秀一味と蔦沢一族が対決するストーリー。

決戦の場、日光東照宮へ敵味方が日光街道を駆ける話のなかで――

（引用者註Ⅱ大黒屋の配下の）百蔵が、

「総兵衛様、鰻は好きかね」と尋ねた。

「鰻はあちらでは（引用者註Ⅱ総兵衛はベトナム生まれ）食したことがあるが、江戸では未だ食したことがない」

「ならば江戸からこの地に伝わった料理法の蒲焼きを食べてみるかね。この界限は川が多いから脂の乗った鰻が取れるんで。ただ料理の仕込みには時間がかかるがなあ」

「ならば、次の機会かな」

と総兵衛が諦め口調で答えた。

「いや、一案があるだ」

と返答した百蔵が、

「天松（引用者註Ⅱ大黒屋の小僧）、越谷に走れ。本郷様一行は本陣で昼食をとうろ。わしらは元荒川の手前の土手道の左手にあるあらかわ屋なる鰻料理の店とる。古着屋の百蔵が主の大黒屋総兵衛様をお連れするゆえ、三人前の蒲焼きを支度しておれと女衆のおつたさんに願いなされ」

「おつたさんですね。合点承知の助」と返答した天松が即座に姿を消した。なんとも身軽な天松だった。

――（略）――

総兵衛と百蔵が越谷宿の川魚料理屋あらかわ屋に到着したとき、土手道になんとも香ばしい香りが漂っていた。

「おや、なんとも腹に堪える匂いだな」

「総兵衛様、これが鰻の蒲焼きを焼く匂いだよ。匂いだけでも飯が何杯も食えるというほどの蒲焼きだよ。井に垂れをかけた蒲焼きを載せてくうと頼ったがおちるぞ」

「頼ったくらい何度でも落とそう」
と総兵衛が答えたとき、

「おや、百蔵さん、御着きかね」

とあらかわ屋の女衆のおつたが出迎えて、総兵衛の顔を見て愕然として言葉を失った。

「どうかしたけ、おつたさん」

「お、おまえさんの主様はこんなに若いだか」

「十代目を継がれたばかりだ。先代が早死になさったでな。若くしての跡継ぎだ」

「おっ魂消ただ。なんともいい男でねえか。旅役者も比べもんにならねえだ」

「おつたさん。旅役者とうちの旦那を比べてどうするよ。ほれほれ、よだれが口の端から流れてるよ。それより座敷に案内してくんな」

天松が前もって注文していたせいで、直ぐに蒲焼きを載せた丼が運ばれてきた。焼き立ての蒲焼きを賞味して総兵衛と百蔵は大満足した。なんとも美味しい越谷宿の蒲焼きだった。

―(略)―

完

出典・参考事項など

○国典類抄 秋田県立秋田図書館編・刊 1979(家老勤

中日記の原本は享保9)文中・円明院は秋田・久保田藩の第5代藩主・佐竹義峯

○御参勤御道中日記 読み下し文は「御参勤御道中日記」伊沢

慶治著 彦栄堂刊H1を使わせていただきました

○霞の友 訳文は「現代語訳 霞の友」橋本登行著・刊 S

62を使わせていただきました 甲寅の紀行 丙辰の紀行 戊午の紀行も同じです 文中・水野為長は田安家・白河藩(後に桑名藩)の家臣。松平定信に近侍してその腹心として寛政の改革を助けた。

○蝦夷蓋開日記 読み下し文は近世紀行文集成第1巻(蝦夷編)板坂耀子編 2002(原本は寛政11)を使わせていた

○未曾有記 多くの臣人が毛地にゆくも未曾有―このような未曾有がかさなることを記録するのは未曾有であるということ

○子校訂 国書刊行会刊1991(原本は近世紀行集成 板坂耀

○東遊奇勝 読み下し文は山崎栄作編・刊2003(原本は寛政11)を使わせていただきました

○蝦夷の鳴踏 読み下し文は近世紀行文集成第1巻(蝦夷編)板坂耀子編 2002(原本は寛政11)を使わせていた

○東案内記 原著者は不明 読み下し文は「東案内記」山崎栄作編・刊S56・9を使わせていただきました

○日光巡拝図誌 読み下し文は草加市史 通史編上 草加市史

○編さん委員会編 草加市刊H9を使わせていただきました

○全楽堂日録 文政13年渡辺崋山の主君が日光御祭奉行を命

じられ、崋山も同行した際の記録

○読み下し文は草加市史・通史編上 草加市史編さん委員会

編 草加市刊H9を使わせていただきました

○文中・一斎先生は佐藤一斎(林述斎の弟子)この佐藤一斎も

文政1(1818)に「日光山行記」に輪王寺法王が日光の

大祭りに赴かれるのに同行しての旅の記録を書いている。越

谷、間玖里の名前は記されているが、うなぎについての記述

はない

○日光山道中日記 読み下し文は草加市史・通史編上 草加市史編さん委員会編 草加市刊H9を使わせていただきました

○奥羽一覽道中膝栗毛 十返舎一九著 読み下し文は篠原陸郎著「奥羽一覽道中膝栗毛(二編上巻)について」(越谷市郷土研究会会報「古志賀谷」第16号)を使わせていただきました

○新・古着屋総兵衛 第3巻 日光代参 佐伯泰英著 新潮文庫 新潮社刊 H24・3

○その他 Wikipediaなどを参考といたしました。

越谷の六地藏石幢

せきどう

松本 裕志

お地藏さん・不動明王・観音さんと皆に親しまれている地藏菩薩・不動明王・観音菩薩は特に民間信仰の中で、今もいろいろな呼ばれ方をして、日本の各地にたくさん見られる。

加藤幸一氏が石仏著書の中で指摘するように「今や石仏・石塔の重要性は勿論、その存在すら忘れられている。(略)そして開発の波にのって石仏・石塔はこの世から消滅しつつある。」この一文を目にして、ふと気になったお地藏さんがありました。それは(一)「越ヶ谷町新町にある今はなき薬師堂前の子安六地藏石幢」と、(四)「鴨場そばの砂丘の墓地の六角六面地藏石幢」です。

平成二十三年三月十一日、金曜日、午後二時四十六分、東日本大震災があり、東北から北関東の太平洋側の被害は原子力発電所までも破壊し、津波の力を改めて知ることとなりました。地震の後、訪ねてみた越ヶ谷町の子安六地藏石幢は、笠は無く宝珠が石幢上につけている状況、鴨場砂丘の六角六面石幢は少し傾いているような状況でした。

「お地藏さま」と呼ばれる地藏尊像は、市内の寺院に数多く存在している。例えば、大きな高さのある江戸時代の尊像では東福寺、天嶽寺、一乗院などにあり、また言い伝えのある地藏尊もあります。お地藏様を乗せた舟が花田の地にさしかかると舟は急に動かなくなった。お地藏さまはこの地にいたいのだろうと、この地に安置したのがスナツカラ地藏である。一石六地藏菩薩像、六地藏塔、そして一尊一尊が並ぶ六地藏尊像などの

六地藏は、寺院の境内だけではなく、墓地にも多くみられる。市内には新しい六地藏が結構みられますが、大きさと古さでは天嶽寺墓地の六地藏があげられる。数少ない座像では、四丁野の十王堂墓地の六地藏が持物不明にまで破損、風化して座している。その他に、丸彫り地藏菩薩像、一石六地藏菩薩像、六地藏塔、六地藏石幢、地藏菩薩文字石塔、地藏像付き庚申塔などの石仏・石塔は数多くあるが、特に越谷市内の六角六面地藏石幢を探し訪ねることにした。

(一) 越ヶ谷新町にある今はなき薬師堂前の子安六地藏石幢

写真は、三・



一 後に笠の部分がなくった子安六地藏石幢である。六角六面石幢としては左手に子供を抱え、右手に錫杖という珍しい造形で、足元には

地藏にすがる子供がみえる。持物の香炉は柄香炉ではない。文化元年(一八〇四)の作である。周囲には台石・石塔の石が散乱している。

(二) 向畑(むこうばたけ)堂面の観音堂の六地藏石幢

この笠付き六角六面石幢は、享保五年(一七二〇)の作で、造立者名中に草加の松並木で旅人を襲う悪党を懲らしめたという鼠左平太の代々の先祖、浜野左平太の名前が見られる。

石幢の笠の型は唐破風で、また香炉を持つ地藏菩薩面の刻文



字は、「勝軍地蔵修羅道」となっていたというが、現在では解説が来ない。

後ろは墓地になっていて、鴨場砂

丘の六地藏石幢と同じ様子が感じられる。秋には公孫樹の葉や銀杏に敷き詰められて、何時も季節の花や線香の絶えない雰囲気

(三) 船渡の無量院の六地藏石幢



向畑堂面の観音堂の奥にある聖徳寺、その先に清浄院があり、この辺の田園風景は古利根川沿いに続き、北川崎の虫追い（埼玉県指定、無形民俗文化財）などもあり、自然が少なくなつた元荒川沿いとは大きく違っていて、水と緑と土の香の残された美しさのある、嘗ての郷土越谷を見ることが出来る。さらに北西に進んでいくと、無量院参道の六面六地藏石幢に辿り着く。

無量院の六地藏石幢は、持物の幢幡が翻るなど持物ののはつき

りした石幢である。享保三年（一七一八）の作である。笠には宝珠がないが、均衡のとれた単制石幢で、落ち着きがある。その他に、石塔形式が駒型の大小の一石六地藏菩薩像が並んでいて、六地藏の持物がよくわかる。無量院本堂の裏には三角測量の基準として選ばれた国土地理院の三角点標識と三角点が設置されている。

(四) 鴨場そばの砂丘の墓地の六角六面地藏石幢



宮内庁埼玉
鴨場の松林を
後ろにした砂
丘の上の墓地
入口に、少し
傾斜して建っ
ている六角六
面地藏石幢が

ある。天保五年（一八三五）の作である。

この墓地も整理が進んで区画が整ってきたようである。墓地の墓石、石塔を静かに見守っている地藏石幢は、およそ二百年前からの葬法、単葬と複葬のことを思わせる佇まいである。墓地の清掃をなさっていた大林寺住職と挨拶を交わし、この石幢はこの先どうなるのかという話になった。

(五) 三野宮の一乗院の六角六面六地藏石幢

三野宮一乗院へは、東武線のせんげん台駅や大袋駅方面から埼玉県立大学に向かう方法と、県道大野島越谷線を利用して、元荒川沿いに三野宮橋を目指すどちらかの行き方がある。

三野宮橋の手前右側に立派な本堂の薨が見えてくる。山門の無い境内はこんもりとした林を抜けると堂々とした本堂と、有



を微妙に表現して不思議な世界を感じさせる。蓮弁の台座は水を湛えた池のように見える。天保十五年（一八四四）の作である。隣にある地藏尊像は元荒川の方を向いている。

（六）野島の浄山寺の六角六面地藏石幢

越谷・岩槻など近在の人々に昔から野島の延命地藏として親しまれている浄山寺には、山門の左右に丸彫りの地藏菩薩像が立っている。

山門を入って境内の片隅には、六角六面地藏石幢が新たにできた基礎に固定されてチヨコンと建っている。幢身の上には笠・請花・宝珠があったと思われる石幢なのだが、今はなく、年代その他不明な点の多い小さな六角六面石幢である。

形文化財歴史資料一乗院の建具の案内の前で見る。六角六面六地藏石幢は、高さのある地藏尊像と並んで墓地の入口に建っている。笠の上に宝珠はなく、彫りの深い六角六面六地藏石幢で、六地藏の持物、形態は陰陽の変化

六地藏六角石幢 持物・形態 一覧表

	宝珠と鐺杖 1)は例外	宝珠のみ	数珠	幢・幡	天蓋	柄) 香炉	合掌	蓮華
1) 路傍 越谷町 旧観音堂	左手・児 足元・児 右手・鐺杖	●	●	●	●	●		
2) 向畑堂面 観音堂	●		●	● ●		●	●	
3) 船渡 無量院	●		●	●	●	●	●	
4) 鴨場砂丘 墓地	●		●	●	●	●	●	
5) 三野宮 一乗院	●		●	●	●	●	●	
6) 野島 浄山寺	●		●	●	●	●	●	

平成二十四年のこと、由緒ある浄山寺の八月二十四日の縁日に久しぶりに六角六面石幢に会いに行った。境内にかつての賑わいはなく、露店も僅か二店、かき氷をおいしそうに食べる親子連れの笑顔に涼をわけてもらった。

二月の縁日の頃、雪が降れば石幢の幢身の上に積もる白いものは、この小さな六地藏石幢をひとときわ親しみのわく姿にくれるような気がしてならない。

西方村旧記に見られる疱瘡・麻疹の薬

田部井明

享保年間（一七一六～一七二五）、疱瘡（ほうそう）や麻疹（はしか）などの感染症が大流行したときに治療薬として牛糞を使うよう役所が指導したというとてもない無茶苦茶な話がある。それは、西方村（現相模町）の旧記「触書」のなかにある次の一節である。

（便宜上、原文は読み下し文にします）

享保十五戌年

疱瘡麻疹に用い候薬法、お役所において仰せ聞かされ候事牛糞 疱瘡麻疹にもちゆ

右何れの牛にてもふんを黒焼きにし、粉にして用ゆへし、兼ねて拵え置くには蓬を食わせ、そのふんを取り、ほしこにして用いるなり、白き牛黒き牛あか牛なおよし

- 一 疱瘡はしか出でかねるに用ゆ、重き病体には度々用ゆへし、惣てほうそうはしかにてなやむに用いてよし
- 一 ほうそうはしかの後、腹中下り、又は熱さめかね気色重く痰咳やみかねる（とき）杯に用いてよし
- 一 ほうそうはしかの流行の時前方に用いてよし
- 一 ほうそうはしかの詰毒、又はかき破りたるにくろやきにしておつけられよし

右用い様は五六分程づつ白湯にてかきたて用ゆ、或は口にさわり呑みかたき時は布切れに包み、あたためたる酒にて用いてよ

し

右書物は領々触れ次ぎ御役所へ召し呼ばれ書面の通り写し、村々へ相知らせ候様にと仰せ渡され候間、村々にて御写し置き成らるべく候、以上

十二月二十一日 蒲生村 触次 源右衛門

また、享保十七年には、象の糞を原料とした薬の販売が許可されたという「御触」が出ている。

享保十七子年

江戸内藤新宿の末、淀橋と申す所、疱瘡其外薬に「象洞（ぞうほら）」ならびに「白牛洞」売り弘め候儀、願の通り申し付け置き候御触

岩手茂左衛門御代官所武州多摩郡 押立村 平右衛門

日野小左衛門御代官所同国同郡 中野村 源助

吉翔院領同国同郡 柏木村 弥兵衛

右三人の者、江戸内藤新宿の末、淀橋と申す所にて「象洞」ならびに「白牛洞」売り弘め候儀、願の通り申し付け候、試し候所、功能もこれ有り、疱瘡麻疹癩病その外難種の薬に候間、望みの者は右の所へ参調申すべく候、

以上

大岡越前守

稲生下野守

右の触書中「象洞」というのは当時、芝の浜御殿で飼われて

いた象の糞を原料とした薬である。（『享保撰要類集 薬種之部』）そこから推測すると、「白牛洞」というのは白牛の糞を原料としたものと思われる。

この御触れには大岡越前守の署名があるので、すっかり信用して越谷から淀橋まで「象洞」を買に行った人がいたかもしれない。医学的根拠が何もないのに、インチキな薬を広めたり、売るような人間は江戸時代だけでなく現代でもいるのではないか。享保のニセ薬をもって他山の石としたいものである。

出典『越谷市史』続資料編三 『享保撰要類集 薬種之部』

西方村旧記

越谷市有形文化財

古文書・平成三年

三月指定

文政年間（一八一八〜一八二九）に、西方村（現相模町）の有志が編さんした伝馬2冊、触書3冊、旧記5冊の和綴じ本の旧記には治水関係の歴史、越谷御殿の由緒などが記されている。



市立図書館に収蔵されている西方村旧記

越谷コラム

越谷駅東口 再開発により大きく変貌 定点撮影（時間差6年）

越谷駅東口再開発事業が本格的に始まったのは平成21年（2009）に入ってから。老朽化した店舗や住宅、空地などを整備して、29階建て高層マンションやシ

ョッピングエリアと公共施設を備えたツインシティが出現。平成19年12月（右）に撮影した地点を6年後の平成25年12月（左）に定点撮影した。



29階建て高層マンションがそびえる 平成25年12月 駅前に憩いの場所と噴水があった 平成19年12月

増林に残る庚申講

尾川 芳男

庚申講について

庚申とは（かのえさる・こうしん、六十日毎）干支の一つである。この日は、人の腹の中に三尸（さんし）と言われていて虫が隠れていてその人の過失を知り、庚申の夜に人の睡眠中に天に昇り、その罪惡を告げるので、罪惡を告げさせない為に睡眠をとらずに一晩中起きているという道教の教えが由来です。

増林の上組地区の庚申の日に庚申様を祀って徹夜する庚申講を紹介します。江戸時代の風習が形を変えてはいますが、現代まで残っているのはとても珍しいようです。

地元では「庚申講」（こうしんこう）のことを、言葉を短くして「庚講」（かのえこう）と呼んでいました。今では訛って「かないこう」と呼んでいます。

また、この日は悪い子供が出来るから夫婦の仲を断ち切るようにとの言い伝えがあります。

庚申講が何時頃の時代から始まったか？

このあたりの庚申講は何時頃から行っているか解りませんが、江戸時代以前らしいと言われています。

その根拠は、この上組地区の墓地である福寿院跡に、庚申待板碑である「山王二十一仏板碑」が存在していたからです。

高さ80 cm、幅40 cmで、その板碑の年号は天正六年（西暦一五七八年）二月とあり（「越谷市金石資料集」、現在は所在不明）、

増林上組の
山王二十一仏板碑
（「金石資料集」
60 頁から引用）



七九 天正六年（一五七八）二月
増林上組墓誌
（一） 高八〇cm・幅四〇cm

この頃にこのあたりで既に庚申待の行事が行われていたと思われます。それから約四五〇年も経た現在も庚申様を守り祀っています。

次の写真は上組にある江戸時代の庚申塔です。下部の台石には庚申塔の造立に協力した講の人たちの名前が刻まれています。



上組の庚申塔



祀りの形式は古老からの言い伝えによると、明治時代までは朝まで寝ずに起きていて、その後時代とともに徐々に変化してきているようです。五穀豊穡や家内安全のために講が催されてきたようです。

庚申講の数と戸数は？

上組地区で最初は笹原講から始まり、その後椎の木講・中妻講・上組講に別れて4つの講となり現在も別々に祀っています。笹原講から分かれたのは明治時代のことですがその資料等は未確認です。各講とも多数の家が庚申講に入っていたそうですが家庭の都合等で徐々に減り、現在では各講とも5〜8軒位の家で祀りつり続けております。(中妻講は現在8軒)写真は笹原組(講)、椎の木組(講)、中妻組(講)の江戸時代の庚申塔です。

何処で祀りが行われたか？

笹原講では当番制で約2ヶ月(60日毎)の持ち回りで地区の集会所に集まり庚申様(掛け軸)を祀り、かつては夕方から朝まで飲食をしながら四方山話で過ごしたようです。

後に夕方から午後10時頃や12時頃になつてからも行われてきた集会所が昭和38年に取り壊され

笹原組の庚申塔



ることにより、当番宿に移り、その後、護郷神社(旧称、浅間神社)の社務所で祀りが行われてきましたが、平成18年に従来の講を解散して、当番宿のみで庚申様の祀り事を行い、次の当番宿に庚申様(掛け軸)が申し送りとなりました。中妻講でも笹原講と同様に当番制で、当日は当番宿に集まり夕方から午後10時〜12時頃まで庚申様の祀りが行われましたが、5・6年前から現在の笹原講と同様に当番宿のみで祀りを行っています。

中妻組の庚申塔

椎の木組の庚申塔



昔は、講の宿にあたった家では、その日に餅をついて、庚申様にお供えをしていたそうです。

他の講についても同じ様に祀りを行っているそうです。

飲食については？

中妻講では7種類のおかずをお膳に用意することになっています。

- 1…生もの 魚（鮭・他の魚）
- 2…てんぷら 時期の野菜類
- 3…おひら 切コンブ・はんぺん・ちくわ（汁なし）
- 4…豆類 うずら豆
- 5…煮しめ はす・サトイモ・にんじん・コンニャケ竹の子
- 6…とりまし 大皿（さつまあげ・キンピラ・お新香）
- 7…フライ カツ・コロッケ

当番宿の都合で何月何日に開催する事を決めて、他の家々に周知しながらお米を家々毎に3合ずつ集めます。当番宿では、7種類のおかずを作り、お客さんにもてなしをします。お酒は出しませんでした（お酒を飲む講もある）。その他の経費はすべて当番宿の負担で行われていました。

招かれたお客は、ご飯と味噌汁、それにお膳にある大皿の「とりまし」のみをおかずにして食事をしました。その他のおかずは講が終わると各自家に持ち帰りました。

他の講についてもほぼ同様です。

祀りの手順は？

中妻講の当番宿では庚申様の掛け軸を床の間に飾り、掛け軸の前に線香たてを用意します。

現在の中妻講の掛け軸（左の写真参照）は「日月清明庚申」（じつげつせいめいこうしん）と書かれ、昭和十四年のものです。

お客様は当番宿

に訪問しての最初の挨拶の「おめでとうございます」

から始まり、掛け

軸の前で線香を2

本上げます。それ

からお茶（笹原講

や椎の木講ではお酒）で献杯して懇親会に入ります。

飲食をしながら四方山話して、決められた時間がくればお開きとなり、後日、次の当番宿に掛け軸を申し送ります。

以前は「当番帳」が存在していましたが、所在不明となつてしまいました。「当番帳」には、庚申講が開かれることに、日時・当番宿・経費や稲の出来具合、一俵の米の値段などの諸々の事を記載していたそうです。

最後に時間をさいてお話をして頂いた今井基善さん・今井利男さん・小菅未子さん、お忙しい所ご協力していただきまして有難うございました。また、聞き取り当日（平成二十六年二月二日、午前中）に、加藤幸一氏・秦野秀明氏に同行して頂き有難うございました。なお、庚申塔の図版は、加藤幸一氏作成のものです。

中妻組の掛け軸



とうかんぼうの狐火

鈴木康央

戦後間もない頃の大沢は、古い宿場町の面影を多少は残していた。その町場とは画して、逆川を挟んだ二つの集落があった。ここは全くの農村地帯で右（西）岸を鷲後、向かいが高畑と呼ばれていた。この集落は古く、宿場町成立の元郷といわれている。

私の家は川を前にして、向こう岸は櫟や榛の木、笹や薄などの雑草が生い茂り、人ひとりがやつと歩ける程のけもの道であった。土手からは一面の田圃が続いて遮るものもなく、野田街道を通る荷馬車や自転車が見え、未舗装で、たまに走るトラックやバスは木炭車の時代、さしま街道ともいわれたその先は久伊豆神社と天嶽寺の大きな森が黒々と連なり、朝霧や夕靄が棚引くと一幅の墨絵を見る様であった。逆川を越えたこの一帯を外河原いい、ここに観音坊という池があり、その昔この池から観音様の像が上がったので、池の縁にお堂を建て、お祀りしたので何時しか観音坊池と呼ぶようになったという。その近くに、地元の人が「とうかんぼう」と呼ぶ所があった。

子供達にとって、川向こうは未知の異界であり、冒険心を誘ったが近くに橋もなく、満水の夏は急流を泳ぎ渡るのも、渇水期に崖となる高い土手を登るのも容易ではなかったが、その先は広い耕地が続き、一本の大きな松の木が生えていて、その下に鳥居と朽ちた小さな祠があった。近くに笹竹のおい茂った小さい島のような藪があり、遠くからも見渡すことが出来た。子

供達はあそこに狐や貉が住んでいるらしいなどと、囁きあっていた淋しい場所である。

その頃、狐に化かされた話や、何処の家の年寄りに狐が憑いていたなどという話も珍しくはなかった。暗い夜道を自転車で行くと突然、背中に寒気がして荷台が重くなり気が付くと白い着物を着た女が乗っていて、驚いて夢中で走ったら何時の間にか女がいなくなったとか、買った油揚げや豆腐を夜道ですっかり取られてしまった話、また田圃の畔道で道に迷い、肥溜めにはまりいい湯だ、いい湯だと言っているところを助けられたなどときどきやかに語り、これはみな「とうかんぼう」に棲む狐の仕業だというのを子供心に半信半疑で聞かされていた。

それは私が小学生頃の出来事である。どんよりとした或る夜の、庭先に居た母が突然大きな声で「とうかんぼうに狐火が見えるよ」と言う。「とうかんぼう」は私の家からも見える、あの松の木の祠がある辺りを指している。家の中にいた私は急いで母の声しがした庭へ出て「とうかんぼう」の彼方を見ると、ぼんやりとした影絵の様な松の木のあたりに、小さな赤い炎が点々と連なり、とろとろと燃えているように、時々消えたり、また付いたりしながら、ゆっくりと少しづつ動いていた。その火は十数個か二十位はあったであろうか。私は初めて見るその不思議な光景にしばし呆然と立ち尽くした。「狐の嫁入りだよ」と言う母の声にふと我に帰った。やがて赤い火の行列はひとつふたつと次第に消えて、また元の闇に戻っていった。それは僅かな時間の様に思えたが、母はこれ迄も幾度も見たことがあつ

たという。

それにしても「とうかんぼう」とは変わった呼び名とは思っていたがその意味は解からずにいた。松の木の下に祠は矢張り稲荷神社だった。五穀豊穰、農耕の神（宇迦乃御魂神）の使いとして狐に纏わる話は稲荷信仰と結びついて、全国いたる所にあるという。

狐や貉が棲み人々を悩ましたという「とうかんぼう」も観音坊池も消えてしまった今となつては、狐火や化かされたなどと語る者もいなくなり、すべて一笑に付されて仕舞うであろう。

耕地には昔からそれなりの呼び名が付いている。多分、近くの蓮坊や観音坊などと類する字名かとは思つてはいたがそれ以上の関心は薄らいでいた。ある時、越谷市史を開くと江戸時代の大沢町の地誌に稲荷前として僅かな記述あるのを知り「とうかんぼう」とはこの事だったのかと、古くからのいい伝えにもひとり納得した。

一、外川原境押出シ上新田稲荷祠有之、六郎兵衛稲荷とい、（大沢猫の爪）原文のまま

一、新田耕地庄内道弥藏掘之先左右之田畑をいふ、新田いなりの杜近所故名付けしや或は老狐住みて往来の人を欺し事有故に斯いふも近在の者狐の事をとふかといふ故かくもい、稲荷と書てとふかと訓故の事、稲荷と狐を同様と俗人の心得るは誤りなり、江戸にても稲荷堀と書てとふかんぼりと唱ふる名目あり。（大沢町古馬宮・八二）

今や人口三十万を越えて、平成二十七年四月、中核都市移行を目指す越谷のど真ん中に位置する此の地域にも数十年前には、こんな長閑な風景や話が色濃く残っていたのである。確かに母と見たあの狐火は果たして「狐の嫁入り」の提灯行列であったのだろうか。その頃、私のすむ地域の各集落にも残っていた、夏の夜の風物詩といわれた「虫追い」の松明の炎が揺れ動く遠景を連想させて、おぼろ気になりつつある私の記憶の中で、今もささやかなロマンを感じるのである。

「狐の嫁入り」と言えば、昔見た黒沢明監督の短編映画にそんなのがあったのを思い出した。



昭和 35 年頃の逆川改修前で現在のキャンベルタウン公園付近 上はわらボッチ風景 下はアジ網舟風景

瓦曽根溜井からの写真撮影場所の特定について

鈴木恒雄

平成二十六年二月二十三日、越谷市郷土研究会河川史研究倶楽部の葛西用水の見学会があった。その帰りに越谷市図書館で溜井関係の古い写真を調べていたところ、偶然にも、図書館二階の野口富士男展示コーナーの中に、溜井とおもわれる写真を見つけた。今回、この写真をもとに、その撮影場所の特定を行ったので、その経過について報告する。

野口富士男展示コーナーの野口夫妻の写真撮影位置が、溜井部分であるとする理由は以下の通り。

①図1は、一九五二年（昭和二十七年発行）の二万五千分一の越谷の地形図であり、矢印は夫妻を撮影したと思われる想定場所である。

②図2-1の航空写真では、瓦曽根溜井の右岸は、当時干上がって、水田がつくられており、歩行が可能であることが読み取れる。その他に、この判断に関連した写真を2枚添付しておく。

図2-2は、一九八九年（平成元年撮影）の航空写真であり、溜井の土手から北側に延びる半島状のものが四ヶ村用水の取り入れ口である。

図2-3は、一九八七年（平成六十二年撮影）の四ヶ村用水の取り入れ口付近の様子であり、溜井の水部に入り江状

の地形が見える。

③図3 一九五八年（昭和三十三年撮影）のスケッチ図では、二人が歩く方向は河川敷から南南東に向かっており、河川敷が広く、流路が右から左に湾曲している地形が見えることから、地形図から推定される図1の矢印の撮影想定位置と考えた。また、図3の右側の遠方には溜井土手道が確認できる。四ヶ村用水の取り入れ口付近の溜井の中に凹型の高まりが見える。

④野口富士男の肩越しの屋敷林の中に神社（稲荷神社）の鳥居が見える。図2-1の航空写真でも神社周辺は、うっそうとした林となっている。図1の地形図、図3には、照蓮院の裏（中村家の南側）の独立樹（松）がみえる。

⑤図4は、江戸時代末の瓦曽根溜井を南側から見た図である。この溜井図には、当時の溜井周辺の詳細な様子が正確に写しとられているようである。

以上の理由により、この写真は溜井北部（現在の越谷四丁目）付近から稲荷神社方向・すなわち南南東方向の様子を撮影したものと特定した。

この野口夫妻の一枚のスナップ写真から、この地域に関心のあるものにとつては、航空写真では判らない当時の溜井周辺の様々な情報がかなり読み取れ、貴重な資料であることがわかった。

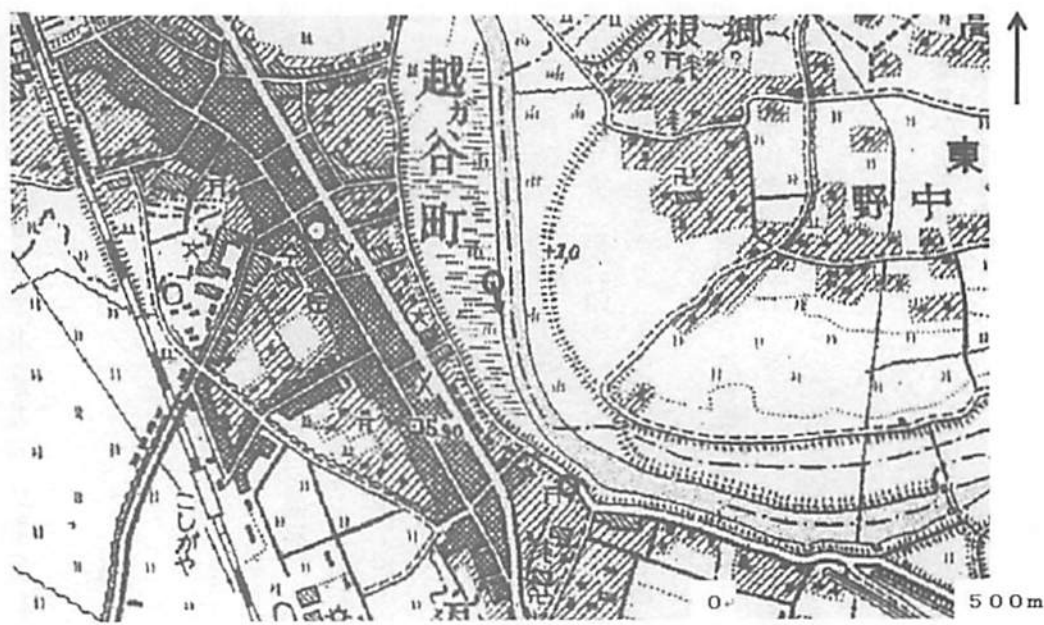


図-1 越谷 2万5千分1地形図 昭和27年(1952) 国土地理院



図-2-1 越谷 航空写真 昭和24年(1949)5月10日



図-2-2 越谷 航空写真 平成元年（1989）10月21日



図-2-3 越谷 四ヶ村用水坎に入る溜井側の水路 昭和62年（1987）5月9日

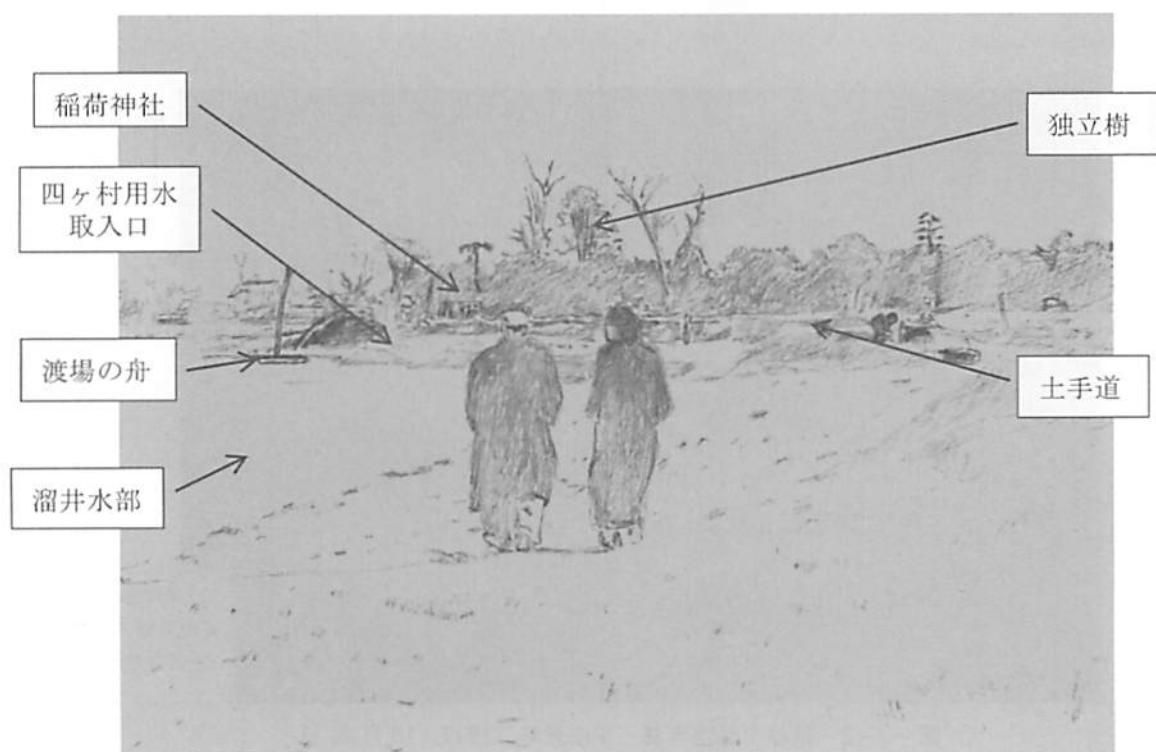


図-3 瓦曽根溜井から南方向を撮影した写真のスケッチ図 昭和33年(1958)3月
(原資料は野口富士男展示コーナーの写真を、加藤幸一氏が模写したもの)

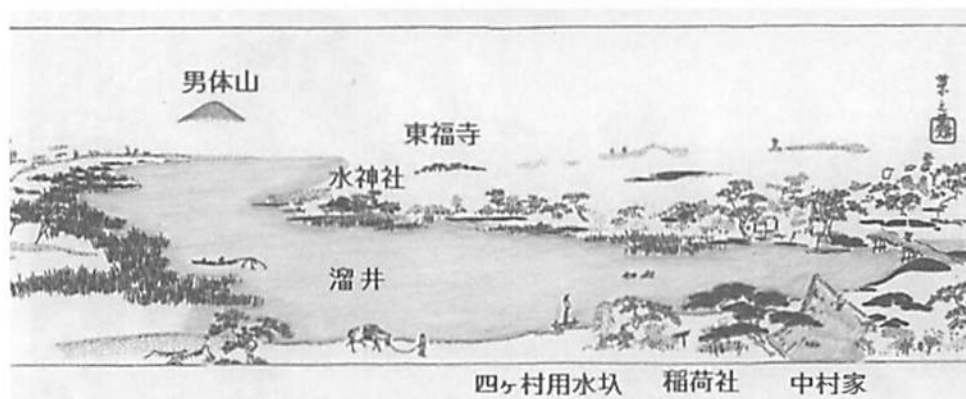


図-4 瓦曽根溜井図(原図は鳥文斎栄之)
鳥文斎栄之の絵を加藤幸一氏が模写したもの

越谷町で起きた怪奇現象

明治の新聞が報じた驚きの事実？

原田民自

古来、日本では「不思議な生物(幻獣)」が、たびたび人間界に出現し、それにまつわる目撃談も数多く語られてきた。その代表なものとして、天狗・鬼・河童・人魚などがある。

明治四十二年(一九〇九)十二月、越谷町本町二丁目の現在の越谷市郷土研究会の事務所「夢空感」付近で、どこからともなく瓦や小石が飛んできて、住民の頭の上に降り注ぎ大騒ぎになったと日本を代表する新聞が報じた。このような現象は全国各地に伝承として存在し、どこからか投げられたようであり、どこから飛んできたのか分からないところから、天狗が投げた石つづて「天狗礫(てんぐつづて)」ではないかと、まことしやかにいわれている。「突然空から石が降ってくる」「足元を見ると地面に落ちたはずの石がない」などの怪奇現象で、人々は天狗が人間の素行の悪さを怒り、悔い改めさせようと警告を発するものだといわれる。

約百年前に越谷町で起きた怪奇現象と同じようなことは全国に数多く残されており、一部を紹介すると次のとおりである。

嘉永七年(一八五四)、江戸麹町の家で「天狗つづて」が起きた。多い時は五十個から六十個もの小石が、どこからか飛んできた。屋根に上って石を投げるものを見極めようとする。石は背後から飛んできて、相手が背後にいるかと思ひ振り向くと、今度は反対側から石が飛んできたという。近所で評判に

なったが、次第に飛んでくる石の数は減り、ある日を境にこの現象は完全に消えたという。

明治九年(一八七六)、中村繁次郎という男の家の中で「天狗つづて」が起きた。家の中で正午ごろから急に石が降り始め、一時間ほど降り続いた。繁次郎は驚き、病床にある父を心配させたくないと思い、このことを話題にせず降ってきた石を神棚に上げ酒や食べ物を供えて妻とともに鎮まるのを祈った。すると神棚の石はいつの間にか消え、さらに激しく石が降り始めた。この日を境に毎日同時に石が降るようになったので、やむを得ず警察に届け、巡査が家を訪れたところ巡査の目の前でも石の降る怪奇現象は起きたという。

滋賀県で八百屋を営んでいた吉田松之助が、マツタケの買い付けに向かう途中、山の手の高い谷間から一尺四、五寸(約四十五釐)もあるのかという大きな石を投げ落とされた。「石を投げるのはだれか」と怒鳴ると、さらに大石が飛んでくる。人のいるような気配もなく恐ろしくなり逃げ戻った。村の若者たちが行ってみたら投げだされた荷物と大きな石が転がっているだけであった。これはどうも天狗の悪ふざけだろうということになった。松之助は現在も療養中だという。

●越ヶ谷の怪事

▽妖怪瓦石を降らすとの評判

埼玉県南埼玉郡越谷町本町二丁目にある「陶器商・津の国屋」「理髪店・松床」「餅菓子商・中村林蔵」方の裏手に、毎夜六時頃より盛んに瓦石を投げ込まれ、約一時間くらい止む事なく、屋上あるいは屋内戸障子より多くの大砂利・小砂利飛込み、さ



当会の事務所（夢空感）がある現在の越谷町本町2丁目付近

る三日には午後七時頃津の国屋」の女中「おくに」が食器を洗おうと井戸端に行ったところ、大砂利が顔に頭上に飛び来るより、腰を抜かさんばかりに勝手に逃げ込みたり。余りの不思議に近所にては総出で怪物の正体を見届け呉れんと八方に手を配り居りしも現れず、いよいよ五日夜は警官も立ち会ってそれぞれ探り調べたが、未だ効果がない。なお六日は昼間なるにも拘らず午前十一時頃又も小砂利を非常に降らしたり為めに、人心は恐れおののきながら見物する人が山のようにいる。

明治四十二年十二月七日 東京朝日新聞

東京朝日新聞

明治四十二年十二月七日

東京朝日新聞

越谷の怪事

△妖怪瓦石を降らすとの評判
越谷町本町二丁目内蔵商
津の國屋理髮店松床、時真子商中村林蔵
方の裏手に毎夜六時頃より盛に瓦石を投
し約一時間止む事なく屋上或は屋内戸
際より夥しく大砂利小砂利飛込み去
三日の如きは午後七時頃津の國屋の女中
おくにが食器を洗はんと井戸端に行きし
に是大砂利が顔に頭上に飛び来るよ
り腰を抜かさんばかりに勝手に逃げ込み
たり餘りの不思議に近所にては総出で怪
物の正体を見届け呉れんと八方に手を配
り居りしも現れず五日夜は警官も
臨検し夫々探検せざるも未だ其効なく同六
日は昼間なるにも拘らず午前十一時頃又
も小砂利を非常に降らしたり為めに人心
恠々見物山の如し

怪奇現象を報じた新聞の切り抜き 明治42年(1909)12月7日 東京朝日新聞

本文 題名・見出し・記事に
「越ヶ谷・越谷」と表記ある書物一覧

原田民自

「越谷」あるいは「越ヶ谷」と表記された書物の歴史をさかのぼると、徳川歴代將軍の日々の行動を記録した「徳川実紀」にその名を見ることが出来る。慶長年間に「越谷御殿」が出来たのを機に、家康が元和元年（一六一五）十月二十一日、越谷へ鷹狩りに訪れたことが明記されている。二代將軍秀忠もたびたび「越谷」を訪れた。日光街道三番目の宿場であった「越ヶ谷」は、宿場関連の書物や街道を行き来する旅人のための案内書も数多く残されている。

江戸時代から明治、大正、昭和を通じて「越谷」または「越ヶ谷」と表記された書物を一覧表に示した。越谷関連の書物は全体ではかなりの数に達する筈で、完成にはさらに時間を要するが、越谷を知る一助になればと、まとめたものである。

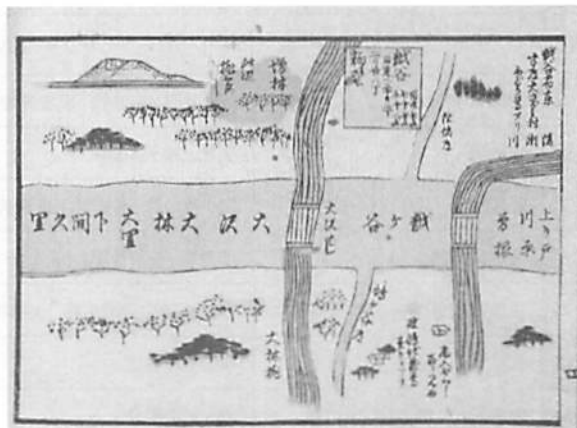
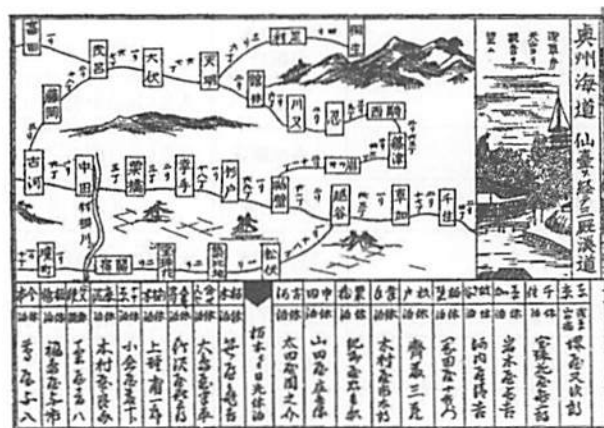
古河	中田	栗橋	幸手	杉戸	粕壁	上間	大沢	越ヶ谷	草加	千住	從東京
泊	泊	泊	泊	泊	泊	休	泊	泊	休	橋大住子	仙臺通り
太田屋周之助	山田屋庄兵衛	紀房屋忠兵衛	木村屋市太郎	齊藤三藏	國田屋土右衛門	秋田屋市兵衛	虎屋伊五郎	河内屋清吉	岩本屋長吉	橋大住子	道中記

No.	タイトル	サブタイトル・見出し・内容	作者／編者／出版社	発行年
1	寒松稿 寒松日記	腰谷者乞菓	稲村坦元	慶長18年(1613)～
2	日野資勝卿記	センシュニテ馬ヲツギ、コシカヤニテ晝ノ休ミ仕候	日野資勝	元和3年(1617)
3	徳川実紀 大徳院殿実紀巻四十	元和元年10月21日 大御所様戸田辺に狩し給ふ 越谷	国史大系	
4	結城使行	道ぞ永き日にやき米を 加茂 蒲生	水野織部長福	元禄16年(1703)
5	奥羽道中 増補行程記	道中絵図 騎西郡 越谷二里廿十八	清水秋全	宝暦元年(1751)
6	甲辰雑記	江戸御回米国々 越ヶ谷・新方・二郷半	向山誠斎	宝暦5年(1755)
7	大日本道中行程細見記	草加ヨリ一里三十丁 六十八文 四十文 越谷	吉文字屋市兵衛	明和7年(1770)
8	諸国方言 物類称呼	巻1～巻5 日本全国の方言を部門別に蒐集	越谷吾山	安永4年(1775)
9	俳人奇人談	越谷吾山	竹窓玄々一	江戸時代中後期
10	雅言俗語あすならふ	附・古人四字名句	越谷吾山	—
11	東遊雑記	越ヶ谷駅御止宿、永き町ながら家造草葺にて見苦しき駅也	古河古松軒	天明年間
12	諸国算額新集	江戸時代 下間久里村の第六天の算額 判読文	山形大学編	寛政3年(1791)
13	潭海	蒲生の金剛寺の2匹のかしこい犬の話 200文	員正恭	寛政7年
14	日光駅程見聞雑記	日光道中記 上間久里うなぎ	多紀桂山	享和3年(1803)

No.	タイトル	サブタイトル・見出し・内容	作者／編者／出版社	発行年
15	日光道中分間絵図 第一巻	道中絵図 元荒川 越ヶ谷 宇大沢板橋 高札	江戸幕府	文化3年(1806)
16	十方庵遊歴雑記	埼玉郡大林村川添の桃林	釈敬順	文化11年(1814)
		野島浄山寺地藏尊		
		大相模大聖寺の不動尊		
17	猫の爪	大沢町地誌	福井猷貞	文化～文政年間
18	瓜の蔓	越ヶ谷町地誌	〃	〃
19	甲子夜話	看花三記 越ヶ谷花見 文化11年2月26日	松浦静山	文化11年(1814)
20	五街道取締書物類寄	越ヶ谷宿文太郎 江戸幕府より褒賞	児玉幸多校訂	文政年間
21	諸国道中商人鑑	江戸より六里越ヶ谷宿入口瓦曾根村中屋五郎右衛門	竹埜半兵衛	文政10年(1827)
22	東都近郊図	越谷宿 馬次 二七ノ市 大沢町 馬次 十日カハリ	仲田唯善	文政13年(1830)
23	金楽堂日記	日光紀行 マクリ村 鰻屋で小休止	渡辺華山	〃
24	新編武蔵風土記稿	江戸幕府の地誌調査 挿図 埼玉郡 葛飾郡	林大学頭銜	天保元年(1830)
25	東都花暦名所案内	桃 大房 奥州道大沢の左リニ有江戸ヨリ凡六里	白井文庫印記	天保3年(1832)
26	闇夜磔	戯劇百人一首	越谷山人	天保4年(1833)
27	大沢町古馬營	大沢町地誌	江沢昭融	天保11年頃 1840
28	東都近郊図	江戸近郊を遊覧するための案内図	山崎屋清七	弘化元年(1844)
29	奥羽道中膝栗毛 第二篇	大沢宿桃山遊覧の図 大相模不動尊	十返舎一九	弘化2年(1845)
30	諸国道中たび鏡	千住 草か 越がや かすかべ	加治紫山	弘化5年(1848)
31	大日本早見道中記	日本全国絵図	友鳴松旭	安政元年(1854)
32	改正増補諸国道中記	日光道中 越ヶ谷 鍋や清右衛門	積玉堂	安政年間
33	諸国道中図鑑	蒲生 瓦曾根 越ヶ谷町 大沢町 大ふさ 大林	翠松園二世主人	文久4年(1864)
34	日光道中旅鏡	道中絵図 川原曾根 越ヶ谷 大沢ばし 大沢ばし	山路真和 岡柳旭	元治2年(1865)
35	商家高名録	越ヶ谷大沢町天神ノ前 羽生屋佐七	県立図書館	—
36	定宿帳	越谷宿 なべ屋清右衛門 大沢宿 とらや伊左衛門	藤屋宗兵衛	明治3年(1870)
37	復古記	第11冊 435p 近藤勇ヲ引テ越ヶ谷駅ニ至リ	太政官	明治5年(1872)
38	武蔵国郡村誌	埼玉県下全域の村誌 郡誌17冊 郡村誌107冊	埼玉県	明治8年(1875)
39	絵入改正諸国道中記	東京ヨリ奥州道 越谷 なべや清右衛門	村田徹典	明治9年(1876)
40	新異国叢書 東京日光散策	昼時に越谷に到着 川のほとりのホテルに入る	エミールギメ	〃
41	三遊亭円朝旅日記	越ヶ谷駅で天嶽寺という大寺が有 鎮守は塞神	三遊亭円朝	〃
42	諸国道中記 旅中要文	奥州海道 越ヶ谷 泊 鍋屋清右衛門	宮本與晃	明治11年(1878)
43	新撰 両街道中便	大沢 泊 とらや伊左衛門	寺井義道	明治13年(1880)

No.	タイトル	サブタイトル・見出し・内容	作者／編者／出版社	発行年
44	日本道中袖鹽	陸奥青森ニ至ル 上間久里 秋田屋市良右衛門	小川寅松	明治13年(1880)
45	開盛道中独案内 全	越ヶ谷 宿 鍋屋清右衛門 大沢 宿 虎屋伊左衛門	山村清助	明治14年(1881)
46	諸国明治道中記	泊 瓦曾根 越ヶ谷 大沢 下間久里	佐藤三郎	〃
47	近世名家小品文鈔 中	越谷桃花記	小林喜右衛門	明治15年(1882)
48	大日本道中記大全 旅行必携	東京ヨリ宇都宮迄乗合馬車 越谷へ49銭	小宮山昇平	明治17年(1884)
49	一新大日本帝国道中記	千住 草加 越谷以北(絵図)	松井与兵衛	〃
50	日本道中袖鹽	越ヶ谷・河内屋清吉 大沢・虎屋伊右衛門	小川寅松	明治18年(1885)
51	大日本道中記	東京より奥州海道 千住 草加 越谷以北(絵図)	小川新輔	明治19年(1886)
52	改正大日本道中案内	駅程明鑑名所画入	大橋堂	明治20年(1887)
53	改正大日本道中案内	奥州海道 越ヶ谷 泊 河内屋清吉	児玉又七	明治23年(1890)
54	雅言俗語翌檜	諸国略地名	越谷吾山	明治27年(1894)
55	埼玉県地理	越ヶ谷町 元荒川ヲ界シ大沢町ニ隣シ糧ヲ以テ著ハル	西村正三郎	〃
56	大日本道中独案内細見図	コシカヤ オオサワ	河村音松	〃
57	越ヶ谷桃見の記	東京朝日新聞 6回連載	東京朝日新聞	明治33年(1900)
58	修学旅行 遠足の友	越ヶ谷に桃花を観る記	山田愷	〃
59	有明月	大林の桃林	雨谷一菜庵	明治34年(1901)
60	旅 第5号	無銭旅行 東武鉄道乗試	社末一記者	明治36年(1903)
61	関八州名士肖像録	南埼玉郡越ヶ谷町 大相模村 出羽村 蒲生村	内田安蔵	明治37年(1904)
62	東武線線路案内記	蒲生停車場 越ヶ谷停車場	戸丸晩鐘	〃
63	朝顔画報	武蔵 越ヶ谷	宇治朝顔園	明治38年(1905)
64	こころ乃花	越ヶ谷の一日 竹柏会同人	石樽辻五郎	〃
65	東京遊行記	越ヶ谷の桃林	大町桂月	明治39年(1906)
66	日本漫遊名所古蹟案内	東武鉄道会社線 川俣線 蒲生駅 越ヶ谷駅	鍾美堂	〃
67	御祭草紙	近藤勇捕縛 越谷より引返し流山に打入りたり	西村捨三	明治41年(1908)
68	埼玉県管内特種事業及町村事績訓	大相模村の養鶏 管内町村事績 出羽村	埼玉県	〃
69	写真タイムス 第参號	新設されたる武州越ヶ谷の鴨御獵場 大相模不動尊	明治製版所	明治42年(1909)
70	実業の世界	東武鉄道・社長 根津嘉一郎	実業の世界社	〃
71	衆議院議員撰挙人名録 南埼玉郡	越ヶ谷町 大沢町 蒲生村 新方村 蒲生村	実業新報社	明治45年(1912)
72	埼玉県誌 下巻	久伊豆神社 越ヶ谷町に在り 大房の桃林	埼玉県	大正元年(1912)
73	越ヶ谷案内	越ヶ谷八景 桃林 古梅園 宮内省鴨場 花柳界	大塚文雄	大正5年(1916)
74	層雲	越ヶ谷吟行	層雲編集室	〃

No.	タイトル	サブタイトル・見出し・内容	作者／編者／出版社	発行年
75	御即位記念事業	越ヶ谷町 小学校 記念貯金を開始せり	埼玉県	大正5年(1916)
76	狸狽界	天城と越ヶ谷御狸	金丸銃砲店	大正6年(1917)
77	山へ海へ	越ヶ谷の町、昔の陸羽街道の一古駅	田山花袋	"
78	東武線案内	蒲生駅 越ヶ谷駅	戸丸暁鐘	大正7年(1918)
79	三府及近郊名所名物案内	東武鉄道沿道の名勝 大相模不動尊 越ヶ谷	日本名所案内社	"
80	武蔵野の草と人	夜の越ヶ谷道	太田三郎	大正9年(1920)
81	漫画紀行 野の旅 山の旅	越ヶ谷の春色	三上知治	"
82	桂月全集 紀行一	越ヶ谷の半日	大町桂月	大正11年(1922)
83	東京近郊写真の一日	越ヶ谷 粕壁	松川二郎	"
84	近郊探勝	其日帰りと一夜泊り 越ヶ谷 蒲生	京屋書房	"
85	カメラを携へて東京の近郊へ	東武鉄道沿線 越ヶ谷桃林	東文堂	"
86	自治と人	埼玉県 東武線 越ヶ谷 大沢	国民新聞社	"
87	明治天皇御遺蹟之部 埼玉県	南埼玉郡大沢町御小休所 福井権右衛門方	埼玉県	大正13年(1924)
88	高齢者写真名鑑	越ヶ谷町 荒井新兵衛 92歳	大日本敬老会	大正14年(1925)
89	東武鉄道線路案内	鉄道絵図 越ヶ谷 武州大沢 桃林 大相模不動	吉田初三郎	"
90	一日二日名勝探りの旅	東武本線 大相模不動尊 越ヶ谷の梅と桃	白揚社	"
91	東京近郊電車案内	武州大沢の梅林桃林	渡辺政太郎	大正15年(1926)
92	東武案内 武蔵野	久伊豆神社 越ヶ谷町文化住宅地	米山美村	昭和2年(1927)
93	おもちゃ絵本	越ヶ谷犬張子	有坂与太郎	昭和3年(1928)
94	埼玉県史蹟名勝天然記念物調査報告	南埼玉郡越ヶ谷町 平田篤胤居宅	埼玉県編	"
95	俳人が絵を描くまで	越ヶ谷の梅林	本方秀麟	昭和4年(1929)
96	天然記念物調査報告	植物之部 第15輯 越ヶ谷の藤	文部省	"
97	おもちゃ葉巻志	越ヶ谷招猫	有坂与太郎	昭和5年(1930)
98	埼玉県名勝旧蹟案内	郷社久伊豆神社 大聖寺	埼玉県編	"
99	埼玉史談	久伊豆神社及び大聖寺見学の記	埼玉郷土会	昭和6年(1931)
100	釣魚秘伝全集 第2輯	東武線(浅草発)越ヶ谷下車 元荒川瓦曽根の梓下	村上静人	"
101	旅と伝説	埼玉県越ヶ谷地方の俗信	岩崎美術社	昭和8年(1932)
102	北葛飾郡読本	古利根の溜井	北葛飾郡教育会	昭和9年(1934)
103	新撰風土記	越ヶ谷町 大沢町 蒲生村	国民通信社	"
104	健康保険医報	国保類似の先駆 越ヶ谷順正会設立さる	健康保険医報社	昭和10年(1935)



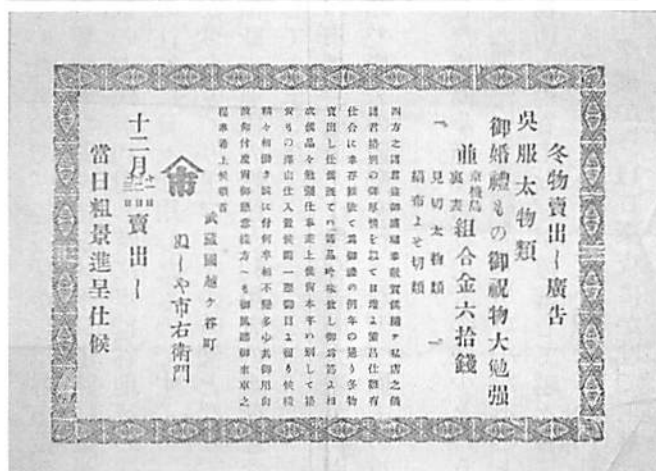
105	旅と伝説	越ヶ谷天嶽寺の新句碑	萩原正徳	昭和10年(1935)
106	釣りの王地東武電車沿線釣り場案内	駅付近には名の知れぬ用水や小堀に至る処に有	東武鉄道	昭和10年頃
107	埼玉県工場通覧	合名会社 由井友禅 第二工場 大沢町3729	埼玉県	昭和11年(1936)
108	越ヶ谷順正会事業要覧	受信者の心得 囑託医院一覧	小泉市右衛門	"
109	埼玉県下に於ける郷土を飾る時代人物	宇田長左衛門 見田方村浄土宗解脱山保鏡院浄音寺の開基なり 名主圭蔵の先祖なり 中村彦左衛門	埼玉県神職会	"
110	庭園	埼玉県越ヶ谷の大藤不開花の原因	堀正太郎	昭和12年(1937)
111	医療之保険	越ヶ谷順正会を繞る暗闇と真相		"
112	雲の柱	国民健康保険類似組合 越ヶ谷順正会に關く	警醒社書店	"
113	埼玉県工場通覧	越ヶ谷町 紺喜染工場 染谷製綿 井橋味噌醸造	埼玉県	"
114	関西医事	越ヶ谷順正会改組し国保組合のトップを切らん	関西医事社	昭和13年(1938)
115	先人の遺蹟	先妻が没して7年目に武州越ヶ谷の山崎篤利の娘を娶る	鉄道省	昭和14年(1939)
116	国語教育	越ヶ谷から新潟へ	竹内文路	昭和15年(1940)
117	淡水魚	越ヶ谷梅林	富安風生	昭和16年(1941)
118	利根川隋歩	草加 越ヶ谷 吉川	添田知道	"
119	ヤマベ(ハエ)の釣り方	東武線(浅草発)越ヶ谷下車 元荒川瓦曾根の梓下 逆川	村上静人	"
120	武蔵野探勝	越ヶ谷梅見	高浜虚子	昭和17年(1942)
121	平田篤胤と山崎篤利	平田篤胤先生遺徳之碑除幕式、並に記念講演会の概況	平田篤胤研究会	昭和18年(1943)
122	通信協会雑誌	考査の収穫 越ヶ谷に光る女星	通信協会	昭和19年(1944)
123	鮎の釣場	越ヶ谷付近	加納幸蔵	"
124	銃後の戦果	越ヶ谷の白梅	久米正雄	"
125	植物研究雑誌	コシガヤホシクサと欧州北米産との関連について	植物研究雑誌社	昭和26年(1951)
126	武蔵野史談	芭蕉は越ヶ谷に泊つたか	大川貞作	昭和27年(1952)

No.	タイトル	サブタイトル・見出し・内容	作者／編者／出版社	発行年
127	国民健康保険	今昔物語 越ヶ谷町単価騒動	国民健康保険中央社	昭和27年(1952)
128	タナゴ釣り場集	元荒川 越ヶ谷付近 古利根川松伏堰 千間堀付近	東京たなご釣研究会	昭和28年(1953)
129	武蔵野史談	越ヶ谷町見学記	稲村坦元	"
130	新関東風土記	越ヶ谷水郷	関東史蹟会	昭和29年(1954)
131	越ヶ谷風土記	郷土の紹介 社会科の手引き	真藤兼雄	"
132	新選ハイキング	越ヶ谷水郷	朋文堂	"
133	山と高原	越ヶ谷水郷 瓦曽根コース 古利根川コース 元荒川コース	"	昭和30年(1955)
134	東京近郊四季のハイキングコース	越ヶ谷水郷	志摩芳次郎	昭和31年(1956)
135	国民健康保険	越ヶ谷町の国保懇談会	有田栄一	昭和32年(1957)
136	国民健康保険	越ヶ谷順正会はかくして生れた	"	昭和33年(1958)
137	養鶏之日本	越ヶ谷養鶏地ルポ	養鶏之日本社	昭和35年(1960)
138	埼玉の館城跡	会田七左衛門屋敷 会田出羽屋敷 大相模次郎能高館	埼玉県教委	昭和43年(1968)
139	鶏友	一世を風靡した埼玉県越ヶ谷バタリー	鶏友社	昭和52年(1977)

越谷コラム



ぬし いちごふくてん
塗師市呉服店の絵葉書と冬物売出し広告
 越谷市を訪れる人に人気のあ
 る蔵造りの「しもた屋」。「塗師
 市呉服店」。今から三百年前の宝
 永年間の開業と伝わる。右上は
 明治から大正時代に発行された
 と思われる絵葉書は現在と変わ
 らない。下は明治十九年（一八
 八六）「武蔵国越ヶ谷町・ぬしや
 市右衛門」冬物売出し広告。



ぬしや市右衛門冬物売出し広告 明治19年(1886)

塗師屋呉服店
市小泉市右衛門
 越ヶ谷町

さようなら 越ヶ谷二丁目横断歩道橋

架橋43年の今昔

増岡 武司

戦後日本経済の高度成長は自動車産業の発展とその普及が大きな原動力となりました。

物流を担うトラックはもち論、マイカーブーム到来により文字通りモーターライゼーションの時代となり、道路はおびただしいまでに自動車があふれ多数の車両の通行により車と歩行者の間で交通事故が多発し、いわゆる「交通戦争」の時代といわれるようになりました。

1970年代には交通事故による死亡者が全国で過去最多の1万6765人に達し、その対策として歩行車の安全を確保するため全国の主要道路に横断歩道橋が架設されました。

越谷地区においては、越谷市政施行50周年記念史によると、昭和40年9月に初の横断歩道橋として越ヶ谷観音横町（現在の越ヶ谷三丁目）に第1号の横断歩道橋が架設されました。

今回撤去された横断歩道橋は越ヶ谷二丁目にかかれていたもので、昭和45年3月に県道足立越谷線（旧国道4号）と越谷駅前線が交差する交通量の非常



越ヶ谷2丁目横断歩道橋 昭和45年12月撮影

に多い交差点に架けられていたもので、越谷駅から越谷市役所や越谷中央市民会館、越谷警察署などを結ぶメイン道路に架かる横断歩道橋として、多数の市民が利用し時に東越谷地区の住民は越谷駅での通勤通学の往復に日々活用したものです。

その後時は流れ、時代が変わりバリアフリーの時勢となり、加えて高齢者社会となり横断歩道橋の階段が利用者の重荷となつて徐々に利用者が減少してきました。

これらのことから一部の市議会議員と市民有志の人達が利用アンケートを採ったり街頭で撤去の運動を行うなど、撤去の声が高まってきました。

歩行者の安全を守ってきた横断歩道橋も利用者の減少という現実の中で築43年を過ぎて補修にも高額な費用がかかることから、越谷県土木整備事務所と越谷市などが協議して越ヶ谷二丁目横断歩道橋は解体撤去することになり、平成25年11月10日に撤去作業が実施され10日深夜から11日深夜にかけて工事は順調に進み6時間、作業は完了しました。解体された部材はX字形の橋上の中央と四隅をバーナーで焼き切り分割して一つずつ大型トレーラーに積んで運び出し一夜にして撤去作業は終了しました。

撤去後の交差点は見通しも良くなり、横断歩道も4か所となり通行する市民にも好評のようです。

私はかつて現役サラリーマン時代通勤に朝夕横断歩道橋を利用して来ただけに一抹のさびしさを感じますが、これも時代の流れと考えております。

なお最近では市内でも横断歩道橋撤去の事例が見られ原宿表参道の横断歩道橋が撤去され話題を呼んでいるようです。

本文作成について越谷市広報公聴課のご協力をいただきました。

昭和 40 年代 市民から熱望されて設置したけれど…
越谷から横断歩道橋がまた一つ消えた
見慣れた風景が変わっていく



越ヶ谷二丁目交差点の横断歩道橋が消えた 右は平成 25 年 11 月 左は 25 年 12 月 中央は駅前マンション



クロス型の特徴ある市民に愛された歩道橋が消えた 右側の通りは越谷駅方面 左は瓦曽根方面



地元に 43 年もあって愛着のある歩道橋だった 奥は市役所方面 歩道橋の撤去で見通しが良くなった

日光道中ぶらぶら歩き(四)

— 吉野通りを歩く — 和泉 守

言問橋西口交差点から始まる吉野通りに入ると、何となくほつとするのは、車が少なくなるせいだろうか。しばらくして、浅草と今戸の境である山谷堀公園を横切る。今は銘板と橋台だけの吉野橋のたもとの北側には、元禄二年(一六八九)創業の神興太鼓の今風の店がある。今戸にはいると街路樹は今までの銀杏からプラタナスにかわる。

吉野橋から数百メートルほど北に歩くと、通りの東側が清川・橋場、西側が日本堤となるが、五〇年ほど前に住居表示が変わるまでは、この辺り一帯は山谷と呼ばれていた。ドヤ街(ドヤは「やど」の倒語)は、数は減ったが今も健在で、テレビ・冷暖房完備で一泊二二〇〇円という旅館が目につく。その利用者は、ここ一〇年ほどの間に、外国人が多くなったという。料金の安さだけではなく、治安のよさと上野・秋葉原・銀座などへのアクセスのよさが人気を集めているらしい。

吉野橋から一八〇〇メートルで明治通りとの交差点・泪橋。南千住は目と鼻の先だが、ちよつと寄り道。明治通りを隅田川の白髭橋に向かう。橋手前には、昭和の初めまで広大な敷地を持つ総泉寺があったが、板橋に移転した。地元有志の求めに応じ、平賀源内の墓だけを橋場に残した。従僕と眠る源内の墓には、由緒を書いた昭和五年建の大きな墓地修築碑があり、その裏側には杉田玄白の長文の墓碑銘が刻まれている。その結びは源内の

非凡な才に触れ、非業の死を悼んでいる。

「嗟非常人、好非常事、行是非常、何非常死」

泪橋に戻って明治通りを渡ると、台東区から荒川区に入る。

八〇〇メートルほどでJR貨物線を跨ぐ陸橋を渡る。地下にもぐる前の地下鉄日比谷線が地上を走り、すぐ目の前にJR常磐線のガード。二つの線路に挟まれた西側の狭い場所に大きな石造りの地藏尊(通称首切地藏)が鎮座している。三年前の東北大地震で左腕が落下し、胴体も大きくずれたが、無事修復されている。

ガードをくぐった先には小塚原回向院がある。この辺り一帯には江戸の二大御仕置場の一つ小塚原刑場があった。浅草鳥越橋際から浅草聖天町を経て、この小塚原に移転してきたのは、寛文七年(一六六七)以前と考えられ、江戸城から遠ざかるような移転は市街地の拡張に伴うものとされている。

間口六〇間余、奥行三〇間余、約一八〇〇坪もある仕置場は日光道中沿いに面していて、浅草山谷町と千住宿の間の街並みが途切れている場所に位置し、周囲は草が茫々と生えていたという。ここでは、火罪・磔・獄門などの刑罰の執行、山田浅右衛門による刀の試し切り、徳川家の馬の埋葬が行われ、また行き倒れ人の埋葬も行われた。

明暦の大火(一六五七)後に建立された本所回向院が手狭になり、幕府からこの地を与えられて下屋敷(常行庵)を置いたのは寛文七年(一六六七)のこと。これにより刑死者や行き倒れ人の埋葬・供養を行うことになる。

三・六メートルもある首切地藏は寛保元年(一七四一)刑死者の回

向のために造立された。元は貨物線の南側にあったが、明治二八年土浦線（常磐線）の敷設工事の際に現在地に移された。この工事に伴い、刑場跡は南北に分断されてしまった。

この小塚原刑場は明治十二年まで続き、その埋葬者は二〇万人にのぼるといふ。蘭学者杉田玄白・前野良沢等が明和八年（一七七二）、五〇歳位の女の刑死者の解剖（腑分け）を観たのはここである。解剖者は被差別民で、いつも執刀する「虎松」が病氣のため、祖父である九〇歳位の老人が行った。何回か行った経験があったという。この解剖を観て杉田・前野等はオランダ語で書かれた医学書「ターヘルアナトミア」の正確さを認識し、翻訳書「解体新書」を仕上げるのは三年後のことである。「観臓記念碑」の銅のレリーフが回向院の壁にかかっている。

この回向院の墓のたたずまいは八年前（平成十八年）にすっかり姿を変えた。一般の見学者に便宜を図るため、墓の右側に、檀家の墓と塀で区切った「史跡エリア」が新設された。安政の大獄の吉田松陰・橋本佐内、頼三樹三郎等、桜田門外の変の関鉄之助、有村次左衛門等十数名、あるいは坂下門外の変等で刑死した幕末の志士達の墓（記念墓）が一堂に会している。その中であって異色なのは関鉄之助の妾で拷問死した伊能の墓であり、彼女を顕彰する「烈婦滝本之碑」が大きくて目に付く。

吉田松陰は小伝馬町で斬首された後、遺骸はここに運ばれ、待ち受けた桂小五郎等によって、橋本佐内と並んで葬られた。しかしその墓石は罪人には許されず、ほどなく幕府によって撤去された。三年後に罪名が抹消された時の墓碑、久坂玄瑞揮毫の「松陰二十一回猛士墓」は、かつては多くの志士達と共に墓

の中央にあったが、今はエリアの一番奥にある。

しかしその骨はここにはない。罪名抹消の翌文久三年（一八六三）、高杉晋作は伊藤博文等を連れてこの墓所を掘り起し、亡骸を大八車に乗せて長州藩の抱屋敷がある世田谷村まで運んで改葬した。南千住から二〇^キ。現在の松陰神社の場所である。しかし今度は長州藩が幕府に反旗を翻し、また墓碑は破却された。社が建ち松陰が晴れて神になったのは、明治十五年（一八八二）のことである。二〇数^キ四方の墓所の奥には、ささやかな墓がある。

この神社から谷を隔てた西八〇^キのところに豪徳寺がある。寛永十年（一六六三）から井伊家の菩提寺である。松陰神社の数倍の広さの境内は、楠や杉の太木が立ち並んで荘厳な感じがする。墓所の一番奥に井伊直弼の墓がある。墓石は三^キを越え、墓碑は戒名で中ほどに「正四位上」とある。御祭神松陰は「贈正四位」。死して兩人は仲良くほぼ肩を並べたと言えようか。寄り道しすぎた、急いで回向院に戻る。

回向院のこの「史跡エリア」の日当たりの良い場所には興味をひく墓碑が四つ並んでいる。所謂悪党たちである。八年前にこのエリアに移されるまでは、寺務所の勝手口に面した窮屈な場所にあった。幕末の志士達に伍して、ゆつたりとしたスペースを与えられ、さぞ面映い気持ちでいるに違いない。

その一つは「源達信士 俗名鼠小僧 天保三年八月十九日」の碑。大名屋敷専門に稼ぎ、貧乏人にめぐんだ「義賊」と持ち上げられているが、実際は博打・遊興費稼ぎの単なる泥棒にすぎなかったらしい。品川の鈴ヶ森で処刑されたという説もある。従って、本墓はここであるが、今では本所回向院にある供養墓

(明治9年に歌舞伎役者が狂言大当たりのお礼に建てたもの)が彼の本来の墓のようになっていた。かろうじて「江戸東京 名士の墓碑めぐり」(人文社)には「墓は回向院(南千住)にもある」と記されている。

もう一人の墓にも目を向けよう。「榮傳信女 俗名高橋お傳」あの毒婦妖婦である。多くの男をたぶらかし、二人を殺しはしたが、もつと凄い悪人はいくらでもいる。何故そんなに有名になったかといえば、仮名垣魯文の「高橋阿伝夜叉譚」がベストセラーになり、それを脚色した狂言が大当たりを取ったからである。更には男を虜にしたその肉体の神秘性の故であろうか。

明治九年に捕まり、十二年に市ヶ谷監獄で斬首された。二九歳。執行者は八世山田浅右衛門。松陰を処刑した吉利の三男吉亮である。通説では、彼女の処刑をもつてわが国の斬首刑は終わりを告げた。明治十三年の刑法改正により斬罪は廃止され、死刑の執行は絞首のみに限定されることになったからである。

お傳の死体は浅草にあった警視庁の病院で解剖に付された。執刀者は軍医・小山内健。築地小劇場を創立し、日本に本格的な近代演劇をもたらした小山内薫の父親である。その標本は東大病院で長くアルコール漬けになっていたという。

彼女も二つ目の墓が谷中霊園にある。明治十四年の三回忌に仮名垣魯文が世話人になり、守田勘彌・尾上菊五郎等の芝居関係者が建てた。「いうならばお傳を飯の種にした人々の謝罪の意味がこめられているといっていだらう」(網淵謙錠)。「名士の墓碑めぐり」には墓は谷中霊園としか記されていない。

吉野通はなお北上するが、地元では「コツ通り」と呼ぶ。コ

ツとは古くからの地名である小塚原(江戸の訛りで「こつかっぱら」)に由来すると言われるが、「骨」の意味も兼ねているという。昭和四七年からの踏切の立体交差・道路拡張工事の際にも、首だけの骨が四〇人分、樽詰め頭の蓋骨が二〇〇ほど掘り出されたという。この工事で回向院はまた敷地を削られてしまった。

コツ通りは左右に昔ながらの商店が続く。五〇〇メートルほど歩くと、日本橋本町で分かれた四号線(日光街道)と再会する。四号線は吉野通を吸収して北上し二〇〇メートルほどで千住大橋に達する。コツ通りを三〇〇メートルほど歩いた地点から千住大橋までの間はいくつもの千住下宿。当初の千住宿は現在の北千住を中心とするわずかな地域であったが、その後大橋までの河原町、橋戸町が千住宿に加わり、さらに大橋より南の小塚原町、中村町が万治三年(一六六〇)に加宿して千住宿が完成した。大橋の北側(現足立区)が千住上宿、南側(荒川区)が下宿と呼ばれていた。

芭蕉は奥の細道紀行の際、多くの門人たちと深川から隅田川を舟で上り千住で上陸した。上陸したのは北岸なのか南岸なのか、論争があったと言うが、決着はしていないようである。

主な参考図書

- ・「新修荒川区史」(昭和三〇年)
- ・「杉田玄白と小塚原の仕置場」平成十八年度荒川ふるさと文化館企画展図録

- ・「橋本左内と小塚原の仕置場」平成二一年度同企画展図録
- ・「荒川区の歴史」松平康夫文・東京にふる里をつくる会編(名著出版)

文化財パトロール

平成二十四年度 大袋地区北部（恩間・袋山・大林・大房）

大袋地区北部の百基程度ある石仏の文化財パトロールを、平成二十四年三月から四月初旬にかけ、A班からH班までの八班に分けて実施した。

所在不明となった石仏石塔や、三・一の東北大地震の影響を受けて傾いたり分離したりした石仏や、劣化の恐れが心配な石仏があり、今後の大きな課題となっている。一方で地元の人により大切に扱われている石仏もあり、微笑ましい。

A班 元もと痛みが激しい庚申塔があつたが、その所在が不明で、それに代わつての庚申塔が新たに作られ置かれていた。

B班 田圃の中にあつて今後も風雨に晒されるため環境保持が課題となる石仏群や、劣化の恐れが強い石仏がある。

C班 設置場所の関係で将来破損や移動の心配がある石仏や、土台のコンクリートの破損に伴い破損の恐れがある石仏がある。

D班 所在不明となった石仏がある。また、平成二十三年三月十一の地震により、傾いたり本体と笠が分離した石仏がある。

E班 所在不明となった石仏が一基ある。また、道標の石塔があるが、本来の設置場所が不明で、その説明が望まれる。

F班 整然と管理されている石仏群がある。他には、石仏の頭に帽子をかぶせて大切にされている石仏もあった。

G班 剥離や破損が部分的に見られる石仏が多く見かけた。

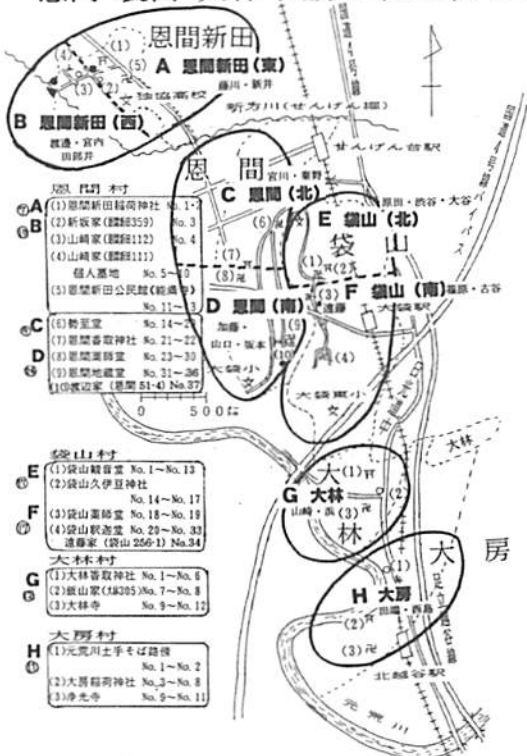
H班 所在不明の石仏が一基ある。また、道端にあるためイタブラされないよう地域の人たちの見守りが必要な石仏もある。

NPO法人 越谷市歴史研究会 文化財パトロールカード

分類	石 仏	地 区	文化財種別	所在地	NO	13
パトロール実施年月日	平成24年3月10日(土)					
調査員	藤川 幸洋 新井 敏彦					
資料中の誤りや お気づきの点	無					
五枚穴の(有・無)	有					
						
1. 当該場所に現存しているか。変更は無いが この石仏は無し、しかし 笠を 新しく 全く同じで作り 2. 対象物に破損は無いが 笠の下に 泥が 溜まっていた 3. 周辺の環境に問題は無いが(ごみ投棄など) 内通なし 4. 今後、破損や移動させられるおそれはないか なし 5. 特記事項 北 麓 へ 6. その他お気づきの点を何でも書き下さい。 なし						

平成23年度 文化財パトロール 大袋地区北部（恩間・袋山・大林・大房）

恩間・袋山・大林・大房の石仏案内図



平成二十五年度 大沢・越ヶ谷地区

大沢・越ヶ谷地区の八十基近くある石仏の文化財パトロールを今回から役員のみならず一般の会員の協力も含めてA班からF班までの六班に分けて、平成二十五年五月に実施した。

劣化の進行や倒壊の心配の石仏がある一方で、掃除が行き届き大事にされている石仏もある。報告内容の要旨は次の通り。

A班 石仏石塔の中には、コンクリ補修や破損、摩耗、ひび、青カビ等がみられた。

B班 刻まれた文字が薄くなってきたりしている石仏があった。

C班 底部にコケが生え風化の兆しが見られる石仏石塔があった。一方で、花や線香が添えてある石仏石塔も見られ、大切にされてきた石仏もあることがわかった。

D班 傾いていて将来倒壊の危険性がある石仏が二基程あり、心配である。

E班 台石に痛みがあり風化が進んでいる石仏や、土台が土の中に埋もれて最下部の文字が見えない石仏があった。また、石塔の表面に刻まれた「日」の文字が欠けていたり、ツタに覆われている石仏も見られ、今後の劣化が心配である。

F班 光背の一部破損や裏側のヒビがある石仏があり、今後破損が進行する恐れがある。掃除が行き届き大事にされている石仏もいくつか見られた。

※平成十七年度より荻島地区、出羽地区、大相模地区、櫻井地区、大袋地区南部、北部、大沢・越ヶ谷地区とほぼ毎年取り組んできた文化財パトロールの全ての報告書の原簿は、越ヶ谷町の「夢空感」内の越谷市郷土研究会事務所に保管してありますので御覧下さい。

文化財パトロール「大沢・越ヶ谷地区」

実施期間：平成25年5月12日（日）～5月末、今回から一般会員の協力してもらう。



文化財パトロールの調査員

- A 大沢町逆川方面（5月27日実施）
○宮川進、小林憲子、大野悦治、矢野一生、小林憲子様
- B 大沢町北部（5月14日実施）
○渡邊和照、坂本誠一郎、伊藤貴美、井橋義夫
- C 大沢町南部（5月22日実施）
○篠原陸朗、山口正夫、青山栄吉
- D 越ヶ谷町久伊豆社・天岳寺（5月14日）
○田端功政、香取世志男、加藤幸一、小川正雄、田部井明
- E 越ヶ谷町北部（5月27日実施）
○原田民自、渋谷正芳、大谷達人、宮原泰介、石垣李枝子、杉浦健之
- F 越ヶ谷町南部（5月23日実施）
○藤川吉洋、新井敏浩、小野博康、矢野美保子

「史跡めぐり」の記録

【第422回】平成23年(2011)1月3日～【第446回】平成26年(2014)3月28日

回	月日・曜日	行き先	案内者	参加人数
422	平成24年1月3日(火)	亀戸七福神 越谷とのつながりを探そう	加藤幸一	91
423	3月4日(日)～ 6日(火)	お水取りと仏像ベスト7	宮川 進	28
424	3月26日(月)	代々木周辺と明治の森を散策	渡辺和照	66
425	4月27日(金)	日本最古で最も新しい公園 ポケットパーク	田端功政	72
426	5月15日(木)	市民の誇りの鴨場 行政の現場見学会	増岡武司	39
427	5月30日(水)	世田谷方面 玉電に乗って サザエさん・吉田松陰・井伊直弼	篠原陸郎	73
428	7月29日(日)	上野・湯島・根津方面 あなたの東大を散策	渡辺和照	93
429	9月8日(日)	大道遺跡 第3次発掘調査見学会	宮川 進	50
430	9月29日(土)	秩父路の初秋は楽しいことがいっぱい	田端功政	68
431	10月28日(日)	野島浄山寺の秘仏 お地藏様の特別拝観	篠原陸郎	68
432	11月27日(火)	真壁・心温まる104棟と雨引観音	渡辺和照	61
433	12月8日(土)	九段・皇居・大手町(東京駅)	田端功政	65
434	平成25年1月3日(火)	新宿・山の手七福神めぐり	加藤幸一	91
435	2月23日(土)	埼玉の英雄・畠山重忠の故郷と菅谷館跡	篠原陸郎	68
436	3月25日(水)	越谷の北 林西寺～古利根の渡しと安国寺	渡辺和照	100
437	3月27日(水)	あと6年見られない陽明門を見る	宮川 進	48
438	4月27日(土)	逆川探検 逆川緑道を歩く	篠原陸郎	78
439	5月28日(火)	玉川上水(取水口)・福生・青梅	田端功政	57
440	7月28日(日)	開国、開港の地 みなと・ヨコハマ	渡辺和照	63
441	9月13日(金)	国宝「聖天山」と埼玉三偉人 「荻野吟子」「渋沢栄一」を訪ねる	篠原陸郎	81
442	10月20日(日)	越谷の原点・半日すてき旅	田端功政	36
443	11月30日(金)	晩秋の名城・八王子城跡と多摩御陵	渡辺和照	66
444	12月15日(日)	古代を偲ぶ国分寺・太古からの梓水群	篠原陸郎	37
445	平成26年1月5日(日)	千寿七福神めぐり	加藤幸一	115
446	2月28日(金)	三浦市 河津桜	田端功政	82
447	3月28日(金)	春の城下町いわつき 日光御成り道	渡辺和照	97

各種イベント実績

平成二十四年一月～平成二十六年三月

講師派遣

(1) 公民館、地区センター等関連

○桜井公民館「桜井大学校」への講師派遣

○増林地区コミセン推進協議会の「越谷の災害とその対応」講演に講師派遣

○越谷市市民活動支援課主催「外国人向け講座・もつと知りた

い！越谷」案内担当講師派遣

○大袋北交流館・地域交流作品出品

○市民活動支援センター「夏休みウォーキング・越ヶ谷宿と水

郷」案内担当講師派遣

○市立図書館郷土歴史講座講師派遣

○出羽公民館「歴史散策ウォーキング」

説明担当講師派遣

○こしがや市民大学

冬季講座「越谷吾

山と方言」講師派

遣

○南越谷公民館生涯

いきいきサロン

「郷土の話」講師派

遣



逆川たんけん 西方小学校 25年6月27日

遣

○荻島公民館「歴史散策ウォーキング」案内担当講師派遣

○荻島公民館「おぎしま生涯学習講座」館外学習への案内講師

派遣

(2) 学校への支援

○市立西方小学校4年生の「逆川たんけん」案内担当講師派遣

○蒲生南小学校職員研修のための「近隣史跡めぐり」担当講師

派遣

○市立大袋小学校4年生「逆川探検」案内担当講師派遣

○市立宮本小学校3年生「郷土学習」講師派遣

○文教大学教育学部「ゼミ実習」講師派遣

(3) その他の活動への支援

○越ヶ谷秋まつり 写真展示説明者派遣

○東彩会歴史講演会への講師派遣

○越谷市テレビ広報番組「いきいき越谷」の「越ヶ谷と越谷」

「郷土研究会について」依頼出演

○越谷市年金受給者越谷分会女性部の「越谷の歴史こぼれ話」

講演に講師派遣

○瓦曽根・ウエルフェアグリーン越谷老人会の「日光街道こぼ

れ話」講演に講師派遣

○埼玉県俳句連盟観光俳句大会（於、越谷市）の「越谷と俳句」

講演に講師派遣

○第5回協働フェスタ・パネルディスカッション「みんなで一

緒にまちづくり」パネリスト派遣

○第1回日光街道宿場町サミットin越ヶ谷宿 講演会の講師

およびパネリスト派遣

○越谷まつり「大野家公開」への説明担当講師派遣

○ふれあいまつり「大野家公開」への説明担当講師派遣

○第1回越ヶ谷宿の雛めぐり「ガイドツアー」案内担当講師派遣

○第2回越ヶ谷宿の雛めぐり「ガイドツアー」案内担当講師派遣

○「大道地区屋敷林を守る会」への講師派遣

○「児童対象ミステリーウォーキング」講師派遣

大間野・旧中村家イベント



越谷市大間野町一丁目

一〇〇番地四 大間野町

旧中村家は江戸時代に旧大間野村（越谷市大間野町）の名主を勤めた中村氏の旧宅で、平成九年越谷市が寄贈を受け、建築当初の姿に復元したものである。敷地内には主屋、長屋門、石蔵、土蔵があり、いずれも現在では失われつつある伝統的な建築技法と、古材を出来る限り再利用して復元している。

当会では、この中村家において年間を通じて様々なイベントを行っている。

（平成二十三年度）

ひな人形作り

平成二十四年二月二十五日（土）

講師 宮内和代 理事

越谷市教委共催

（平成二十四年度）

夏休みちよつと大きめの吊り人形作り

平成二十四年八月二十五日（土）

講師 宮内和代 理事

越谷市教委共催

懐かしい歌でお月見

平成二十四年九月三十日（日）

越谷大正琴協会共催 降雨により中止

昔あそびとお団子作り

大間野旧中村家住宅開館記念イベント

平成二十四年十一月十四日（木）

越谷市教委共催

お正月飾り一紙で作る飾り

平成二十四年十二月九日（日）

講師 宮内理事

ひな人形作り

平成二十五年二月十七日（日）

講師 宮内理事

（平成二十五年年度）

大正琴の音とお団子でお月見

平成二十五年九月十九日(木)

越谷市教委・大正琴協会と共催

わりばし絵手紙初歩講座

第一回 十月三十日(水)

第二回 十一月二十日(水)

第三回 十二月四日(水)

講師 小泉平八郎 参事

昔あそびとお汁粉づくり

平成二十五年十一月十四日(木)

大間野旧中村家開館記念イベント

越谷市教委・越谷市茶道協会共催

市長のふれあい訪問

平成二十五年二月十九日

越谷市民支援活動センター

高橋市長に当会の活動を

パワーポイントにより説

明 懇談会

第1回 日光街道 サミット in 越ヶ谷 宿

平成二十四年七月七日 越

谷市役所1階ロビー



市長のふれあい訪問 25年2月19日

あたなに挑戦する「一万円博物館」を出品

歴史講演会

楽しい日光街道宿場町越谷を作るヒント

平成二十四年一月二十九日(日) 越谷産業会館

常磐大学大学院 准教授 塚原正彦氏

日光街道物語

平成二十四年六月二十四日(日) 越谷産業会館

埼玉県立歴史と民俗の博物館 学芸主幹 杉山正司氏

越谷名物 焼き米とせんべい

平成二十四年八月十八日(土) 越谷市中央市民会館

西部文理大学客員教授 食文化研究家 永山久夫氏

江戸時代の絵から読み解く大名行列

平成二十五年一月二十七日(日) 越谷産業会館

國學院大学教授 根岸茂夫氏

日光街道三番目の宿場越谷 「気付いていないおタカラ・ヒト

を呼べるお宝が・こんなにいっぱい」

平成二十五年六月二十三日(日) 越谷産業会館

埼玉県立近代美術館 伊豆井秀一氏

古文書から読む おりせさん

(平田篤胤夫人)の家計・苦勞ばなし

平成二十六年一月二十六日 越谷産業会館

「近世の主婦」についての研究者 横山鈴子氏

三ノ宮卯之助の力石 文化財指定記念講演会

平成二十六年三月十五日(土)

元・越谷市文化財調査委員 当会常任顧問 高崎力氏

越谷の歴史を学ぶ会

講師 高崎力常任顧問 市民活動支援センター

- | | | |
|------|----------------|-----------|
| 第一回 | 越谷市史編さんの頃の思い出 | 平成二十四年十二月 |
| 第二回 | 越谷の船渡張子と砂原張子 | 平成二十五年 一月 |
| 第三回 | 越谷と鴨 | 二月 |
| 第四回 | 大沢町界隈こぼれ話 | 三月 |
| 第五回 | 日光街道の商店あれこれ | 四月 |
| 第六回 | 卯之助の力石を探し求めて | 五月 |
| 第七回 | 越谷に中学校ができたころ | 六月 |
| 第八回 | 越谷における東武鉄道の発展 | 七月 |
| 第九回 | 戦中・戦後、越谷のくらし | 九月 |
| 第十回 | 越谷出身の力士と行司 | 十一月 |
| 第十一回 | 越谷特産・太郎兵衛糰 | 十二月 |
| 第十二回 | 越谷出身の画家・斎藤豊作 | 平成二十六年 一月 |
| 第十三回 | 高級果物店・千足屋さんと越谷 | 二月 |

展示会関連

越谷市民文化祭

平成二十四年十一月二十二日～二十五日

越谷コミュニティセンター

- | | | |
|---|------------------|------|
| 1 | ぎょうだいま建碑の経緯について | 大谷達人 |
| 2 | 知られざるB29の綾瀬川周辺墜落 | 加藤幸一 |
| 3 | 宝永の富士山噴火、その時越谷は | 金子 寛 |
| 4 | 越谷の張子 | 高崎 力 |

- | | | |
|---|--------------|------|
| 5 | 越谷型青面金剛像庚申塔 | 秦野秀明 |
| 6 | はとバスが越谷市内を走る | 原田民自 |
| 7 | 二百年前の俳画の世界 | 宮川 進 |

平成二十五年十一月二十一日～二十四日

越谷コミュニティセンター

- | | | |
|---|---------------------|------|
| 1 | 越谷の一里塚考 | 大谷達人 |
| 2 | 野島の浄山寺周辺のかつての川筋 | 加藤幸一 |
| 3 | 瓦曾根溜井の変遷 | 篠原陸郎 |
| 4 | 越谷での関東大震災体験者の記録 | 田中利昌 |
| 5 | 四本塚(しほんいり) | 秦野秀明 |
| 6 | 越ヶ谷町百万円事件 | 原田民自 |
| 7 | 越ヶ谷久伊豆神社の一本幟旗の秘話 | 松村宏司 |
| 8 | 平田篤胤への山崎長右衛門さんからの一札 | 宮川 進 |

越谷市民まつり

第三十八回

平成二十四年十月

「一万円博物館」

第三十九回

平成二十五年九月

「渋谷コレクション」
ンゲームも携帯も
なかった時代のく
ボクのワタシの楽



市民まつり 渋谷コレクション 25年9月29日

しみ」

こしがや文化芸術祭

平成二十四年二月十九日 越谷コミュニティセンター

テーマ 「光」

- 1 光、天の岩戸から 宮川 進
- 2 越谷市内、光明真言の石塔 加藤幸一

平成二十五年二月十六日 越谷コミュニティセンター

テーマ 「雲」

- 1 描かれた越谷の雲 宮川 進
- 2 庚申塔と雲 加藤幸一
- 3 雲版 渡辺和照
- 4 呑龍さんと雲龍さん 原田民自

協働フェスタ

第四回 平成二十四年一月二十八日

第五回 平成二十五年一月二十六日

第六回 平成二十六年一月二十五日



越谷文化芸術祭 26年2月16日

河川史研究倶楽部

【平成二十五年】

往古奥州道と押立堤巡検

綾瀬川の舟運と河岸について

古隅田川巡検・事前学習会

古隅田川巡検

見沼代用水と井沢弥惣兵衛為永

利根川東遷巡検

権現堂川の謎

伊奈氏の歴代の業績

元荒川の袋山古川巡検

葛西用水について

四月四日

四月二十五日

五月二十三日

五月三十日

六月十六日

七月四日

八月一日

十月三日

十一月二十八日

十二月五日

【平成二十六年】

足尾鉾毒事件と利根川東遷

葛西用水巡検・事前学習会

葛西用水巡検

一月二十三日

二月十一日

二月二十三日

その他

平成二十五年七月二十五日～八月五日

「越谷七不思議パネル展」 市民活動支援センター

越谷市郷土研究会 会員名簿

(2014年3月28日現在 363名)

1	会田 清	44	臼倉 洋子	87	香取 世志男	130	小林 静夫
2	会田 克之	45	内田 文江	88	金子 俊	131	小林 澄子
3	青山 栄吉	46	梅澤 鳳舞	89	金子 寛	132	小林 威朗
4	青山 雄司	47	漆原 直子	90	金子 昭子	133	小林 憲子
5	浅井 明	48	榎本 紀美子	91	金子 三郎	134	小林 登
6	浅野目 美恵子	49	江森 峰子	92	金子 峯子	135	小林 光男
7	阿部 緑	50	遠藤 欣次	93	唐子 実	136	小堀 和子
8	阿部 文治	51	遠藤 七郎	94	川合 俊一	137	小松崎 登美子
9	天井 実	52	遠藤 洋	95	川上 金蔵	138	小山 淳子
10	天野 武	53	大内 登	96	川島 喜代	139	郷間 要一
11	天野 早苗	54	大内 信子	97	川瀬 米子	140	後藤 美香
12	新井 敏浩	55	大川 昌三	98	川添 ハルミ	141	斉藤 守
13	新井 美代子	56	大澤 茂	99	河原 千秋	142	斉藤 英夫
14	荒金 照登	57	大澤 義雄	100	川原 文子	143	斎野 千枝子
15	有元 淳子	58	大関 元子	101	川端 孝夫	144	酒井 正
16	安西 孝子	59	太田 紀代子	102	黄川田 仁志	145	酒井 達男
17	飯泉 信夫	60	大谷 達人	103	菊池 恵子	146	坂巻 絹江
18	飯塚 多摩子	61	太田 秀男	104	菊池 孝枝	147	坂本 梅香
19	池田 仁	62	大館 浄	105	岸 サク	148	坂本 和子
20	伊沢 伸彦	63	大塚 国治	106	北江 千代	149	坂本 誠一郎
21	石井 健治	64	大西 チエ	107	北川 善三	150	桜田 洋子
22	石川 詔一	65	大野 浩	108	北村 奈於美	151	佐々木 一磨
23	石垣 李枝子	66	大野 悦治	109	貴田 陽一	152	佐々木 貫次
24	石黒 茂	67	大野 保司	110	木原 徹也	153	佐竹 春江
25	石塚 しず江	68	大橋 政子	111	木村 恵仲	154	佐藤 弘二
26	石山 博	69	大保 喜世子	112	工藤 迪子	155	佐藤 修實
27	石山 美恵子	70	大港 信作	113	熊谷 正博	156	佐藤 光夫
28	石渡 ミチ	71	岡本 金夫	114	倉持 唯枝子	157	佐藤 佳美
29	泉 雅彦	72	小川 康治	115	黒田 恵子	158	沢田 清子
30	和泉 守	73	小川 正雄	116	桑野 昌	159	沢辺 文子
31	磯谷 知子	74	尾川 芳男	117	小泉 平八郎	160	首藤 久枝
32	市川 巳隆	75	小河原 政子	118	甲田 美恵子	161	庄司 勝美
33	伊藤 貴美	76	荻野 功夫	119	越村 英雄	162	篠塚 義雄
34	井上 瑳久江	77	小曾川 弘美	120	小島 徹	163	篠原 英弥
35	井上 敏雄	78	小野 肇	121	小島 千代	164	篠原 陸郎
36	井橋 義夫	79	小野 博康	122	小島 照枝	165	柴崎 巳代子
37	岩下 恵子	80	小野 了子	123	小島 久枝	166	渋谷 正芳
38	岩瀬 静江	81	小原 祐美	124	小沼 登茂子	167	島田 俊二
39	岩根 富子	82	小原 勘三郎	125	小井川 秋江	168	島津 八千代
40	岩間 弘行	83	加地 勝	126	小林 了	169	島根 岱助
41	岩本 勝義	84	加藤 幸一	127	小林 かつよ	170	清水 初江
42	上原 尚章	85	加藤 富士代	128	小林 清子	171	霜田 喜美枝
43	牛込 はる子	86	加藤 雅子	129	小林 孝義	172	管 清子

173	菅波 昌夫	221	堤竹 宏吉	269	長谷川 久一	317	武者 ミツ子
174	須賀 由紀子	222	角田 久	270	長谷川 義夫	318	村上 瀏治
175	菅原 貞良	223	津山 正幹	271	秦野 秀明	319	村田 晴夫
176	杉浦 健之	224	寺田 一代	272	八本 澄子	320	望月 たけし
177	杉渕 真喜子	225	寺田 桂子	273	浜 富雄	321	望月 よし江
178	鈴木 康礼	226	照井 正子	274	浜島 はじめ	322	森崎 征男
179	鈴木 進志	227	東條 悦子	275	浜野 肇	323	森田 傳一
180	鈴木 竹美津	228	常盤 安英	276	早川 操	324	森田 三男
181	鈴木 恒雄	229	豊島 外二郎	277	林 慎一	325	守屋 不二夫
182	鈴木 照子	230	殿木 美枝子	278	原澤 幸男	326	八木橋 妙子
183	鈴木 秀俊	231	殿山 悦三	279	原田 民自	327	矢口 博孝
184	鈴木 弥七	232	富澤 康雄	280	平田 道昭	328	矢野 一生
185	鈴木 康央	233	富原 千恵子	281	福井 勝衛	329	矢野 美保子
186	鈴木 陽江	234	友田 茂野	282	福井 恵子	330	八尋 信子
187	関 隆三	235	鳥井 久美子	283	福田 ふく	331	山口 正夫
188	関根 百里	236	豊田 重	284	藤井 佐登子	332	山口 みどり
189	関根 正子	237	豊田 益子	285	藤川 吉洋	333	山崎 瑞子
190	染谷 高行	238	豊田 勇毅	286	藤田 浩行	334	山崎 孝二
191	高崎 力	239	豊原 錠茲	287	藤田 日出男	335	山崎 弘治
192	高野 栄次郎	240	内藤 英三	288	藤田 佑子	336	山崎 定治
193	高橋 将介	241	内藤 録次	289	藤原 治郎	337	山崎 ミツ
194	高橋 志津子	242	中井 丈夫	290	藤原 征司	338	山下 雪江
195	高橋 とき	243	仲井 美智子	291	古田 美雄	339	山本 昭
196	高橋 信子	244	中澤 元紹	292	古谷 京子	340	山本 昇
197	高橋 美佐子	245	中沢 正夫	293	北江 千代	341	山本 一夫
198	高橋 康浩	246	中島 栄子	294	堀井 静枝	342	山本 希八
199	高山 はつ	247	中島 喜美子	295	堀井 博之	343	山本 妙子
200	瀧田 雅之	248	中妻 祐子	296	堀内 操	344	山本 房子
201	田口 正信	249	中野 鉄雄	297	堀越 正夫	345	山本 正乃
202	竹内 喜昭	250	中村 敵	298	本銚 文子	346	山本 泰秀
203	竹村 克男	251	中村 幹子	299	坊野 清之	347	柚原 一友
204	竹谷 フミ子	252	永井 勇雄	300	前田 和子	348	吉川 輝男
205	田中 かよ子	253	永作 公道	301	増岡 武司	349	吉田 恵美
206	田中 民江	254	長瀬 由木夫	302	増田 僖子	350	吉田 和子
207	田中 直子	255	名倉 三津枝	303	増田 好子	351	吉田 恵子
208	田中 ひで美	256	新野 トモ子	304	松浦 節也	352	吉野 夫美子
209	田沼 隆司	257	新納 桂	305	松岡 敏彦	353	吉野 理津子
210	田端 功政	258	西 昌代	306	間野 栄一	354	蓬田 敏昌
211	田畑 嘉雄	259	西川 信徹	307	三浦 孝勇	355	楽の蔵 安田恵三
212	田部井 明	260	西川 峰雄	308	水上 清	356	六本木 健志
213	田部井 久能	261	西沢 恒衛	309	水谷 光子	357	若原 治夫
214	多羅尾 義之	262	西島 孝	310	峰 孝久	358	鷺津 よし子
215	智田 美智子	263	西中 駿一	311	宮内 和代	359	渡辺 和照
216	千原 真理	264	野口 祐許	312	宮川 進	360	渡辺 千晶
217	塚田 照男	265	野尻 敬子	313	宮下 孝雄	361	渡辺 久剛
218	塚田 みな子	266	野村 勝八	314	宮原 泰介	362	渡辺 景子
219	塚本 昭	267	服部 正一	315	宮原 千恵子	363	和田 尚之
220	土川 博子	268	芳賀 登美子	316	向井 真理子		

NPO法人 越谷市郷土研究会 役員

平成25年(2013)7月～平成27年(2015)6月

常任顧問	高崎 力		
顧問	増岡 武司	加藤 幸一	
会長	宮川 進		
副会長	渡邊 和照		
幹事	田部井久能	服部 正一	西島 孝
常任理事	青山 榮吉	新井 敏浩	篠原 陸郎
	田端 功政	原田 民自	
理事	臼倉 洋子	小河原政子	坂本誠一郎
	渋谷 正芳	長谷川義夫	秦野 秀明
	藤川 吉洋	古谷 京子	水谷 光子
	森田 三男	山口 正夫	
参事	小泉平八郎	小林 光男	福井 勝衛
	藤田 浩行	山本 希八	
監事	島根 岱助	峰 孝久	

NPO法人 越谷市郷土研究会 実行委員

平成25年(2013)7月～平成27年(2015)6月

岩本 勝義	唐子 実	川端 孝夫	沢辺 文子
田部井 明	豊田 益子	中村 幹子	芳賀登美子
藤田 佑子	森田 傳一	山崎 ミツ	和田 尚之

NPO法人 越谷市郷土研究会 会友

小原勘三郎	木原 徹也	佐藤 光夫	菅波 昌夫
鈴木 秀俊	高山 はつ	堤竹 宏吉	水上 清

会報「古志賀谷」掲載基準

会報掲載の混乱・異同をさけるため、基準を設ける。

一、会員・会員外の原稿を受けつける。

原稿は、越谷につながるもので、原則として独自性のあるものとする。

二、原稿の字数は次の各号とする。

(ア) 調査・研究の記録は、字数制限はしない。

(イ) 紀行・随筆は、二千字程度とする。

三、次の各号に該当する原稿は編集委員会で掲載の可否を審議する。

(ア) 特定の政治的主張、または政党勢力拡大を内容とする原稿。

(イ) 特定の宗教を流布し、または勧誘する内容を含む原稿。

(ウ) 営利を目的とする内容を含む原稿。

(エ) 差別の内容を含む原稿。

(オ) 戦争賛美を内容とする原稿。

(カ) 他人への中傷を内容とする原稿。

(キ) その他、特定の意図を含む原稿、または穏当を欠く原稿。

四、第三者の調査・研究・報告・書籍を引用するときは原則として著者名・書名・出版社名・出版年度を明記する。

五、会員名簿は、氏名のみを掲載する。個人情報保護のため、住所・電話番号は掲載しない。

六、本基準の変更は、理事会の議決を経るものとする。

付則 本基準の施行は、平成二十一年六月三十日とする。

追悼

当会に多大の貢献をいただきました前会長・谷岡隆夫氏は、平成二十五年十二月二十七日、ご逝去されました。ここに慎んでお悔やみを申し上げます。

編集後記

一年おきに発行しています会報「古志賀谷」も、第十七号を刊行する運びとなり、寄稿していただいた皆様をはじめ、編集委員の方々のご協力を心より感謝申し上げます。

次年度(平成二十六年)は、当会の発足五十周年にあたり、様々な記念イベントを予定しています。今後共、皆様のあたたいご支援をお願いいたします。

編集委員会

編集委員長	原田民自	加藤幸一
編集委員	青山栄吉	田部井久能
"	坂本誠一郎	西島孝
"	豊田益子	森田三男
"	秦野秀明	

会報「古志賀谷」第十七号

発行日 平成二十六年(二〇一四)三月

発行者 NPO法人 越谷市郷土研究会

代表者 宮川進

印刷所 カワカミ印刷

埼玉県越谷市南荻島四三三七

